

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第185集

仁沢瀬遺跡群発掘調査報告書

国道46号稲荷前バイパス関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第185集
 仁沢瀨遺跡群発掘調査報告書 正誤表

P	L	誤	正
25	29	黒褐色に・・・	黒褐色 <u>土</u> に・・・
26	27	外反ものと・・・	外反 <u>する</u> ものと・・・
39	2	ヘラミガ <u>半</u> 調整が・・・	ヘラミガ <u>半</u> 調整が・・・
76	26	くびて口縁部に・・・	くび <u>れて</u> 口縁部に・・・
77	31	<u>掘</u> 込みによる・・・	<u>掘</u> 込みによる・・・
78	19	<u>次</u> ぎのような・・・	<u>次</u> のような・・・

仁沢瀬遺跡群発掘調査報告書

国道46号稲荷前バイパス関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所にも及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な施策であります。特に、幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されているところであります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書の仁沢瀬遺跡群は、雫石町から盛岡市へ東流する雫石川北岸の高位段丘上に立地しております。発掘調査により、縄文時代の狩り場跡、古墳時代中期の墓壇群が発見されました。岩手県では、古墳時代中期の葬制に関する資料は少なく、この時代の研究史上貴重な資料を得ることができました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました滝沢村教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成5年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 工藤 巖

例 言

1. 本報告書は、岩手県岩手郡滝沢村大釜字仁沢瀬2ほかに所在する仁沢瀬遺跡群の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、建設省東北地方建設局による国道46号稲荷前バイパス建設工事に伴い、遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的に実施した緊急発掘調査である。調査は、建設省東北地方建設局岩手工事事務所と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び遺跡調査略号は、次のとおりである。

遺跡番号 LE14-0127 遺跡調査略号 NS-91

盛岡市繁字山根211ほか	板橋II遺跡 (I区)
岩手郡滝沢村大釜字仁沢瀬2ほか	仁沢瀬I遺跡 (II区)
岩手県雫石町第24地割字仁佐瀬6ほか	仁沢瀬II遺跡 (III区)
岩手郡滝沢村大釜字吉水104ほか	中道II遺跡 (IV区)

4. 発掘調査面積は5,300㎡であり、野外調査は、平成3年5月8日～7月31日まで実施した。室内整理は平成3年12月1日から平成4年3月31日まで実施した。
5. 発掘調査は、藤村敏男・斎藤實、報告書の作成は斎藤實が担当した。
6. 遺跡の基準点測量は東日本測量設計株式会社、鑑定は石質鑑定を佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）、黒曜石鑑定は薬科哲男氏（京都大学原子炉実験所）に依頼した。
7. 本報告書作成にあたり、次の方々から御指導、御助言を頂いた。（敬称略）
昆野靖（岩手県立総合教育センター）、高橋信雄・佐々木勝・佐藤嘉広（岩手県立博物館）、八木光則・千田和文・室野秀文（盛岡市教育委員会）、桐生正一・井上雅孝（滝沢村教育委員会）、宮裡泰時・大野憲司・利部修・小林克・高橋学・高橋志彦・武藤祐浩（秋田県埋蔵文化財センター）、秋元信夫（秋田県鹿角市教育委員会）、高橋理・田村俊之・豊田宏良（千歳市教育委員会）、高橋正勝・上屋真一・松谷順一（恵庭市郷土資料館）、直井孝一・野中一宏・稲垣和幸（江別市郷土資料館）、太田敏量（北網圏北見文化センター）
8. 野外調査にあたり、滝沢村教育委員会、滝沢村の方々には作業員として御協力をいただいた。
9. 土層観察及び出土遺物の色調観察は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1967）を参考にした。
10. 本報告書に掲載した実測図の縮尺については、各図中にスケールを付した。写真図版の縮尺は不定である。実測図の凡例については、『II. 調査方法及び整理方法』に掲載している。
11. 調査段階で「III C 4 \dot{h} 土壌」と発表したが、整理段階で「III C 4 \dot{h} 土壌」と名称変更した。
12. 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序

例言

〈本 文 目 次〉

I 調査に至る経過	3	3 焼土遺構	48
II 調査方法と整理方法		V 遺構外出土遺物	
1 野外調査	3	1 土 器	51
2 室内整理	4	2 石 器	64
III 遺跡の立地と環境		VI まとめ	
1 地形と立地	6	1 縄文時代について	
2 地質	6	(1) 竪穴住居跡	75
3 基本層序	7	(2) 陥し穴状遺構	75
4 周辺の遺跡	7	2 古墳時代について	
IV 検出された遺構と遺物		(1) 土墳墓	76
1 縄文時代の遺構		(2) 遺物	78
(1) 竪穴住居跡	22	3 むすびにかえて	79
(2) 陥し穴状遺構	23	仁佐瀬遺跡出土の黒曜石製遺物の	
2 古墳時代の遺構	36	石材産地分析	82

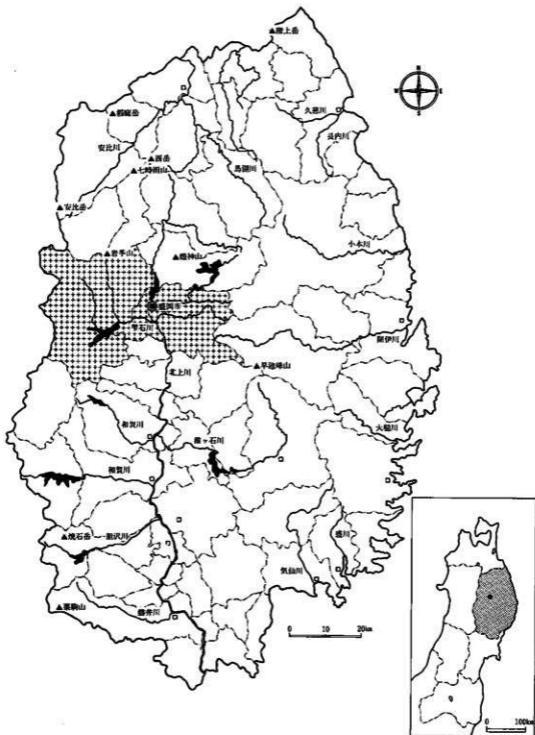
〈図 版 目 次〉

第1図 岩手県全区にみる遺跡の位置	1	第13図 I B 9 a 陥し穴状遺構	25
第2図 遺跡位置図	2	第14図 I B 7 b 陥し穴状遺構	26
第3図 基本層序	7	第15図 II A3f・II A2g 陥し穴状遺構	27
第4図 遺跡群の位置と地形	11	第16図 II A3h-1・II A3h-2 陥し穴状遺構	28
第5図 遺構配置図	13	第17図 II B3c-1・II B3c-2・II B3d 陥し穴状遺構	29
第6図 III C 区土墳配置図	15	第18図 II B 3 g 陥し穴状遺構	31
第7図 周辺の遺跡分布図	17	第19図 IID 2 b 陥し穴状遺構	31
第8図 III C 2 b 竪穴住居跡	22	第20図 IID 2 d 陥し穴状遺構	32
第9図 I A16 b 陥し穴状遺構	23	第21図 IID 4 d 陥し穴状遺構	32
第10図 I A17 b 陥し穴状遺構	24	第22図 IID 3 e 陥し穴状遺構	33
第11図 I A14 d 陥し穴状遺構	24	第23図 III B 5 f 陥し穴状遺構	33
第12図 I A13 f 陥し穴状遺構	25	第24図 III C 4 e 陥し穴状遺構	34

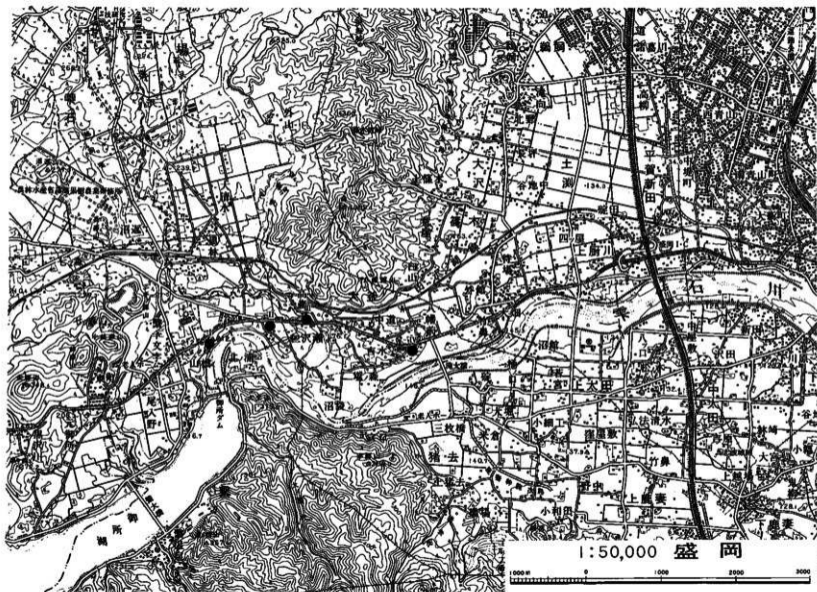
第25図	ⅢC 4 f 陥し穴状遺構	35	第41図	ⅢC 3 i 焼土遺構	51
第26図	ⅢC 5 i 陥し穴状遺構	35	第42図	遺構外出土遺物 土器(1)	58
第27図	ⅢC 2e・ⅢC 3e-2 土壌・出土遺物	36	第43図	遺構外出土遺物 土器(2)	59
第28図	ⅢC 2e・ⅢC 3e-1・ⅢC 3e-2 土壌	37	第44図	遺構外出土遺物 土器(3)	60
第29図	ⅢC 4 f 土壌	38	第45図	遺構外出土遺物 土器(4)	61
第30図	ⅢC 2 g 土壌	39	第46図	遺構外出土遺物 土器(5)	62
第31図	ⅢC 4 g-1・ⅢC 4 g-4 土壌・出土遺物	40	第47図	遺構外出土遺物 土器(6)	63
第32図	ⅢC 4 g-2 土壌	42	第48図	遺構外出土遺物 石器(1)	67
第33図	ⅢC 4 g-3 土壌	43	第49図	遺構外出土遺物 石器(2)	68
第34図	ⅢC 3 h-1・ⅢC 3 h-2 土壌・出土遺物	44	第50図	遺構外出土遺物 石器(3)	69
第35図	ⅢC 5 h 土壌	45	第51図	遺構外出土遺物 石器(4)	70
第36図	ⅢC 4 h 土壌・出土遺物	46	第52図	遺構外出土遺物 石器(5)	71
第37図	ⅡA 3 c 焼土遺構	48	第53図	遺構外出土遺物 石器(6)	72
第38図	ⅡA 3 f 焼土遺構	48	第54図	遺構外出土遺物 石器(7)	73
第39図	ⅢC 1 d 焼土遺構	49	第55図	遺構外出土遺物 石器(8)・石製品	74
第40図	ⅢC 5 e 焼土遺構	49	第56図	陥し穴状遺構概念図	75

〈写真 図版〉

図版 1	調査区Ⅰ区全景	93	図版16	土壌 (4)	108
図版 2	調査区Ⅱ区全景	94	図版17	焼土遺構	109
図版 3	調査区Ⅲ区全景	95	図版18	遺構内出土遺物 土器(1)	110
図版 4	調査区Ⅲ区全景	96	図版19	遺構外出土遺物 土器(2)	111
図版 5	調査区Ⅳ区全景	97	図版20	遺構外出土遺物 土器(3)	112
図版 6	ⅢC 2 b 竪穴住居跡	98	図版21	遺構外出土遺物 土器(4)	113
図版 7	陥し穴状遺構 (1)	99	図版22	遺構外出土遺物 土器(5)	114
図版 8	陥し穴状遺構 (2)	100	図版23	遺構外出土遺物 土器(6)	115
図版 9	陥し穴状遺構 (3)	101	図版24	遺構内・遺構外出土遺物 石器(1)	116
図版10	陥し穴状遺構 (4)	102	図版25	遺構外出土遺物 石器(2)	117
図版11	陥し穴状遺構 (5)	103	図版26	遺構外出土遺物 石器(3)	118
図版12	陥し穴状遺構 (6)	104	図版27	遺構外出土遺物 石器(4)	119
図版13	土壌 (1)	105	図版28	遺構外出土遺物 石器(5)	120
図版14	土壌 (2)	106	図版29	遺構外出土遺物 石器(6)	121
図版15	土壌 (3)	107	図版30	遺構外出土遺物 石器(7)石製品	122



第1図 岩手県全図



第2圖 遺跡位置圖

I. 調査に至る経過

一般国道46号は、岩手県の県都盛岡市から秋田県との境をなす奥羽山脈を越えて、国道13号に合流して秋田市に通じる主要幹線道路である。

盛岡市に隣接する滝沢村大釜と雫石町は、近年宅地開発が進み、また雫石スキー場・雫石温泉郷・小岩井農場などの観光地が整備されたことと相まって、国道46号の交通混雑の解消が課題となってきた。このため昭和47年に稲荷前バイパス改築事業として道路改良が事業化された。その後、平成5年2月にアルペンスキー世界選手権大会が雫石町で開催されることとなり、道路の拡幅を含む改良工事は緊急の施策となった。

工事区間に存在する埋蔵文化財包蔵地については、平成2年12月に岩手県教育委員会文化課によって試掘調査が実施され、建設省岩手工事事務所と岩手県教育委員会との調整によって、平成3年度における岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とした。これを受けて、当埋蔵文化財センターは平成3年5月7日付けの委託契約にもとづいて調査に着手することとなった。

II. 調査方法と整理方法

1 野外調査

(1) 調査区の設定 (第3図)

調査区は、道路拡幅予定地に沿って緩やかな曲線を描き、I区が南北5～12m、東西約125m、II区が南北12～18m、東西約130m、III区が南北8～29m、東西約130m、IV区が南北1～16m、東西約15mと東西に細長く伸びている。基準線となる中心線は可能な限り調査区内に含まれるように、任意の2点に設定した。その間隔は50mである。

基準点測量の結果、基準点1・2・3の平面直角座標第X系による成果値、及び杭高(H)は以下のとおりである。

基準点1	X = -33364.053m	Y = 18230.681m	H = 175.281m
基準点2	X = -33373.690m	Y = 17755.705m	H = 194.828m
基準点3	X = -33560.139m	Y = 16992.301m	H = 210.748m

グリットの設定にあたって、調査区を大きく4ブロックに分割し、それぞれをI区、II区、III区、IV区とした。次に平面直角座標第X系から基準点間の直線より、基準線が磁北線を示し、かつ東西の基準線に直交する数値を割り出した直線を基準線とした。この基準線に直交する東西を50mのA・B・C・Dの大グリット、さらに5mごとの小グリットに区面し、南北を5m

毎に区画した。グリットは東から西へa～jを与え、北から南へ1～18、IA2d・IID5e・IIIC6aなどのように呼称した。

(2) 掘掘り

調査開始当初、各調査区の北側に東西方向に2×10mのトレンチを5mおきに設定し、表土を10～20cm除去し、その後III層まで掘り下げた段階で、遺構の検出及び遺物の出土状況を確認した。さらに、東西方向のトレンチに直交して2×5mのトレンチ4本を設定した。その結果、I区では、A地区の西側は大きな沢状の落ちこみがあり、遺構の上部が流失などにより削平されていること、東側B地区は比較的遺構の残存状況の良好なことが確認された。II区では、西側のA・B地区は比較的遺構の残存状況の良好なこと、D地区は造成などにより遺構の上部が削平されてやや残存状況が良好でないことが確認された。III区では、西側A地区はB地区に向かう大きな沢への傾斜が、B地区は北西からの大きな沢の落ちこみとともに、東側C地区からの段丘状の上部が削平されていることが確認された。東側C地区の丘陵部は、表土が比較的浅く、遺物が多量に含まれ、焼土遺構の存在が確認され、旧地形面が南側に向かって緩やかに傾斜し落ちこむことが確認された。その結果、I・II区については遺物の出土がないことから、調査区域について重機による表土除去を行った。その後、人力により検出面までの掘り下げを行い、遺構検出を行った。IV区は表土が盛土され、遺物の出土がないことから、調査区域について重機による表土除去を行い、その後、人力により検出面までの掘り下げと重機による埋土除去を並行して行った。発掘調査にあたっては、調査区域外に土捨て場を確保出来ないため、遺構のない区域に埋め戻して調査を行った。

(3) 遺構の検出・遺構の命名

調査区全域が開田などのためにかなり削平され、遺構があっても遺存状況が良好でないことは当初から予想された。検出された遺構の大部分は、その上面が削平をうけており、遺構の検出面が、本来の構築面を示すものではない。遺構名は、グリット名を付して遺構名とした。

竪穴住居跡	土塼	陥し穴状遺構	焼土遺構
IIIC2b住	IIIC4g土塼	IA5j陥し穴状遺構	IIIC5d焼土遺構

(4) 精査と実測

竪穴住居跡、陥し穴状遺構、土塼、焼土遺構は2分法で精査を実施した。遺構実測図は、平面実測はグリット軸に合わせて、1mメッシュを基本とする簡易的な遣り方を設定し、20分の1の縮尺を用いて行った。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

(5) 写真撮影

野外調査における写真撮影は、35mm判2台（モノクロ、カラー・リバーサル）と6×7cm判モノクロ1台を使用した。

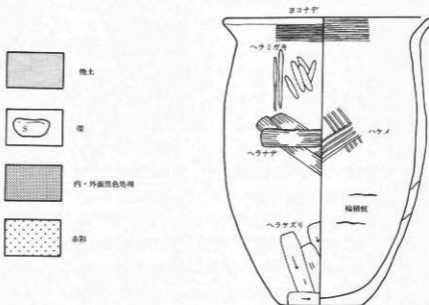
2 室内整理

(1) 作業内容

遺物の処理は、水洗とラベルの記入を行い、種類別に仕分け・接合復元・実測・トレース・拓本・写真撮影の順に作業を実施した。

(2) 図版

遺構の実測図の縮尺は、竪穴住居跡は60分の1、土壌は30分の1、陥し穴状遺構は60分の1、焼土遺構は30分の1の縮尺である。方位は磁北を示す。遺物実測図の縮尺は、土器実測図は原寸、2分の1、土器拓影は原寸、2分の1、3分の1、石器は原寸、2分の1、3分の1、石製品は2分の1である。写真図版の縮尺は不定である。遺物に付した番号は、土器・石器は各種別に連番とした。なお、図版番号と写真図版番号は同一である。



掲載図版凡例

III 遺跡の立地と環境

1 地形と立地 (第1・2・4図)

仁沢瀬遺跡群は、岩手県盛岡市繁字山根、岩手県岩手郡雫石町字仁佐瀬、岩手郡滝沢村大釜字仁沢瀬、岩手郡滝沢村大釜字吉水地内に所在する。調査区I区の南西約1kmの雫石川上流に御所ダムがあり、蔭内遺跡や塩ヶ森遺跡など多くの遺跡がダム建設とともに発見調査された。

遺跡群は、仁沢瀬地区において北西から南東に雫石川の支流となる芋樋沢が流れ、小岩井丘陵地の南方向から東方向、雫石川北岸の河岸段丘上に立地し、盛岡市山根地区、雫石町板橋・仁佐瀬地区、滝沢村仁沢瀬・吉水地区は雫石川北岸に存在する。また、遺跡群は東日本旅客鉄道田沢湖線小岩井駅の南東約3.2km～南約1.2km付近の範囲、国道46号沿いに位置する。標高はI区(板橋II遺跡)が210～212m、II区(仁沢瀬I遺跡)が191～193m、III区(仁沢瀬II遺跡)が175～179m、IV区(中道II遺跡)が151～153mである。雫石川の現河床との比高差は、盛岡市山根地区50～60m、雫石町・仁佐瀬地区40～50m、滝沢村仁沢瀬地区20～30m、滝沢村吉水地区10～30mである。調査区の現況は、I・II・IV区が畑地、III区が畑地と宅地である。

遺跡群の範囲には、板橋I～IV遺跡、仁沢瀬I～IV遺跡、高森遺跡、中道I～IV遺跡などが含まれる。

2 地質

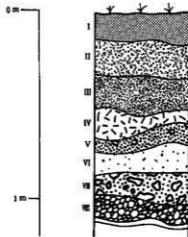
遺跡群を含む盛岡市西部と滝沢村の地形・地質を概観すると、滝沢村の北西端に標高2,039mの岩手山があり、東側に北上川とその支流諸葛川、南端に雫石川とその沖積平野がある。西方には新第三系よりなる藤木山地・沼森山地、第四紀火山岩よりなる岩手山地・鞍掛山山地がたつらなり、南西側には小岩井台地が存在し、現在の滝沢村役場を含む周辺地区は「滝沢台地」と称されている。この両台地は、岩手山を給源とする火砕流堆積物から成り、その上位に火山灰層を載せている。滝沢台地は新岩手山形成以前に噴出流下したスコリア層火砕流堆積物によって台地の原形を形成したといわれ、台地は、下流より浸食谷が入り込み開析されている。

遺跡群の載る地形面を構成する地層は、小岩井丘陵地を含む雫石台地と称され、新岩手山形成期に噴出した火砕流(小岩井泥流)堆積物によって台地の原形を形成した小岩井泥流堆積物に相当する火山角礫岩は尾入野で層高10m以上に達する。火砕流堆積物は3m前後の火山灰層(浅民火山灰層上部以上)に覆われる雫石台地は小田台地より新しい火砕流によって形成され、小岩井台地を開析する谷は小田台地の谷壁より浅く、谷幅も狭い。小岩井地区を含む滝沢村内を流れる小河川は北上川・雫石川に合流する。これらの小河川のうち小岩井地区を流れる逢沢、芋樋沢により開析された小岩井台地上縁辺に遺跡が連続して存在する傾向が見られる。

3 基本層序 (第3図)

調査区域内では、基本的には左図に示すような層序が観察されるが、部分的には後世の擾乱・土砂の移動などにより層序の乱れる所もある。本遺跡の基本層序は以下のように大別される。

- 第I層 黒褐色～暗褐色土(10Y R2/2～10Y R3/4) シルト質土 表土
耕作土。軟らかい 層厚は10～30cm。
- 第II層 黒色～褐色土(10Y R2/1～10Y R4/6) シルト質土 遺物包含層 浮石を少量含み
堆積、軟らかい。層厚は10～20cm。
- 第III層 黒褐色～褐色土(10Y R3/2～10Y R4/6) 砂質土(ローム) 浮石・砂粒を少量含
み堆積、固く締まる。層厚は15～20cm。
- 第IV層 黄褐色土(10Y R5/6) 粘質土(ローム) 浮石を多量に含む。層厚は5～25cm。
- 第V層 褐色土(10Y R4/6) 上面に赤褐色砂粒
(スコリア)を含み
堆積、固く締まる。
層厚は5～20cm。
- 第VI層 赤褐色土(5Y R4/8) 粘性をもつ砂質土
小径の砂粒(スコ
リア)が堆積、固
く締まる。
層厚は10～20cm。
- 第VII層 灰白色～暗緑灰色土(10Y R8/2～7.5GY
4/1) 粘性をも
つ砂質土細粒の砂
粒(スコリア)が
堆積、固く締まる。
層厚は10～30cm。
- 第VIII層 段丘礫層



第3図 基本層序柱状図

4 周辺の遺跡 (第7図)

盛岡市、雫石町、滝沢村と本遺跡群を含む周辺の遺跡は岩手県の遺跡台帳に登録されているだけでも相当数になる。御所ダム建設、東北縦貫自動車道建設等の開発計画による緊急発掘調査、他方では学術調査がおこなわれ、貴重な資料が検出あるいは出土している。その中から時代ごとについていくつかを取り上げて概観するととどめたい。

旧石器時代の遺跡は、四十四田遺跡と安倍館遺跡があり、前者についてはその詳細は明らかではないが、後者については石器が表採されている。

縄文時代早草期の遺跡は、安倍館遺跡や大館遺跡群のなかの大新町遺跡がある。ともに爪形文土器が出土している。

縄文時代早期の遺跡は、大館遺跡群では押形文、沈線文の土器、仏沢Ⅲ遺跡や耳取遺跡では押形文、条痕文の土器を出土している。桜松遺跡や上八木田遺跡群の貝殻文土器は物見台式のものである。しかし、該期の遺構は大館遺跡群で竪穴住居跡と土坑が、上平遺跡で土坑が検出されたのみである。

縄文時代前期の遺跡は、猪去館遺跡では長方形の竪穴住居跡、稲久保遺跡では円筒下層式と同時に踏碓式の土器を出土している。上八木田Ⅰ遺跡では153棟の竪穴住居跡が検出されている。遺物は大木Ⅰ式からⅥ式、円筒下層Ⅰ式からⅣ式の各形式の土器が多量に出土している。仏沢Ⅲ遺跡から前期前葉に比定される県内最古の配石遺構が検出されている。同遺跡では壁際の外部に配石をもつ特殊な長方形の竪穴住居跡、集落地よりやや離れたところから配石遺構群が検出されている。耳取遺跡でも同様に配石遺構群が検出されている。

縄文時代中期の遺跡になると遺跡数は飛躍的に増加する。なかでも注目されるのは、大館遺跡で検出された竪穴住居跡群である。住居跡は、馬蹄形や環状に連なるように配置され、大木Ⅵ式からⅧ式までの長期間にわたって存在した集落である。また、柿の木平遺跡の大木Ⅷ式、堂ヶ沢Ⅰ遺跡の大木Ⅸ式、繁Ⅲ遺跡の大木Ⅹ式など、ほぼⅠ形式期に納まる遺跡も検出されている。塩ヶ森Ⅰ遺跡では大型住居跡が検出されている。上八木田Ⅰ遺跡では、検出された竪穴住居跡6棟が、わずか1m弱の近距離に並列して構築され、遺構内の東側に石柵を配るといふ共通性がみられる。繁遺跡から出土した大木Ⅷ式は重要文化財に指定され、また繁Ⅴ遺跡などからの出土土器は大木式土器文化圏と円筒式土器文化圏の問題を考察する上で好資料であり質・量とも豊富である。

縄文時代後期の遺跡は、萩内遺跡から集落構造を考察する上で貴重な遺構・遺物が検出されている。同遺跡は、平石川中流域の段丘上に立地していたが、現在は御所ダムの湖底に埋没している。遺構は、竪穴住居跡のほかに、配石を持つ墓塚群、魚撈施設の竈、階段状枕列、足跡等が検出されている。遺物は種類・質ともに貴重な資料が豊富である。なかでも、大型土偶の頭部はわが国最大といわれ、国の重要文化財に指定されている。木器、木製品も多く、漆塗りの櫛、漆塗りの弓、丸木弓、トートム・ボール状木製品、粘状木製品などが出土している。また、祭祀に関連する土製品、石製品も多く出土している。湯舟沢遺跡から竪穴住居跡のほか、遺物では子供の足形土製品など、祭祀に関わる資料が出土している。同遺跡の北に広がる湯舟沢Ⅱ遺跡からは環状列石とそれに伴う土壙群が検出され、脂肪酸分析の結果、埋葬施設である

ことが判明した。けやきの平団地遺跡では配石遺構が確認され、「コの字状」に石を並べて囲った内側に三基の墓塚に上屋をもつと推定される墓跡が検出されている。また、全国的に類例が少ない土器の表面に人体の形を表現した土器が出土している。大崎II遺跡では竪穴住居跡から祭祀に関係する土器、石製品がまとまって出土するなど、良好な資料が検出されている。

縄文時代晩期の遺跡は、本報告書の図幅には含まれていないが、北上川流域の東岸の低位段丘上に手代森遺跡がある。同遺跡は竪穴住居跡などの遺構が検出されている。また、国の重要文化財に指定された大型の遮光器土偶、祭祀に関係すると思われる遺物が出土している。雫石川流域では、繁III遺跡、猪去館遺跡から竪穴住居跡、中津川・米内川の合流点付近の落合遺跡から配石群と土坑群が検出されている。

弥生時代の遺跡数は相対的に少なく、竪穴住居跡など集落跡を示す遺構が検出されているのは湯舟沢遺跡だけである。遺物は、靱痕の付いた土器片、紡錘車などが出土している。同遺跡は弥生中期の谷起鳥式から後期の天王山式までの土器が出土しており、該期の研究には欠かせない良好な資料となっている。遺物が出土している遺跡は、北上川流域の大館堤遺跡、雫石川流域の繁IV遺跡、太田地区のオミ坂遺跡、中津川流域の銭神沢遺跡など各地域で確認されており、今後の分布調査や発掘調査の進展に伴い増加する可能性がある。

古墳・奈良時代の遺跡数は極めて少ない。永福寺山遺跡では、土壌内より後北式土器と古式土師器が出土している。また、仏沢III遺跡でも同様に焼土遺構と土壌が検出され、後北式土器と古式土師器のほか、遺構の周辺から黒曜石製の拇指状円形播種器が出土している。近年、大石渡遺跡で土壌が検出され、後北式土器、黒曜石の剥片、石製管玉が出土している。これらの遺構と遺物は、北海道から北東北地方の所謂統縄文期に見られる葬制を想起させ、該期の研究上貴重である。高柳遺跡では古墳時代末期から奈良時代初期の竪穴住居跡、北海道に起源をもつ突瘤痕のある北大III式土器とともに古式土師器が出土している。また、耳取遺跡でも古式土師器が出土している。上田蝦夷森古墳群の土壌内より出土した庇付き甕は完形品であり、武具研究および文化交流など研究史上で貴重な資料となっている。太田蝦夷森古墳群は川原石積みによる石室を持つ形態の末期古墳であり、和同開珎や銚帯金具が出土している。

平安時代の遺跡では、古代城柵官衙の研究史上重要な国指定史跡の志波城跡がある。外郭は一辺800m四方の築地塀に囲まれ、正殿跡や南大門跡の位置、外郭線から約100m内側に竪穴住居跡が密集することが確認されているが、詳細については今後の調査が待たれる。厨川柵跡は、その位置を確定するに至っていないが、擬定地とされる里館・安倍館の両遺跡では堀跡・溝跡・獨立柱建物跡などの遺構が確認されているが、いずれも中世以降とされる。本報告書の図幅には含まれていないが、近年、上八木田IV遺跡では、9世紀前半の竪穴住居跡から古刀の太刀が出土している。上八木田I遺跡では焼失した竪穴住居跡が確認され、そのうち1棟は板敷

の住居である。また、住居内から炭化した糸が出土している。けや木の平田地遺跡では、堅穴住居跡の中から鉄器のほか、鍛冶工場の施設が検出されている。仏沢遺跡では、堅穴住居跡の中から砂底土器が出土している。砂底土器は岩手県北地方以北にみられ、北方との交流を研究する上で重要な資料となる。

中世の遺跡では、里館遺跡から検出された堀跡・溝跡・掘立柱建物跡などの遺構は15～16世紀に比定され、安信館遺跡は中世工藤氏の居城厨川城跡と推定されている。繁田遺跡の一部として揚ノ館が調査されている。

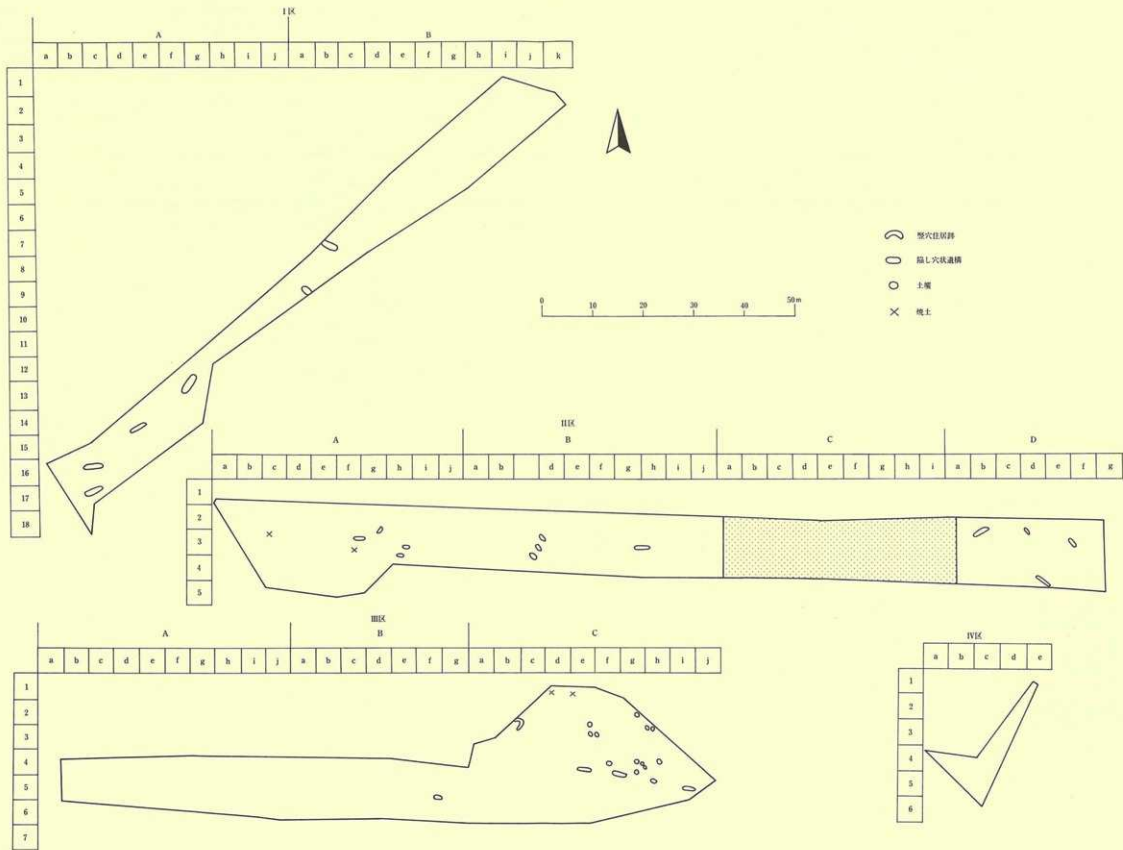
近世の遺跡は、国指定史跡の盛岡城跡がある。近年、石垣解体修理に伴う調査により、櫓跡や堀跡、石組暗渠排水路跡などが検出されている。これまでの調査から3時期の変遷が確認され、今後の調査の進展により築城の経過、構造や規模など、その詳細が解明されていくものと思われる。藩政時代の民家跡は、柿の木平遺跡、下猿田Ⅰ・Ⅱ遺跡などから曲家や礎石建物跡が検出されている。宗教に関係するものでは、永祥院経塚から享保から安永年間にわたる一字一石の経石が多数出土している。大館氏の居館跡と伝えられる大釜館跡の小土坑から、地鎮祭に屋敷の鬼門に埋めた密教法具の羯磨と輪宝を墨書きした小石が、寛永通宝（古寛永）と稻の穀殻とともに出土しており、当時の儀式、風習などを研究する上で貴重な資料が出土している。

〈引用・参考文献〉

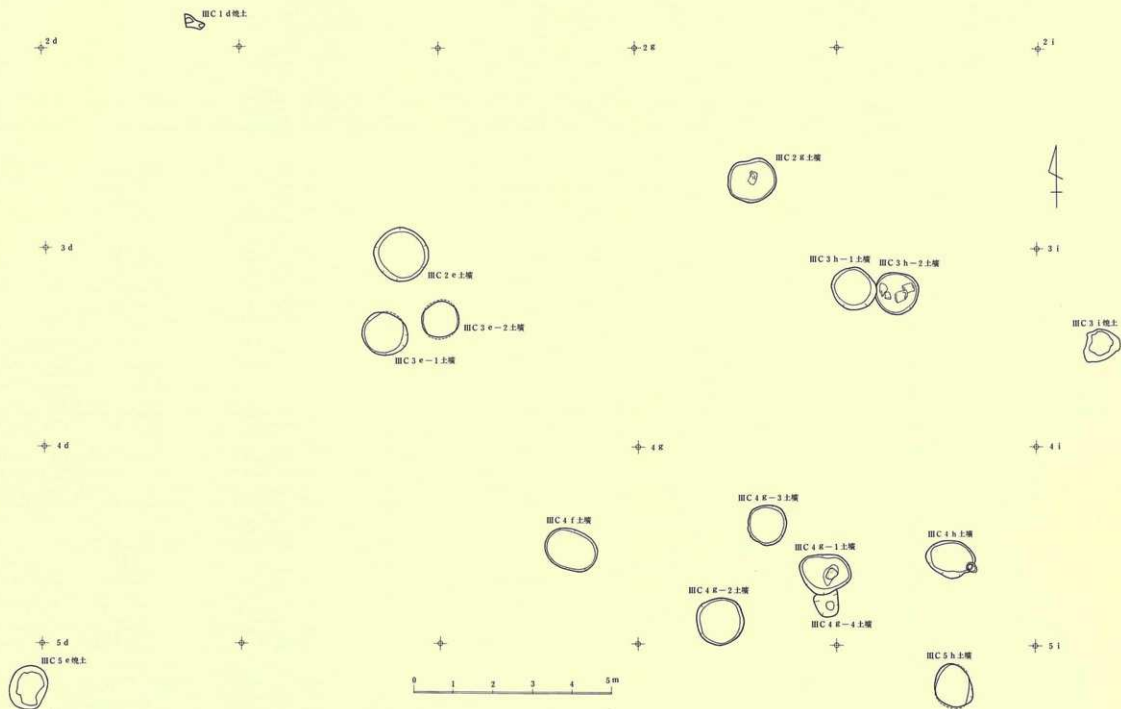
- 岩手県 (1972)：『北上山系開発地域 土地分類基本調査 盛岡』
- 桐生 正一 (1992)：『新聞記事で見る滝沢村埋蔵文化財十年の歩み』 滝沢村教育委員会
- 桐生 正一 (1987)：『高森遺跡』岩手県滝沢村文化財調査報告書第4集 滝沢村教育委員会
- 桐生 正一 (1989)：『滝沢村内遺跡 詳細分布調査報告書Ⅰ』岩手県滝沢村文化財調査報告書第10集
滝沢村教育委員会
- 桐生 正一 (1990)：『滝沢村内遺跡 詳細分布調査報告書Ⅱ』岩手県滝沢村文化財調査報告書第12集
滝沢村教育委員会
- 桐生 正一 (1991)：『滝沢村内遺跡 詳細分布調査報告書Ⅲ』岩手県滝沢村文化財調査報告書第17集
滝沢村教育委員会
- 桐生 正一 (1992)：『滝沢村内遺跡 詳細分布調査報告書Ⅳ 滝沢の遺跡』
岩手県滝沢村文化財調査報告書第21集 滝沢村教育委員会
- 経済企画庁 (1973)：『土地分類基本調査 平石』
- 中川久夫他 (1963)：『北上川上流沿岸の第四系および地形』地質学雑誌 第69巻 第811号
- 平井 進 (1992)：『上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第177集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



第4図 遺跡群の位置と地形



第5図 仁次瀬遺跡群遺構配置図



第 6 图 III C 区土壤配置图



1:50,000 盛岡

第7図 周辺の遺跡分布図

周辺の遺跡一覧表

〈滝沢村〉

番号	遺跡名	類別	遺跡・遺物	所在地	備考
1	土 沢	散布地	縄文(後期) 石斧	滝沢村滝沢字土沢	
2	中 村	散布地	土師器	滝沢村滝沢字中村	
3	飯洞山	散布地	縄文	滝沢村滝沢字平瀬沢	
4	清水原	散布地	縄文	滝沢村滝沢字高屋敷	
5	高屋敷	散布地	縄文(中期)	滝沢村滝沢字細谷地	
6	高屋敷I	散布地	縄文	滝沢村滝沢字高屋敷	
7	高屋敷IV	散布地	縄文	滝沢村滝沢字高屋敷	
8	清水原	散布地	縄文(後期)	滝沢村滝沢字清水沢	
9	外久保	散布地	縄文	滝沢村滝沢字外久保	
10	外久保I	散布地	縄文(後期)	滝沢村滝沢字外久保	
11	大 畑	散布地	縄文(新・中・晩期) 須恵器	滝沢村滝沢字清水沢	
12	大久保	ピット群	縄文	滝沢村滝沢字大久保	
13	耳 取	集落跡	縄文	滝沢村滝沢字耳取山	
14	室小路1	集落跡	平安	滝沢村滝沢字室小路	
15	室小路2	集落跡	縄文	滝沢村滝沢字室小路	
16	室小路3	集落跡	平安	滝沢村滝沢字室小路	
17	室小路4	集落跡	縄文	滝沢村滝沢字室小路	
18	室小路5	集落跡	縄文	滝沢村滝沢字室小路	
19	室小路6	集落跡	縄文	滝沢村滝沢字室小路	
20	室小路7	集落跡	縄文 平安	滝沢村滝沢字室小路	
21	室小路8	散布地	縄文(後期)	滝沢村滝沢字室小路	
22	室小路I	集落跡	平安	滝沢村滝沢字室小路	
23	穴 口	散布地	縄文(早-前期)	滝沢村滝沢字穴口	
24	穴口I	散布地	縄文	滝沢村滝沢字白石	
25	白 石	散布地	縄文(中期)	滝沢村滝沢字白石	
26	大 碓	散布地	縄文 土師器	滝沢村滝沢字大碓	
27	別当(願)斎	散布地	縄文(後期)	滝沢村滝沢字菅森	
28	菅森	散布地	縄文	滝沢村滝沢字菅森	
29	高瀬	散布地	縄文 弥生	滝沢村滝沢字石巻津島川	
30	三ヶ月神社	散布地	縄文	滝沢村滝沢字上藤岡	
31	上ノ山	散布地	縄文(中期)	滝沢村滝沢字中藤岡	
32	御飯屋山館	館跡・散布地		滝沢村滝沢字御飯田	
33	熊前塚	水跡	近世	滝沢村滝沢字竜向	
34	八人打	散布地	縄文	滝沢村滝沢字竜向	
35	大沢館	館跡		滝沢村大沢字鹿屋敷	
36	盛木エソ館	館跡・散布地	縄文(後期)	滝沢村大沢字館	
37	上盛木	散布地	縄文(中・後・晩期)	滝沢村盛木字上盛木	
38	エソ館	散布地	縄文	滝沢村大沢字館	
39	盛木田村神社	散布地	縄文	滝沢村大沢字中屋敷	
40	寺 林	館跡・散布地	縄文	滝沢村大沢字大寺林	
41	参籠ノ森	館跡・散布地		滝沢村大沢字参籠ノ森	
42	細 屋	散布地	縄文(後期)	滝沢村大沢字細屋	
43	八幡館山	館跡		滝沢村大沢字白山	
44	白 山	散布地	縄文(後期)	滝沢村大沢字白山	
45	八幡宮	塚・散布地	縄文 弥生	滝沢村大沢字釜口	
46	大釜館	塚・散布地	縄文 土師器 青磁片	滝沢村大沢字外館	
47	風林A	散布地	縄文(中・後期)	滝沢村大沢字風林	
48	風林B	散布地	縄文	滝沢村大沢字風林	
49	風林C	散布地	縄文	滝沢村大沢字風林	
50	風林D	散布地	縄文	滝沢村大沢字大清水	
51	風林I	散布地	縄文(後期)	滝沢村大沢字風林	
52	風 林	散布地	縄文(早-前期)	滝沢村大沢字風林	

番号	遺跡名	種別	遺跡・遺物	所在地	備考
53	仁沢Ⅰ	集落跡	縄文 土師器	滝沢村大釜字仁沢Ⅰ	
54	仁沢Ⅱ	土壌群	縄文 古墳中期	滝沢村大釜字仁沢Ⅱ	
55	仁沢Ⅲ	散布地	縄文	滝沢村大釜字仁沢Ⅲ	
56	仁沢Ⅳ	散布地	縄文	滝沢村大釜字仁沢Ⅳ	
57	高 森	ピット群	縄文 弥生	滝沢村大釜字高森	
58	中道Ⅰ	散布地	縄文	滝沢村大釜字中道、吉水	
59	中道Ⅱ	散布地	縄文	滝沢村大釜字中道、吉水	
60	塚ノ森Ⅰ	散布地	縄文	滝沢村大釜字竹鼻	
61	塚ノ森Ⅱ	散布地	縄文(早・前期)	滝沢村大釜字竹鼻	

〈盛岡市〉

番号	遺跡名	種別	遺跡・遺物	所在地	備考
62	茨 島	散布地	縄文(早・前期)	盛岡市副川	
63	四十四田	散布地	旧石器縄文	盛岡市上田巻屋敷	
64	上田坂夷古墳	古墳群	瓦片青	盛岡市白石野	
65	青 山	集落跡	土師器	盛岡市青山	
66	長柳町	散布地	縄文	盛岡市長柳町	
67	柳 Ⅰ	集落跡	縄文 土師器	盛岡市上柳川字福	
68	柳 Ⅱ	集落跡	土師器	盛岡市上柳川字福	
69	柳 Ⅲ	集落跡	土師器	盛岡市上柳川字福	
70	土間四ツ屋	集落跡	土師器	盛岡市土間四ツ屋、儀場	
71	大船通	集落跡	縄文(早・中期) 土師器	盛岡市大船町、南青山町	
72	大新町	集落跡	縄文(早～後期)	盛岡市大船町、南青山町	
73	前九年Ⅰ	集落跡	縄文 土師器	盛岡市前九年町	
74	前九年Ⅱ	集落跡	縄文	盛岡市前九年町	
75	安信館	館跡	堀 瓦 建物跡	盛岡市安信館町	
76	大船町遺跡群	集落跡	縄文(早・中期)	盛岡市大船町、大船町	
77	小原塚	集落跡	縄文(中期)	盛岡市南青山町	
78	権現塚	館跡	古銭 陶磁器	盛岡市天昌寺町、前九年町	
79	黒 館	館跡	古銭 陶磁器	盛岡市天昌寺町、北天昌寺町	
80	宮田南	館跡	陶磁器	盛岡市夕張町	
81	稲荷町	集落跡・館跡	近世(古銭・陶磁器)	盛岡市稲荷町、大船町	
82	高松神社裏	包含地	土師器	盛岡市高松	
83	上田山	散布地	縄文(中期)	盛岡市上田山	
84	上田塚	散布地	縄文(早期)	盛岡市上田塚	
85	宇登坂	散布地	縄文(早・中期) 土師器	盛岡市上里字登坂長根、三ツ野原の沢	
86	歳ノ神	散布地	縄文(早～中期)	盛岡市山岸	
87	新蒸屋	散布地	縄文(晩期)	盛岡市山岸	
88	イタコ塚	散布地	弥生	盛岡市山岸字合間	
89	新清水	散布地	縄文(後期)	盛岡市三ツ野字新清水	
90	道 上	散布地	土師器 須恵器	盛岡市山岸字合間	
91	道 下	散布地	縄文(中期) 土師器	盛岡市山岸字鉄神沢下	
92	合 間	散布地	縄文(早・前期) 土師器 須恵器	盛岡市山岸字合間	
93	蕃 前	散布地	縄文(早期)	盛岡市山岸字合間	
94	甘 石	散布地	縄文(晩期)	盛岡市山岸、下米内	
95	永福寺山	散布地	後北式 土師器	盛岡市下米内字寺堂	
96	大豆門	散布地	縄文(中期)	盛岡市下米内字大豆門	
97	落 合	散布地	縄文(晩期)	盛岡市下米内字落合	
98	日 向	散布地	縄文(早期) 弥生	盛岡市山岸字鉄神沢	
99	雁牛場	散布地	縄文(早・中期)	盛岡市下米内	
100	浅神沢	散布地	縄文(後・晩期) 弥生 土師器	盛岡市三ツ野	
101	寺 山	散布地	縄文(前期)	盛岡市三ツ野字寺山	
102	松橋遺	散布地	弥生	盛岡市三ツ野字愛宕山	
103	樽山田	散布地	縄文(後期)		

番号	遺跡名	種別	遺跡・遺物	所在地	備考
104	沼田	散布地	縄文(中・後期) 土師器 須恵器	盛岡市東塚山	
105	大塚	散布地	縄文(後期)	盛岡市浅岸字大塚	
106	柿水平	散布地	縄文(中期)	盛岡市浅岸字柿水平	
107	大久保	散布地	縄文(中・後期) 土師器	盛岡市東塚山	
108	藤久保	散布地	縄文(中期) 土師器	盛岡市つツヶ丘	
109	カブト畑	散布地	土師器	盛岡市浅岸字カブト畑	
110	鱒田	散布地	土師器	盛岡市上太田字鱒田	
111	中屋敷	集落跡	土師器	盛岡市上太田字中屋敷	
112	上川原	集落跡	土師器	盛岡市上太田字中屋敷	
113	松ノ木	散布地	土師器	盛岡市上太田字松ノ木	
114	館	集落跡・館跡	土師器 須恵器	盛岡市上太田字館	
115	上野原敷	散布地	土師器 陶器	盛岡市上太田字上野原敷	
116	八ヶ谷	散布地	土師器	盛岡市上太田字八ヶ谷	
117	屋敷田	散布地	土師器	盛岡市上太田字沢田	
118	新工	散布地	土師器	盛岡市上太田字新工	
119	弘法清水I	散布地	土師器	盛岡市上太田字弘法清水	
120	弘法清水II	散布地	土師器 陶器	盛岡市上太田字弘法清水	
121	蝦夷臺古墳群	散布地	陶器	盛岡市上太田字盛合、藤去米道	
122	蝦夷臺古墳群	古墳群	鉄刀	盛岡市上太田字盛合	
123	畑中	散布地	土師器	盛岡市上太田字畑中	
124	志波城跡	城跡	土師器	盛岡市上太田字方八丁、新張場	国指定史跡
125	林崎	散布地・集落跡	平安 土師器	盛岡市上太田字林崎	
126	柳青	集落跡	土師器	盛岡市本宮字柳青	
127	鬼柳	散布地	土師器	盛岡市本宮字鬼柳	
128	野古A	集落跡	土師器	盛岡市本宮字北野古	
129	猪去窟	集落跡・館跡	縄文(早・中・後期) 弥生 土師器 須恵器	盛岡市猪去畑中、猪去窟	
130	小和田	散布地	縄文(前・中・後期)	盛岡市上真字字小和田	
131	二ツ沢	散布地	縄文(中期) 土師器 須恵器	盛岡市上真字字二ツ沢	
132	オミ取	散布地	縄文(早・中・後期) 土師器	盛岡市上真字字オミ取	
133	館	集落跡・館跡	土師器 須恵器	盛岡市上太田字館	
134	竹花前	集落跡	土師器 須恵器	盛岡市上真字	
135	辻屋敷	集落跡	土師器	盛岡市下真字字辻屋敷	
136	石仏	集落跡	土師器 須恵器	盛岡市本宮字石仏	
137	大宮北	集落跡	土師器 須恵器	盛岡市本宮字大宮	
138	大宮北	散布地	土師器	盛岡市本宮字大宮	
139	大宮	集落跡	土師器 須恵器	盛岡市本宮字大宮	
140	水門I	散布地	土師器	盛岡市本宮字水門	
141	水門II	散布地	土師器	盛岡市本宮字水門	
142	小林	散布地	土師器	盛岡市本宮字小林	
143	辻屋敷	集落跡	縄文	盛岡市下真字字辻屋敷	
144	西田	集落跡	土師器 須恵器	盛岡市下真字字西田	
145	前田I	散布地	土師器	盛岡市下真字字前田	
146	前田II	散布地	土師器 須恵器	盛岡市下真字字前田	
147	飯岡	館跡	瓦	盛岡市上飯岡	
148	高橋古墳	古墳	古墳	盛岡市上飯岡	国指定史跡
149	盛岡城跡	城跡	水灌 石垣	盛岡市内丸	国指定史跡
150	山王山	散布地	縄文(中期)	盛岡市山王町	
151	小山	散布地	縄文(前・中期)	盛岡市東中野字小松沢	
152	新山館	(館跡)・散布地	須恵器 刀子	盛岡市茶畑	
153	見石	散布地	縄文(中・後期) 土師器	盛岡市東中野字見石	
154	立石	散布地	土師器	盛岡市東中野字立石	
155	二虎田	散布地	縄文(中・後期)	盛岡市東山	
156	安庭館	散布地	縄文(中・後期)	盛岡市東安庭館	
157	沢田	散布地	縄文(後・後期)	盛岡市東中野字沢田	
158	南仙北	集落跡	土師器	盛岡市南仙北	
159	角下	散布地	土師器 須恵器	盛岡市門字角下	

IV. 検出された遺構と出土遺物

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、陥し穴状遺構22基、古墳時代の土壇13基、焼土遺構5基である。

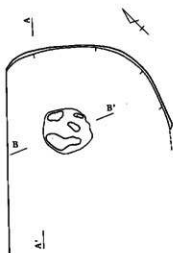
1 縄文時代の遺構

(1) 竪穴住居跡

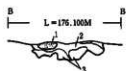
ⅢC2b 竪穴住居跡 (第8図 写真図版6)

調査区ⅢC区西部の南西向き斜面の2b・2cグリットに位置する。検出状況は、調査区西部南東向き斜面の表土除去を行ったところ、焼土が検出され、斜面上方にやや円形を呈する黒褐色土の広がりを確認し、住居跡であることが判明した。検出面はⅢ層上面である。

平面形は、斜面上にあるため遺構の南西部が流失し、西側が調査区外となるため詳細は不明であるが、おおよそ不整の円形から楕円状を呈するものと思われる。規模は、径280~300cm、壁高は北東壁で18cmであり、南西側に傾斜して壁は消滅する。壁は、全体的にはほぼ垂直に立ち上がる。床面は比較的平坦で固く締まる。埋土は浮石粒の混在するやや軟らかい黒褐色のシルト質土が主体である。炉は地床炉で、形状から推測するとはほぼ中央部に位置するものと思われる。炉の焼土は固く締まり、赤褐色土であり、層厚10~20cm、約70×78cmの範囲に広がる。柱穴は検出されていない。



1. 10YR 5/ 黒褐色 シルト やや軟らかい 炭化物・浮石混入
2. 10YR 5/ 黒褐色 シルト やや固い 褐色土塊状混入



ⅢC2b 竪穴住居跡 炉断面

1. 5YR 5/ 赤褐色 焼土 固い 浮石古
2. 10YR 5/ 暗褐色 砂質土 軟らかい 焼土部分水浸の作用で変質
3. 5YR 5/ 赤褐色 焼土 固い 浮石古

第8図 ⅢC2b 竪穴住居跡

遺構内の床面から、地文に単節斜縄文が施文され、胎土に植物性繊維を含む縄文土器片が出土しているが、脆弱であり拓本に耐えられない。石器は、炉の南東側付近の床面埋土からは、マイクロ・フレイキングが認められるフレークが出土している。

遺構の時期は出土遺物や、規模、形態などから、縄文時代に比定されるものと思われる。

(2) 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は22基検出され、I区から6基、II区から12基、III区から4基である。I区ではA地区から4基、B地区から2基、II区ではA地区から4基、B地区から4基、C地区から4基、III区ではB地区から1基、C地区から3基検出されている。

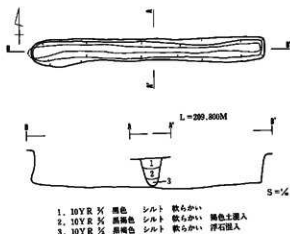
I A16 b 陥し穴状遺構 (第9図 写真図版7)

調査区I A区西部の16c・17cグリットに位置する。南側にI A17 b 陥し穴状遺構が隣接する。検出面は第IV層上面である。

開口部は削平されているが、平面形は溝状、断面形はY字状を呈すると思われる。規模は、開口部36×378cm、底部20×376cm、深さ45～55cmを測る。長軸方向はE-3°-Nを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向の西側に幾分狭り込み、側壁はほぼ垂直に立上がる。

開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反するものと思われる。埋土は、上位に酸化した浮石を含む黒色～黒褐色のシルト質土、中位から下位に固く締まる側壁の崩落土と思われる酸化した赤色、青灰色浮石が多量に混入し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。



第9図 I A16 b 陥し穴状遺構

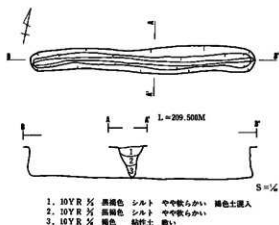
I A17 b 陥し穴状遺構 (第10図 写真図版7)

調査区I A区西部の17b・17cグリットに位置する。北側にI A16 b 陥し穴状遺構が隣接する。検出面は第IV層上面である。

開口部は削平されているが、平面形は溝状、断面形はY字状を呈すると思われる。規模は、

開口部40×358cm、底部6×348cm、深さ45～55cmを測る。長軸方向はE-13°-Nを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向の北東側に幾分挟り込み、側壁はやや内湾しながら立上がる。開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反するものと思われる。埋土は、黒褐色のシルト質土を主体に自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。



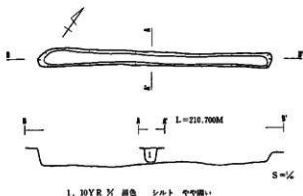
第10図 I A 17 b 陥し穴状遺構

I A 14 d 陥し穴状遺構 (第11図 写真図版7)

調査区 I A 区中央部の14 d・14 eグリットに位置する。北東側に I A 13 f 陥し穴状遺構が隣接する。検出面は第IV層上面である。

開口部は削平されているが、平面形は溝状、断面形はY字状を呈すると思われる。規模は、開口部20×372cm、底部13×352cm、深さ17～30cmを測る。長軸方向はN-55°-Eを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向への挟り込みはなく、側壁はほぼ垂直に立上がる。開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反するものと思われる。埋土は、黒色のシルト質土で自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

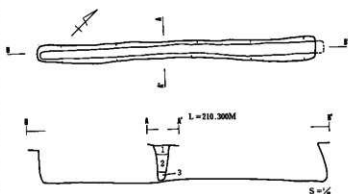


第11図 I A 14 d 陥し穴状遺構

I A 13 f 陥し穴状遺構 (第12図 写真図版7)

調査区 I A 区中央部東側の13 f・12 gグリットに位置する。南西側に I A 14 d 陥し穴状遺構が隣接する。検出面は第IV層上面である。

開口部は削平されているが、平面形は溝状、断面形はY字状を呈すると思われる。規模は、開口部26×443cm、底部14×448cm、深さ55～60cmを測る。長軸方向はN-45°-Eを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向の北東側が挟り込み、側壁はほぼ垂直に立上がる。長軸方向の側壁



1. 10Y R ㊄ 黒色 シルト やや軟らかい 褐色土混入
2. 10Y R ㊄ 黒褐色 シルト やや軟らかい
3. 10Y R ㊄ 黒色 シルト 脆い

第12図 I A 13 f 陥し穴状遺構

は角状を呈する。開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反するものと思われる。埋土は、軟らかい黒色・黒褐色のシルト質土を主体に自然堆積の様相を呈する。

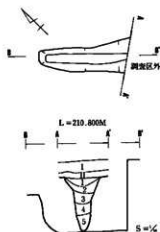
遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

I B 9 a 陥し穴状遺構 (第13図 写真図版 8)

調査区I B区西部の9 a グリットに位置する。北東側にI B 7 b 陥し穴状遺構が隣接する。検出面は第III層上面である。

遺構の南東部の一部は調査区外に伸びているため、詳細は不明である。

開口部上面は削平されているが、平面形は溝状、断面形はY字状を呈すると思われる。現状の規模は、開口部34×140cm、底部12×128cm、深さ55～60cmを測る。長軸方向はN-45°-Eを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向への挟り込みはなく、側壁はほぼ垂直に立上がる。開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反するものと思われる。長軸方向の側壁は角状を呈し、構築時についたと思われる壁の削り痕が観察できる。埋土は、上位にやや軟らかい黒褐色のシルト質土、中位から下位にやや軟らかい黒褐色に浮石が少量混在し、自然堆積の様相を呈する。



1. 10Y R ㊄ 褐色 シルト やや軟らかい
2. 10Y R ㊄ 黒褐色 シルト やや軟らかい
3. 10Y R ㊄ 黒褐色 シルト 軟らかい 褐色土少量混入
4. 10Y R ㊄ 黒褐色 シルト 軟らかい 浮石混入
5. 10Y R ㊄ 黒褐色 シルト 軟らかい

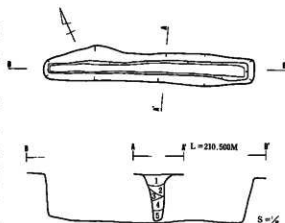
第13図 I B 9 a 陥し穴状遺構

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

I B 7 b 陥し穴状遺構 (第14図 写真図版 8)

調査区 I B 区中央部の 7 b グリットに位置する。南西側に I B 9 a 陥し穴状遺構が隣接する。検出面は第 III 層上面である。

開口部上面は削平されているが、平面形は溝状、断面形は Y 字状を呈すると思われる。規模は、開口部 44×336 cm、底部 15×308 cm、深さ 66~80 cm を測る。長軸方向は W-26° -N を示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向への挟り込みはなく、側壁はほぼ垂直に立上がる。開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反する。長軸方向の側



- | | | | | |
|------------|-----|-------|--------|-------|
| 1. 10Y R % | 黒褐色 | シルト | やや軟らかい | 褐色土混入 |
| 2. 10Y R % | 黒褐色 | シルト | やや軟らかい | |
| 3. 10Y R % | 黄褐色 | 粘質シルト | やや固い | |
| 4. 10Y R % | 褐色 | シルト | やや軟らかい | 浮石混入 |
| 5. 10Y R % | 黒褐色 | シルト | 軟らかい | |

第14図 I B 7 b 陥し穴状遺構

壁は角状を呈する。埋土は、上位にやや軟らかい黒褐色のシルト質土、中位から下位にやや軟らかい黄褐色・褐色に浮石が少量混在し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

II A 3 f 陥し穴状遺構 (第15図 写真図版 8)

調査区 II A 区中央部の 3 f・3 g グリットに位置する。北東側に II A 2 g 陥し穴状遺構が隣接する。検出面は第 III 層上面である。

遺構の南東部の一部は調査区外に伸びているため、詳細は不明である。

開口部は削平されているが、平面形は溝状、断面形は Y 字状を呈すると思われる。規模は、開口部 45×350 cm、底部 10×320 cm、深さ 65~70 cm を測る。長軸方向は W-4° -N を示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向への挟り込みはなく、側壁はほぼ垂直に立上がる。開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反ものと思われる。埋土は、上位に酸化した浮石を含む黒色・黒褐色のシルト質土、中位から下位に固く締まる暗褐色の砂礫土に、側壁の崩壊土と思われる酸化した赤色・青灰色砂粒、浮石が少量混在し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

II A 2 g 陥し穴状遺構 (第15図 写真図版 8)

調査区II A区中央部の2g・3gグリットに位置する。南西側にII A 3 f 陥し穴状遺構が隣接する。検出面は第III層上面である。

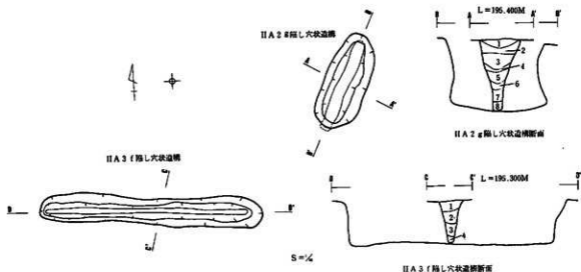
平面形は溝状、断面形はU字状に近いY字状を呈する。規模は、開口部70×155cm、底部20×155cm、深さ115~125cmを測る。長軸方向はN-26° -Eを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向の南西側が狭り込み、側壁はほぼ垂直に立上がる。開口部では緩やかに内湾しながら外傾する。埋土は、上位にやや締まりある黒色・黒褐色のシルト質土、中位から下位に固く締まる側壁の崩壊土と思われる砂礫土に、浮石、スコリアが多量に混入し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

II A 3 h-1 陥し穴状遺構 (第16図 写真図版 9)

調査区II A区東南側の3hグリットに位置する。南側約2mにII A 3 h-2 陥し穴状遺構が並列する。検出面は第III層上面である。

平面形は溝状、断面形はU字状に近いY字状を呈する。規模は、開口部85×175cm、底部25×165cm、深さ105~120cmを測る。長軸方向はW-3° -Nを示している。底面は固くて緩やか



II A 2 g 陥し穴状遺構断面

1. 10Y R ㊄ 褐色 シルト やや固い 暗褐色土混入
2. 10Y R ㊄ 暗褐色 シルト 固い 褐色土混入
3. 10Y R ㊄ 暗褐色 シルト 固い
4. 10Y R ㊄ 褐色 砂質土 固い 浮石少量
5. 10Y R ㊄ 暗褐色 シルト 固い 砂礫・浮石少量
6. 10Y R ㊄ 褐色 砂礫土 固い 褐色土・浮石・スコリア混入
7. 10Y R ㊄ 暗褐色 砂礫土 中や固い 浮石・スコリア混入
8. 10Y R ㊄ 褐色 砂質土 やや固い 浮石・スコリア少量混入

II A 3 f 陥し穴状遺構断面

1. 10Y R ㊄ 暗褐色 シルト 軟らかい 浮石含
2. 10Y R ㊄ 暗褐色 シルト 軟らかい 褐色土・浮石混入
3. 10Y R ㊄ 暗褐色 砂礫土 固い 浮石混入
4. 10Y R ㊄ 黄褐色 砂質土 固い シルト質土・スコリア混入

第15図 II A 2 g・II A 3 f 陥し穴状遺構

に凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向へ大きく抉り込み、側壁はほぼ垂直に立上がり、開口部では緩やかに内湾しながら外傾する。埋土は、上位に砂粒、浮石を少量含む比較的締まりのない軟らかい黒色・黒褐色のシルト質土、中位から下位に固く締まる暗褐色土に、側壁の崩壊土と思われる砂粒、浮石、スコリアが多量に混在し、自然堆積の様相を呈する。

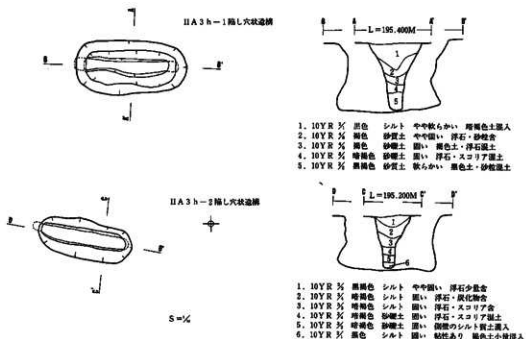
遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

II A 3 h-2 陥し穴状遺構 (第16図 写真図版9)

調査区II A区東南側の3h・4hグリットに位置する。北側約2mにII A 3 h-1 陥し穴状遺構が並列する。検出面は第III層上面である。

平面形は溝状、断面形はU字状に近いY字状を呈する。規模は、開口部65×150cm、底部20×155cm、深さ85~90cmを測る。長軸方向はW-13' -Nを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向への抉り込み、側壁から開口部に向かってはやや垂直気味に立上がり、開口部では緩やかに内湾しながら幾分外傾する。埋土は、上位に酸化した浮石を含む比較的締まる黒褐色のシルト質土、中位から下位に固く締まる側壁の崩壊土と思われる酸化した赤色・青灰色砂粒、浮石、スコリアが多量に混在し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

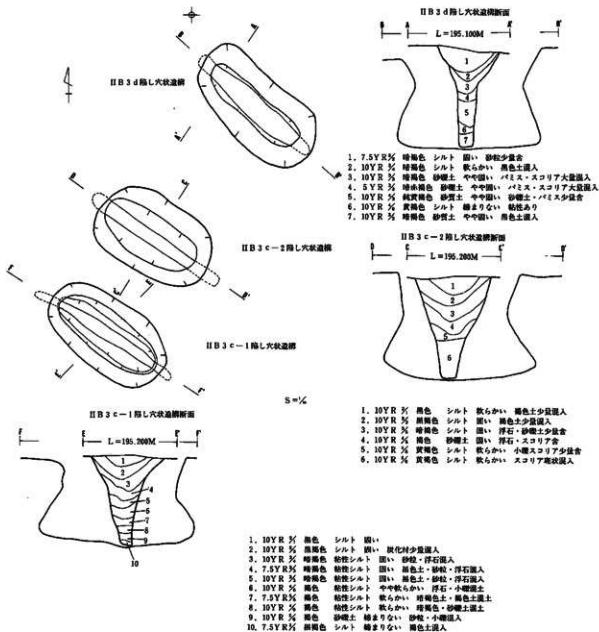


第16図 II A 3 h-1・II A 3 h-2 陥し穴状遺構

II B 3 c-1 陥し穴状遺構 (第17図 写真図版10)

調査区II B区西側の3c・4cグリットに位置し、北東側約55cmにII B 3 c-2 陥し穴状遺構構、その北東側約145cmにII B 3 d 陥し穴状遺構が並列する。検出面は第三層上面である。

平面形は不整の楕円状、断面形はU字状に近いY字状を呈する。規模は、開口部110×208cm、



第17図 II B 3 d

II B 3 c-1 II B 3 c-2 陥し穴状遺構

底部20×252cm、深さ145～155cmを測る。長軸方向はN-53° -Wを示している。底面は固くて中央部で緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向へ大きく挟り込み、側壁はほぼ垂直に立上がり、開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反する。埋土は、上位に比較的固い黒色・黒褐色のシルト質土、中位から下位に縮まりのない粘性シルトに壁の崩壊土と思われる浮石粒、スコリア、砂粒が多量に混在し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

II B 3 c-2 陥し穴状遺構 (第17図 写真図版10)

調査区II B区西側の3c・4dグリットに位置し、南西側約55cmにII B 3 c-1 陥し穴状遺構、北東側約145cmにII B 3 d 陥し穴状遺構が並列する。検出面は第III層上面である。

平面形は溝状、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部120×195cm、底部20×242cm、深さ160～175cmを測る。長軸方向はN-55° -Wを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向へ大きく挟り込み、側壁は内湾気味に立上がり、開口部に向かって丸みをもちながら緩やかに外傾する。埋土は、上位に比較的固い黒色・黒褐色のシルト質土、中位から下位に固く縮まる砂質シルトに壁の崩壊土と思われる浮石粒、スコリア、砂粒が多量に混在し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

II B 3 d 陥し穴状遺構 (第17図 写真図版10)

調査区II B区西側の3dグリットに位置し、南西側約145cmにII B 3 c-2 陥し穴状遺構、その南西側約55cmにII B 3 c-1 陥し穴状遺構が並列する。検出面は第III層上面である。

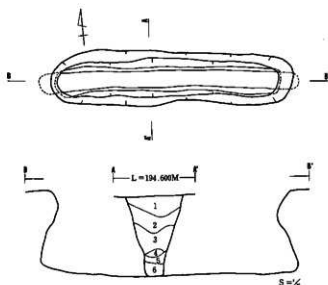
平面形は溝状、断面形はY字状を呈する。規模は、開口部108×223cm、底部35×220cm、深さ140～160cmを測る。長軸方向はN-48° -Wを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向へ大きく挟り込み、側壁はほぼ垂直に立上がり、開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反する。埋土は、上位に酸化した砂粒を少量含む比較的固い暗褐色のシルト質土、中位から下位に固く縮まる赤褐色・黄褐色の砂礫土に壁の崩壊土と思われる酸化した赤色・青灰色砂粒、浮石粒、スコリア、小礫を含む砂粒が多量に混在し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

II B 3 e 陥し穴状遺構 (第18図 写真図版9)

調査区II B区東側の3g・3hグリットに位置する。検出面は第III層上面である。

平面形は溝状、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部88×382cm、底部25×413cm、深さ130～140cmを測る。長軸方向はW-16' -Nを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向へ大きく抉り込み、側壁はやや垂直気味に立上がり、開口部では緩やかに丸みをもちながら外傾する。埋土は、上位にやや軟らかい浮石・砂粒を含む黒褐色・暗褐色のシルト質土、中位から下位に軟らかくて締まりのない褐色・黒褐色の砂礫土に壁の崩壊土と思われる酸化した赤色・青灰色砂粒、浮石粒、スコリアが多量に混在し、自然堆積の様相を呈する。



1. 10Y R 5/6 黒褐色 シルト やや軟らかい 黒色土・褐色土少量混入
2. 10Y R 5/6 暗褐色 シルト 固い 浮石・砂粒混入
3. 10Y R 5/6 暗褐色 砂礫土 やや軟らかい 浮石・スコリア混入
4. 10Y R 5/6 黒灰色 砂礫土 固い 浮石・スコリア混入
5. 10Y R 5/6 褐色 シルト 軟らかい 粘性あり
6. 10Y R 5/6 黒褐色 砂礫土 固い 浮石・スコリア混入

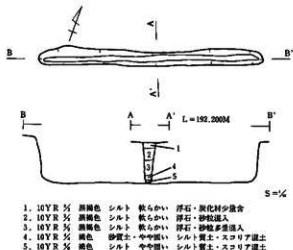
第18図 II B 3 g 陥し穴状遺構

II D 2 b 陥し穴状遺構

(第19図 写真図版11)

調査区IID区北西側の2b・3bグリットに位置する。検出面は第IV層上面である。

開口部は削平されているが、平面形は溝状、断面形はY字状を呈すると思われる。規模は、開口部20×358cm、底部10×340cm、深さ60～70cmを測る。長軸方向はE-21' -Nを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向への抉り込み



1. 10Y R 5/6 黒褐色 シルト 軟らかい 浮石・炭化材少量混入
2. 10Y R 5/6 黒褐色 シルト 軟らかい 浮石・砂粒混入
3. 10Y R 5/6 黒褐色 シルト 軟らかい 浮石・砂粒多量混入
4. 10Y R 5/6 褐色 砂質土 やや固い シルト質土・スコリア混入
5. 10Y R 5/6 褐色 シルト やや固い シルト質土・スコリア混入

第19図 II D 2 b 陥し穴遺構

はなく、側壁はほぼ垂直に立上がる。開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反するものと思われる。埋土は、上位に軟らかい少量の浮石を含む黒褐色のシルト質土、中位から下位にやや固い褐色の砂質土に壁の崩壊土と思われる酸化したスコリアが混在し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

II D 2 d 陥し穴状遺構 (第20図 写真図版11)

調査区II D区北側の2 d・3 dグリットに位置する。検出面は第IV層上面である。

平面形は不整の楕円状、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部65×158cm、底部25×150cm、深さ110～120cmを測る。長軸方向はW-41° -Nを示している。底面は固くて緩やかに凹

み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向へ幾分傾り込み、側壁はほぼ垂直気味に立上がり、開口部に向かって幾分外傾する。埋土は、上位に浮石を少量含む比較的固い黒褐色・暗褐色のシルト質土、中位から下位に固い暗褐色・褐色の砂礫土に壁の崩壊土と思われる砂礫・浮石・スコリアが混在し、自然堆積の様相を呈する。

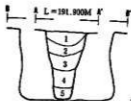
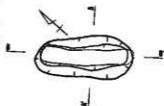
遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

II D 4 d 陥し穴状遺構

(第21図 写真図版11)

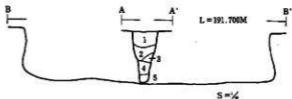
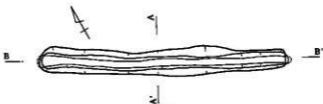
調査区II D区南東側の4 d・5 d・5 eグリットに位置する。検出面は第IV層上面である。

開口部は削平されているが、平面形は溝状、断面形はY字状を呈すると思われる。規模は、開口部40×390cm、底部10×402cm、深さ75～80cmを測る。長軸方向はW-



- S=1/4
1. 10YR ㊄ 黒褐色 シルト 固い 浮石・炭化物少量
 2. 10YR ㊄ 暗褐色 シルト 固い 褐色土混入
 3. 10YR ㊄ 暗褐色 砂礫土 固い 浮石・スコリア混入
 4. 10YR ㊄ 褐色 砂礫土 固い 浮石・スコリア・砂礫土混入
 5. 10YR ㊄ 褐色 砂礫土 固い シルト質土・浮石・スコリア混入

第20図 II D 2 d 陥し穴状遺構



- S=1/4
1. 10YR ㊄ 黒褐色 シルト 固い 浮石塊状混入
 2. 10YR ㊄ 暗褐色 シルト やや固い 浮石塊状混入
 3. 10YR ㊄ 褐色 砂礫土 固い 褐色土・浮石混入
 4. 10YR ㊄ 暗褐色 砂礫土 固い 浮石少量塊状混入
 5. 10YR ㊄ 鈍黄褐色 砂質土 固い 黒色土・スコリア混入

第21図 II D 4 d 陥し穴状遺構

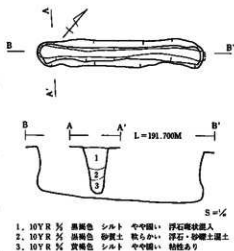
29° -Nを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向へ幾分
 挟り込み、側壁はほぼ垂直に立上がる。開口部は緩やかに丸みをもちながら大きく外反するも
 のと思われる。埋土は、上位に浮石を少量含む比較的固い黒褐色・暗褐色のシルト質土、中位
 から下位に固い暗褐色・褐色の砂礫土に壁の崩壊土と思われる浮石・スコリアが混在し、自然
 堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

II D 3 e 陥し穴状遺構 (第22図 写真図版11)

調査区II D区東側の3 e・3 fグリットに位置する。検出面は第IV層上面である。

開口部は削平されているが、平面形は溝状、断面形はY字状を呈すると思われる。規模は、開口部38×268cm、底部15×265cm、深さ70~80cmを測る。長軸方向はE-43° -Nを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向へ幾分挟り込み、側壁はほぼ垂直に立上がる。開口部は緩やかに丸みをもちながら大きく外反するものと思われる。埋土は、やや固い黒褐色のシルト質土を主体に、壁の崩壊土と思われる酸化した浮石、砂礫が混在し、自然堆積の様相を呈する。



第22図 II D 3 e 陥し穴状遺構

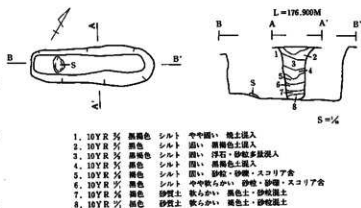
遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

III B 5 f 陥し穴状遺構

(第23図 写真図版12)

調査区III B区南東側の5 fグリットに位置する。検出面は第III層上面である。

平面形は溝状、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部58×198cm、底部30×185cm、深さ65~88cmを測る。長軸方向はN-59° -



第23図 III B 5 f 陥し穴状遺構

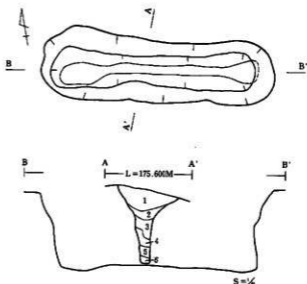
Eを示している。底面はやや平坦で、わずかに凸凹を呈する。長軸方向への挟り込みはなく、側壁はほぼ垂直に立上がり、開口部に向かって緩やかに幾分外傾する。南西側の長軸方向の側壁は角状を呈する。埋土は、上位に比較的締まりのある黒色・黒褐色のシルト質土、中位から下位に壁の崩壊土と思われる締まりのないスコリアと砂粒が多量に混在し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

ⅢC4 e 陥し穴状遺構 (第24図 写真図版12)

調査区ⅢC区中央部の4 eグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。

平面形は溝状、断面形はY字状を呈する。規模は、開口部100×374cm、底部10×318cm、深さ125~145cmを測る。長軸方向はW-10' - Nを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向では南東側へ挟り込み、側壁はほぼ垂直に立上がり、開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反する。埋土は、上位に浮石を少量含む比較的固い暗褐色・黄褐色のシルト質土、中位から下位に壁の崩壊土と思われる



1. 7.5YR 5/6 暗褐色 シルト 固い 浮石混入
2. 10YR 5/6 鈍黄褐色 粘性シルト 固い 浮石混入
3. 10YR 5/6 鈍黄褐色 砂礫土 固い 粘質土・スコリア混在
4. 10YR 5/6 暗黄褐色 粘質土 固い スコリア少量混入
5. 10YR 5/6 黄褐色 粘質土 軟らかい スコリア含
6. 10YR 5/6 鈍黄褐色 粘性シルト 軟らかい 黒褐色土・砂粒混入

第24図 ⅢC4 e 陥し穴状遺構

締まりのない粘性土にスコリアと砂粒が少量混在し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。

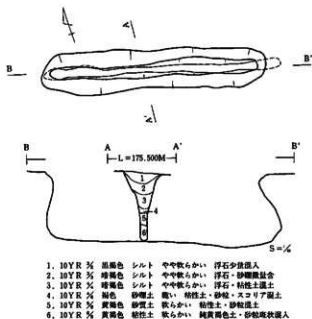
ⅢC4 f 陥し穴状遺構 (第25図 写真図版12)

調査区ⅢC区中央部の4 f・4 g・5 f・5 gグリット境に位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。

平面形は溝状、断面形はY字状を呈する。規模は、開口部60×362cm、底部10×382cm、深さ128~135cmを測る。長軸方向はW-16' - Nを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わず

かに凸凹を呈する。長軸方向へ大きく抉り込み、側壁はほぼ垂直に立上がり、開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外傾する。埋土は、上位に浮石を少量含む比較的固い黒褐色・暗褐色のシルト質土、中位から下位に壁の崩壊土と思われる締まりのない砂礫土にスコリアと砂粒が多量に混在し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。



1. 10Y R 5/6 黒褐色 シルト やや軟らかい 浮石少量混入
2. 10Y R 5/6 暗褐色 シルト やや軟らかい 浮石・砂礫混在
3. 10Y R 5/6 暗褐色 シルト やや軟らかい 浮石・粘性土混入
4. 10Y R 5/6 褐色 砂礫土 脆い 粘性土・砂粒・スコリア混入
5. 10Y R 5/6 黄褐色 砂質土 軟らかい 粘性土・砂粒混入
6. 10Y R 5/6 黄褐色 粘性土 軟らかい 純黄褐色土・砂粒状混入

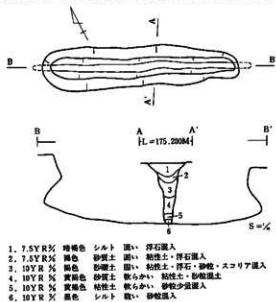
第25図 III C 4 f 陥し穴状遺構

III C 5 i 陥し穴状遺構 (第26図 写真図版12)

調査区III C区東端の5 i グリットに位置する。検出面は第III層上面である。

平面形は溝状、断面形はY字状を呈する。規模は、開口部62×312cm、底部10×355cm、深さ83~105cmを測る。長軸方向はW-27' -Nを示している。底面は固くて緩やかに凹み、わずかに凸凹を呈する。長軸方向へ大きく抉り込み、側壁はほぼ垂直に立上がり、開口部では緩やかに丸みをもちながら大きく外反する。埋土は、上位に比較的固い浮石粒が混在する暗褐色・褐色の砂質シルト、中位から下位に壁の崩壊土と思われる軟らかい砂礫土に砂粒・浮石・スコリアが多量に混在し、自然堆積の様相を呈する。

遺構の時期は、出土遺物はないが、検出面及び形状や埋土の状況から縄文時代に比定される。



1. 7.5Y R 5/6 暗褐色 シルト 固い 浮石混入
2. 7.5Y R 5/6 褐色 砂質土 固い 粘性土・浮石混入
3. 10Y R 5/6 褐色 砂礫土 固い 粘性土・浮石・砂粒・スコリア混入
4. 10Y R 5/6 黄褐色 砂質土 軟らかい 粘性土・砂粒混入
5. 10Y R 5/6 黄褐色 粘性土 軟らかい 砂粒少量混入
6. 10Y R 5/6 黒色 シルト 脆い 砂粒混入

第26図 III C 5 i 陥し穴状遺構

2 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構はⅢC区から土壌が13基検出されている。土壌は、仁沢瀬川北西岸の舌状に張り出した馬背状の段丘上の頂部から南側縁辺部にかけて検出された。その内、埋土上面に焼土をもつもの1基、埋納土器を有するもの1基である。

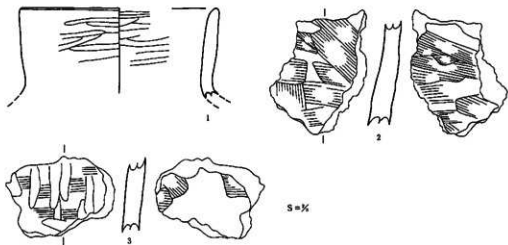
ⅢC2e土壌 (第27・28図 写真図版13・18)

調査区ⅢC区中央部の2e・3eグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。南側にはⅢC3e-1土壌、南東側にはⅢC3e-2土壌が隣接する。

平面形は不整の円形、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部径138cm、底部径115cm、深さ12~16cmを測る。底面は固く締まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は全体が垂直気味に立上がり、開口部付近ではやや内湾する。埋土は、浮石を少量含む比較的固い暗褐色・褐色の砂質土が主体である。遺構は構築時のもっと深いものと思われる。

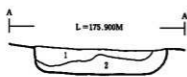
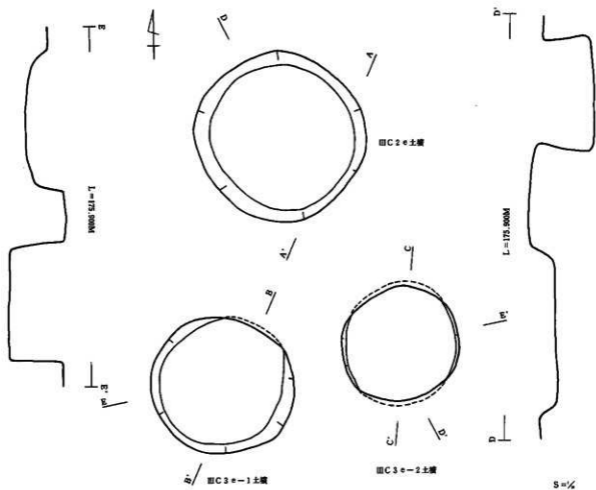
遺構内から1の土師器甕の口縁部破片が出土している。口唇部はやや丸みを持ちながらすぼまり、外側にややめくれる。口縁部は頸部から緩やかに外反すると思われる。甕表面は内外面ともに横位方向のヘラミガキ調整であり、比較的薄手である。

遺構の時期は、出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。



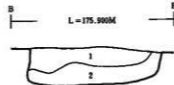
番号	出土地点・層位	器種	部位	特徴・備考	外面調整	内面調整	胎土	分類	写真資料
1	ⅢC2e 土壌	土師器甕	口縁部		ヘラミガキ	ヘラミガキ	磁質硬質	IV-2-a	18
2	ⅢC3e-2 土壌	土師器甕	胴部		ヘラミガキ	ヘラミガキ	均一ながらやや軟質	IV-2-c	18
3	ⅢC3e-2 土壌	土師器甕	胴部	内面スリ付	ヘラミガキ	ヘラミガキ	均一ながらやや軟質	IV-2-c	18

第27図 ⅢC2e・3e-2土壌出土遺物



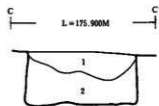
III C 2 e 土壌断面

1. 7.5YR 7/2 暗褐色 砂質土 固い 浮石含
2. 7.5YR 8/2 褐色 砂質土 固い 浮石含



III C 3 e-1 土壌断面

1. 10YR 7/2 暗褐色 シルト やや固い 浮石・スコリア混入
2. 10YR 8/2 暗褐色 シルト やや固い 浮石・スコリア混入



III C 3 e-2 土壌断面

1. 10YR 7/2 暗褐色 シルト 粘まる 砂質土少量混入
2. 10YR 8/2 暗褐色 シルト 粘まる 砂礫・浮石混入

第28図 III C 2 e・3 e-1・3 e-2 土壌

ⅢC 3 e-1 土壙 (第28図 写真図版13)

調査区ⅢC区中央部の3 e グリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。北側にはⅢC 2 e 土壙、北東側にはⅢC 3 e-2 土壙が隣接する。

平面形は不整の円形、断面形はU字状～袋状を呈する。規模は、開口部径115cm、底部径95～105cm、深さ20～25cmを測る。底面は固く締まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は、北東側でやや挟り込み、全体が垂直気味に立上がり、開口部付近ではやや内湾する。埋土は、浮石・スコリアを少量含む比較的固い暗褐色のシルト質土が主体である。遺構は構築時はもっと深いものと思われる。

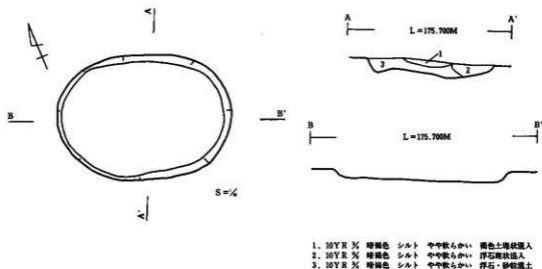
遺構内からの出土遺物は無い。

遺構の時期は、周辺の出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。

ⅢC 3 e-2 土壙 (第27・28図 写真図版13・18)

調査区ⅢC区中央部の3 e・3 f グリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。南西側にはⅢC 3 e-1 土壙、北西側にはⅢC 2 e 土壙が隣接する。

平面形は不整の円形、断面形はU字状～袋状を呈する。規模は、開口部径95cm、底部径90～105cm、深さ40～45cmを測る。底面は固く締まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は、北側・南側でやや挟り込み、全体が垂直気味に立上がり、開口部付近ではやや内湾する。埋土は、浮石を少量含む比較的固い暗褐色のシルト質土が主体である。遺構は構築時はもっと深いものと思われる。



第29図 ⅢC 4 f 土壙

遺構内から土師器製の胴部破片が出土している。2は、内外面ともヘラナデ調整である。3は内外面ともヘラナデ調整であるが、器表面にはヘラナデ調整の後ヘラミガギ調整がなされる。内面にはススが付着している。2・3ともに極めて脆弱である。

遺構の時期は、出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。

ⅢC 4 f 土壌 (第29図 写真図版14)

調査区ⅢC区中央部南側の4fグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。南東側にはⅢC 4 g-2土壌、東側にはⅢC 4 g-3土壌が隣接する。

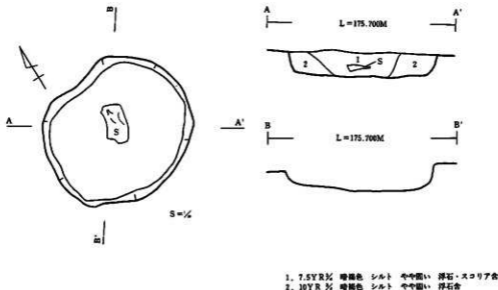
平面形は不整の楕円形、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部径95×138cm、底部径90×128cm、深さ5~10cmを測る。長軸方向はW-21'-1Nを示している。底面は固く締まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は、全体が垂直気味に立上がる。埋土は、浮石を少量含む比較的固い暗褐色のシルト質土が主体である。遺構は構築時のもっと深いものと思われる。

遺構の時期は、出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。

ⅢC 2 g 土壌 (第20図 写真図版14)

調査区ⅢC区北東部の2gグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。南西側にはⅢC 3 h-1土壌・ⅢC 3 h-2土壌が隣接する。

平面形は不整の円形、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部径120cm、底部径110cm、深



第30図 ⅢC 2 g 土壌

さ15～20cmを測る。底面は固く締まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は、全体が垂直気味に立上がり、開口部付近ではやや内湾する。埋土は、少量の浮石と黒色土を斑状に含む比較的固い暗褐色のシルト質土が主体であり、埋土中位に15×30×10cmの直角礫1個が含まれる。遺構は構築時はもっと深いものと思われる。

遺構内からの出土遺物はない。

遺構の時期は、出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。

ⅢC4g-1 土壇 (第31図 写真図版14)

調査区ⅢC区南東部の4g・4hグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。ⅢC4g-1土壇とは南側で重複関係にある。北西側にはⅢC4g-3土壇、南西側にはⅢC4g-2土壇、東側にはⅢC4h土壇、南東側にはⅢC5h土壇が隣接する。

平面形は不整の楕円形、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部径110×130cm、底部径100×120cm、深さ20～25cmを測る。長軸方向はW-8°-Nを示している。底面は固く締まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は、全体が垂直気味に立上がり、開口部付近ではやや内湾する。埋土は、上位に20×25cm、厚さ約10cmの範囲に、明赤褐色の焼土の広がりを確認する。中位から下位に浮石を少量含む比較的軟らかい暗褐色・黒褐色のシルト質土が主体である。遺構は構築時はもっと深いものと思われる。

遺構内から4の土師器坏とおもわれる体部破片が出土している。内外面ともに横位方向のヘラミガキ調整がなされ、一部にヘラナデ痕がみえる。

遺構の時期は、出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。

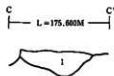
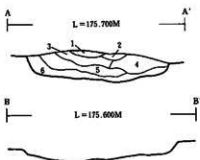
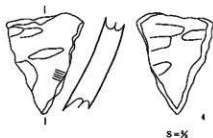
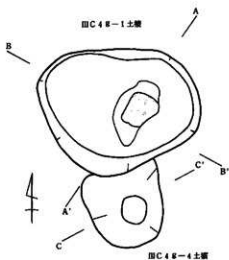
ⅢC4g-4 土壇 (第31図 写真図版15)

調査区ⅢC区南東部の4g・4hグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。ⅢC4g-1土壇とは北側で重複関係にある。南西側には4g-2土壇、北西側には4g-3土壇、北東側にはⅢC4h土壇、南東側にはⅢC5f土壇が隣接する。

平面形は不整の円形、断面形はU字状からややV字状を呈する。規模は、開口部径60cm、底部径20cm、深さ20cmを測る。底面は固く締まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は、開口部に向かって緩やかに外傾して立上がる。埋土は、斑状に浮石を少量含む比較的軟らかい暗褐色のシルト質土が主体である。遺構は構築時はもっと深いものと思われる。

遺構内からの出土遺物はない。

遺構の時期は、出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。



III C 4 g-1 土壁

- 1. 5 Y R ㄨ 暗赤褐色 壤土 軟らかい 暗褐色シルト灰状多量混入
- 2. 10 Y R ㄨ 暗褐色 シルト 軟らかい 黄土・砂質土混入
- 3. 10 Y R ㄨ 暗褐色 シルト 軟らかい 黄土・浮石少量混入
- 4. 10 Y R ㄨ 暗褐色 シルト 軟らかい 浮石少量混入
- 5. 10 Y R ㄨ 暗褐色 シルト 軟らかい 浮石多量混入
- 6. 10 Y R ㄨ 暗褐色 シルト やや硬い 浮石多量混入

III C 4 g-4 土壁

- 1. 7.5 Y R ㄨ 暗褐色 シルト 軟らかい 褐色土・浮石状混入

S=ㄨ

番号	出土地点・層位	器種	部位	特徴・留意	外面調整	内面調整	胎土	分類	図録番号
4	III C 4 g-1 土壁	土師器環	体部		[磨鈍不明]	[磨鈍不明]	織布硬装	IV-2-K	18

第31図 III C 4 g-1・4 g-4 土壁・出土遺物

ⅢC4g-2土壌 (第32図 写真図版15)

調査区ⅢC区南東部の4gグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。北西側にはⅢC4f土壌、北北東側にはⅢC4g-3土壌、北東側にはⅢC4g-1・ⅢC4g-4土壌が隣接する。

平面形は不整の円形、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部径118cm、底部径110cm、深さ15~20cmを測る。底面は固く縮まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は、全体が垂直気味に立上がる。埋土は、浮石を少量含む比較的軟らかい暗褐色・褐色のシルト質土が主体である。遺構は構築時のもっと深いものと思われる。

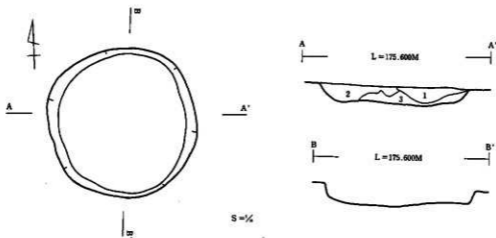
遺構内からの出土遺物はない。

遺構の時期は、出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。

ⅢC4g-3土壌 (第33図 写真図版15)

調査区ⅢC区南東部の4gグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。南東にはⅢC4g-1土壌・ⅢC4g-4土壌、南西側にはⅢC4g-2土壌が隣接する。

平面形は不整の円形、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部径105cm、底部径95cm、深さ10~15cmを測る。底面は固く縮まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は、全体が垂直気味に立



1. 10YR 5/2 暗褐色 シルト 軟らかい 炭化物・浮石少量混入
 2. 10YR 5/3 褐色 シルト 軟らかい 浮石混入
 3. 10YR 5/4 褐色 砂礫土 固い 浮石・砂礫混入

第32図 ⅢC4g-2 土壌

上がる。埋土は、浮石を少量含む比較的軟らかい褐色・黄褐色のシルト質土が主体である。遺構は構築時のもっと深いものと思われる。

遺構内からの出土遺物はない。

遺構の時期は、出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。

ⅢC3h-1土壌 (第34図 写真図版15)

調査区ⅢC区東部の3hグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。ⅢC3h-2土壌とは東側でわずかに接し、北西側にはⅢC2g土壌が隣接する。

平面形は不整の円形、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部径120cm、底部径90cm、深さ35~40cmを測る。底面は固く締まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は、全体が垂直気味に立上がり、開口部付近ではやや内湾する。埋土は、浮石を少量含む比較的軟らかい黒褐色のシルト質土が主体である。遺構は構築時のもっと深いものと思われる。

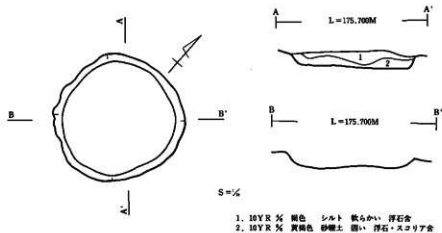
遺構内からの出土遺物はない。

遺構の時期は、出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。

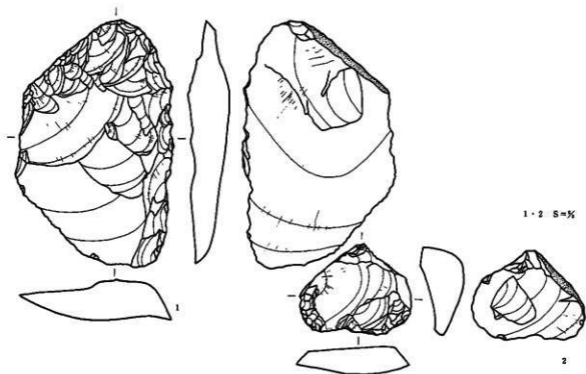
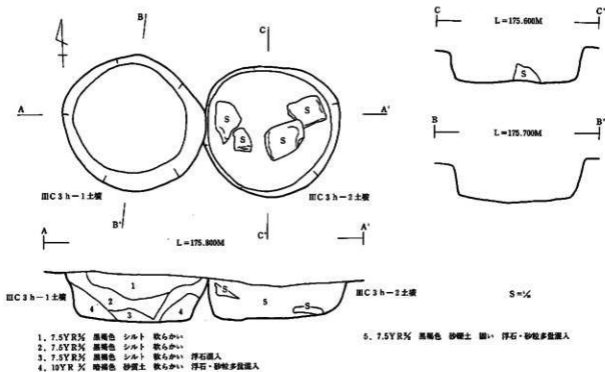
ⅢC3h-2土壌 (第34図 写真図版16・24)

調査区ⅢC区東部の3hグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。ⅢC3h-1土壌とは西側でわずかに接し、北西側にはⅢC2g土壌が隣接する。

平面形は不整の円形、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部径105cm、底部径95cm、深さ25~30cmを測る。底面は固く締まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は、全体が垂直気味に立上がり、開口部付近ではやや内湾する。埋土は、少量の浮石と黒色土を斑状に含む比較的固い暗



第33図 ⅢC4g-3 土壌



番号	出土地点・層位	器 類	規 格 (cm)			重量(g)	石 質・産 地・生成年代	特 徴・備 考	分 類	写真版
			長さ	幅	厚さ					
1	III C 3 h-2 土壇	埋地穴内砂礫物	4.8	4.4	1.6	23.45	砂礫岩 遠上層地 古生代		10-2	26
2	III C 3 h-2 土壇	埋地穴内砂礫物	9.9	6.2	1.6	100.0	燧石岩片 平石西原 新第三系中層統		10-2	24

第34図 III C 3 h-1・III C 3 h-2 土壇・出土遺物

褐色のシルト質土が主体であり、埋土の上位から中位に15×20×5～25×35×10cmの直角礫4個が含まれる。遺構は構築時はもっと深いものと思われる。

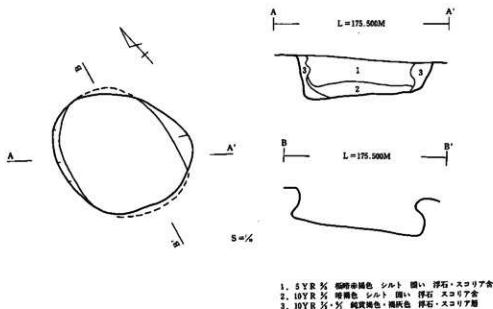
遺構内から石器が出土している。1・2ともに拇指状円形掻器である。1は黒色の石質が粘板岩であり、剥辺の一部に自然面を残し、一縁辺部に刃部を作りだしている。法量は、長さ4.6cm、幅4.4cm、厚さ1.6cm、重量23.45gである。2は黒色の石質が硬質泥岩であり、剥片の一部に自然面を残し、2縁辺部に刃部を作り出し、刃部が1点に収束している。法量は、長さ9.9cm、幅6.2cm、厚さ1.6cm、重量100.0gである。

遺構の時期は、出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。

ⅢC 5 h 土壇 (第35図 写真図版16)

調査区ⅢC区南東部の5hグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。北側にはⅢC 4 h土壇、北西側にはⅢC 4 g-1・4 g-4土壇が隣接する。

平面形は不整の円形、断面形はU字状～袋状を呈する。規模は、開口部径100cm、底部径90～105cm、深さ30～50cmを測る。底面は固く締まり、わずかに凸凹を呈する。側壁は、北側と南側でやや挟り込み、全体が垂直気味に立上がり、開口部付近ではやや内湾する。埋土は、上位に浮石・スコリアを少量含む比較的固い暗褐色のシルト質土、中位から下位に壁の崩壊土と思われる締まりのない浮石やスコリア、砂粒が混在する鈍黄橙色の砂質土が主体である。遺構は構



第35図 ⅢC 5 h 土壇

築時をもっと深いものと思われる。

遺構内からの出土遺物はない。

遺構の時期は、出土遺物、形状や埋土の状況から古墳時代に比定される。

ⅢC 4 h 土壇 (旧ⅢC 4 i 土壇) (第36図 写真図版16・18)

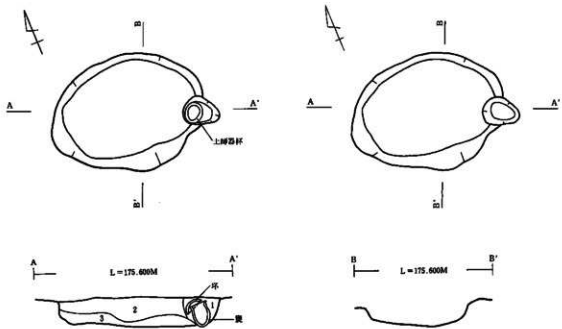
調査区ⅢC区南東部の4 hグリットに位置する。検出面は第Ⅲ層上面である。西側にはⅢC 4 g-1・4 g-4 土壇、南側にはⅢC 5 h 壇が隣接する。

平面形は不整の楕円形、断面形はU字状を呈する。規模は、開口部径90×135cm、底部径75×120cm、深さ20~25cmを測る。長軸方向はW-9' -Nを示している。底面は圓く締まり、わずかに凸凹を呈する。長軸方向の南東端に20×25cm程度の掘り込みがあり、合口状に土師器環を伏せて蓋にもつ土師器甕が埋納された状態で出土した。側壁は、全体が垂直気味に立上り、開口部付近ではやや内湾する。埋土は、上位に浮石・スコリアを少量含む比較的軟らかい暗褐色のシルト質土、中位から下位に壁の崩壊土と思われる締まりのない浮石やスコリア、砂粒が混在する鈍黄橙色の砂質土が主体である。遺構は構築時をもっと深いものと思われる。

遺構内から遺物が出土している。5は土師器環であり、内面は赤色に処理されている。器形は、底部は丸底であり、内面に口縁部と体部との間にわずかな稜を有する。体部は内湾しながら丸みをもって外傾して立上り、頸部がややくびれ口縁部に向かって外反する。口唇部は外側に向かってすぼまる。外面調整は、底部がヘラケズリ、体部がヘラナデ、口縁部がヨコナデである。内面調整は、底部から体部下半がナデ、体部上半から口縁部は横位のヘラミガキである。法量は、口径17cm、器高9cmである。6は土師器甕であり、内外面とも黒色を呈する。口縁部に最大径を有する。底部はやや凹み、胴部はやや球胴形を呈し、張りをもって底部に向かってすぼまる。頸部は、胴部との間に調整によって施された。浅い沈線による段を有する。口唇部は丸みもち、口縁部は、頸部より「くの字状」に屈曲して外反する。外面調整は口縁部がハケメ、体部がヘラケズリである。内面調整は、ヘラナデである。法量は、口径15cm、底径5cm、器高16cmである。

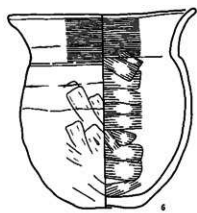
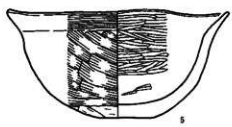
遺構の時期は、形状や埋土状況、土師器の形式から5世紀後半から6世紀前半(古墳時代)に比定される。

調査段階ではⅢC 4 i 土壇と発表したが、最終整理段階でグリット名と照合し、ⅢC 4 h 土壇に名称を変更した。



- 1. 7.5Y R5/6 暗褐色 シルト やや軟らかい 浮石塊状混入
- 2. 7.5Y R5/6 暗褐色 シルト やや軟らかい 褐色土・浮石塊状混入
- 3. 7.5Y R5/6 褐色 シルト やや軟らかい 磁器片混浮石多量混入

S=1/6



5.6 S=1/6

番号	出土地点・層位	器種	外面調整			内面調整			法量(m)			特徴・備考	分類	所属館	
			口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口径	器高	底径				
5	ⅢC 4 h 土層	土師器杯	△▽△▽	△▽△▽	△▽△▽	△▽△▽	△▽△▽	△▽△▽	17.0	9.0	(丸底)	内面赤褐色 口縁部一部欠損	IV-1-a	18	
6	ⅢC 4 h 土層	土師器碗	△▽△▽	△▽△▽	△▽△▽	△▽△▽	△▽△▽	△▽△▽	15.0	16.0	5.0	内外面黒色 口縁部一部欠損	IV-2-b	18	

第36図 ⅢC 4 h 土層・出土遺物

3 焼土遺構

焼土遺構は5基で、II A区から2基、III C区から3基検出されている。

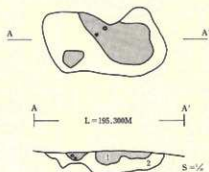
II A 3 c 焼土遺構 (第37図 写真図版17)

調査区II区西部の3cグリットに位置する。遺構は周辺の埋土が第II層の下面まで削平されているため、その詳細は不明であるが、第II層除去後に焼土の広がりを確認した。検出面は第III層上面である。

平面形が45×100cmの不整な楕円状を呈し、厚さ約5～10cmである。色調は暗赤褐色である。埋土は、比較的固く締まっており、少量の炭化材が含まれる。焼土は、砂質土が焼土化したものと思われ、住居跡のプランや柱穴痕は検出されていない。

遺構及び、周辺から遺物は出土していない。

遺構の時期は、遺構との関連性をもつ出土遺物がないため不明である。



1. 5 YR 5/ 暗赤褐色 焼土 固く締まる 炭化物含
2. 7.5 YR 5/ 黒褐色 シルト 固く締まる 浮石含

第37図 II A 3 c 焼土遺構

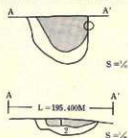
II A 3 f 焼土遺構 (第38図 写真図版17)

調査区II区西部の3fグリットに位置する。遺構は周辺の埋土が第II層の下面まで削平されているため、その詳細は不明であるが、第II層除去後に焼土の広がりを確認した。検出面は第III層上面である。

遺構は大半が削平され消失している。平面形が40×50cmの不整な楕円状を呈し、厚さ約5cmである。色調は暗赤褐色である。埋土は、やや締まり、明赤褐色の焼土粒、少量の炭化材が含まれる。焼土は、砂質土が焼土化したものと思われるが、やや粘性がある。住居跡のプランや柱穴痕は検出されていない。

遺構及び、周辺から遺物は出土していない。

遺構の時期は、遺構との関連性をもつ出土遺物がないため不明である。



1. 5 YR 5/ 暗赤褐色 焼土 粘らかい 炭化物含
2. 5 YR 5/ 黒褐色 シルト 粘らかい 焼土粒含

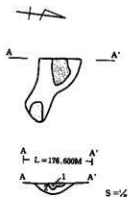
第38図 II A 3 f 焼土遺構

III C 1 d 焼土遺構 (第39図 写真図版17)

調査区Ⅲ区北西部の1 dグリットに位置する。遺構は周辺の埋土が第Ⅱ層の下面まで削平されているため、その詳細は不明であるが、第Ⅱ層除去後に焼土の広がりを確認した。検出面は第Ⅲ層上面である。

遺構は大半が削平され消失している。平面形が不整の楕円状を呈し、25×55cmの範囲に焼土が広がり、厚さ5～10cmである。色調は赤褐色、比較的固く締まっている。焼土は、砂質土が焼土化したものと思われる。住居跡や土塼のプランや柱穴痕は検出されていない。遺構に伴う遺物の出土はないが、周辺から石器のフレイクが出土している。

遺構の時期は、遺構との関連性をもつ出土遺物がないため不明である。



1. 5 YR 7/ 赤褐色 焼土 固く締まる
2. 5 YR 7/ 暗赤褐色 焼土 軟らかい

第39図 III C 1 d 焼土遺構

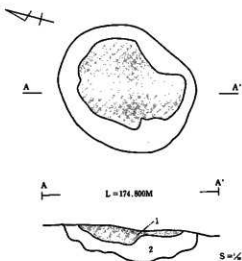
III C 5 c 焼土遺構 (第40図 写真図版17)

調査区Ⅲ区南西部の5 c・5 dグリットに位置する。遺構は周辺の埋土が第Ⅱ層の下面まで削平されているため、その詳細は不明であるが、第Ⅱ層除去後に焼土の広がりを確認した。検出面は第Ⅲ層上面である。

平面形が不整な楕円状を呈し、95×110cmの範囲に焼土が広がり、厚さ5～15cmである。色調は暗褐色、比較的軟らかく黒色土、埋土から少量の炭化材が含まれる。住居跡や土塼のプランや柱穴痕は検出されていない。

遺構に伴う遺物の出土はないが、周辺から縄文時代早期と後期の土器片が出土している。

遺構の時期は、遺構との関連性をもつ出土遺物がないため不明である。



1. 7.5 YR 7/ 暗褐色 軟らかい
2. 7.5 YR 7/ 暗褐色 焼土 軟らかい

第40図 III C 5 e 焼土遺構

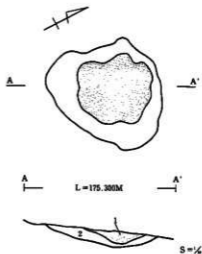
ⅢC3 | 焼土遺構 (第41図 写真図版17)

調査区Ⅲ区東部の3 | グリットの斜面上に位置する。遺構は周辺の埋土が第Ⅱ層の下面まで削平されているため、その詳細は不明であるが、第Ⅱ層除去後に焼土の広がりを確認した。検出面は第Ⅲ層上面である。

平面形が不整な楕円状を呈し、75×90cmの範囲に焼土が広がり、厚さ10cmである。色調は赤褐色、比較的固く締まっており、埋土から少量の炭化材も出土している。焼土は、砂質土が焼土化したものと思われ、住居跡や土壇のプランや柱穴痕は検出されていない。

遺構に伴う遺物の出土はないが、周辺から磨耗した縄文時代の土器片が出土しているが、脆弱なため時期は不明である。

遺構の時期は、遺構との関連性をもつ出土遺物がないため不明である。



1. 5YR 5/6 赤褐色 焼土 固く締まる
2. 5YR 5/6 暗赤褐色 焼土 固く締まる

第41図 ⅢC3 | 焼土遺構

V. 遺構外出土遺物

調査の結果、遺構外から出土した遺物は、土器・石器などである。遺物の出土量は少なく、中コンテナで10箱である。出土地点は、調査区ⅢC区の遺構が集中して検出された頂部付近から縁辺部を中心に出土している。遺物は畑地耕作により破壊され細片化しているため、復元可能個体はほとんど無い。土器は縄文時代、弥生時代、統縄文期（北海道系）、古墳時代の土師器、須恵器が出土している。石器は縄文時代の剥片石器、礫石器、古墳時代の黒曜石製円形搔器が出土し、出土地域も同様の傾向がみらる。

1. 土 器

土器は、時期別に大分類した。第Ⅰ群は縄文時代、第Ⅱ群は弥生時代、第Ⅲ群は統縄文期、第Ⅳ群は古墳時代に相当する土器に分類した。分類の蓋然性を高めるため、遺構内から出土した土器も含めて、文様の特徴・施文方法・胎土の特徴などから次のように分類した。

第Ⅰ群土器 縄文時代

- 1類：貝殻腹縁文と沈線文により、幾何学的文様が施文される
- 2類：貝殻腹縁文が施文される
- 3類：無文のもの
- 4類：単節斜縄文が施文され、胎土に植物性繊維が含まれる
- 5類：不整の撚糸文が施文される
- 6類：口縁部に粘土紐貼付による隆帯が施文される
- 7類：羽状縄文が施文される
- 8類：単節斜縄文が施文される
- 9類：頸部に沈線文、胴部に単節斜縄文が施文される

第Ⅰ群1類（第42図7 写真図版19）

7は器表面全体に幾何学的文様が施される胴部の破片である。器表面はミガキ調整される。全体の器形は不明であるが、胴部が張り出しをもつ部位であると思われる。平行する沈線による区画内、あるいは沈線直下に貝殻腹縁文が施文される。

第Ⅰ群2類（第42図8 写真図版19）

8は口縁部の破片である。口唇部は丸形で内側にやや向かって幾分すばまる。器表面はミガキ調整され、口唇部より左斜位方向に、連続の貝殻腹縁文が施文される。

第1群3類 (第42図9 写真図版19)

9は尖底土器の底部である。器表面は、摩耗した剥落面から、輪積痕や成形用粘土が塗付されている状態が観察される。

第1群4類 (第42図10~13 写真図版19)

10から13は胴部の破片である。10・11は器表面および裏面にも単節斜縄文が施される、所謂表裏縄文が施された土器片である。12は縦位方向、13は右斜位方向に単節斜縄文が施される。胎土に多量の植物性繊維が含まれ、やや脆弱である。

第1群5類 (第42図14 写真図版19)

14は胴部の破片である。縦位方向に不整の撚糸文が施文される。胎土に多量の植物性繊維、微細な砂粒が含まれ、脆弱である。

第1群6類 (第42図15 写真図版19)

15は口縁部の破片である。口唇部は内側に折り返し気味に幅広の、外側にU字状の粘土紐が貼付される。その直下に平行に3本の縄文原体圧痕文が、3本目のところから右斜位方向に2本の縄文原体圧痕文が施文される。胴部は丸みをもち、地文に左斜位方向の単節斜縄文が施文される。口縁部内側は粘土紐貼付により幾分肥厚し、段をもつようになる。

第1群7類 (第42・43図16~18 写真図版19)

16・17・18は胴部の破片であり、地文の横位方向の結束の羽状縄文が施文される。16は粒径の小さい縄文原体により施文される。

第1群8類 (第43図19~21 写真図版20)

19から21は口縁部の破片である。口唇部はミガキ調整され、やや角状を呈する。地文に単節斜縄文が施文される。施文方法、胎土、色調などから同一個体と思われる。

第1群9類 (第43図22・23 写真図版20)

22・23は胴部破片である。頸部に平行な沈線文、胴部に単節斜縄文が施文される。胴部は頸部に向かって内湾しながら外反し、内面に頸部との段をもつように肥厚する。頸部はやや外反する。胎土は小砂粒が多く含まれ、比較的脆弱である。施文方法、胎土、色調などから同一個体の可能性がある。

第II群土器 弥生時代

- 1類：地文に単節斜縄文が施文され、沈線が施される
- 2類：地文に単節斜縄文が施文され、綾絡文がされる
- 3類：地文に単節斜縄文が施文され、沈線による区画が磨消される

第II群1類（第43図24～27 写真図版20）

24・25は口縁部の破片であり、緩やかな小波状口縁を呈するものと思われる。24は口唇部が丸みもちいふん内側にややすばまる。25は口唇部が角状に近く、頂部が上にやや丸くなる。24・25・26は地文に左斜位方向に単節斜縄文が施文される。24・25は、口縁部に単節斜縄文、その下に数条の沈線で区画されたところを、磨消文と単節斜縄文が交互に施される。26・27は胴部破片であり、施文方法は24・25と同様であるが、27は縦位方向に単節斜縄文が施文され、横位方向の沈線とそれの接する右斜位方向の沈線が施される。25・26は施文方法、胎土、色調などから同一個体と思われる。24は器表面にスガが付着している。27は器表面がミガキ調整される。

第II群2類（第43図28・29 写真図版20）

28・29は胴部の破片である。28は底部付近の破片と思われる。28・29は地文とともに不規則に左・右斜位方向に単節斜縄文が浅く施され、綾絡文が施文される。28は横位方向に数条の綾絡文、29は浅い沈線とその下方に縦位方向の綾絡文が施文される。施文方法、胎土、色調などから同一個体と思われる。

第II群3類（第43図30・31 写真図版20）

30・31は底部の破片である。いずれも地文に横位方向に単節斜縄文が施文される。30は縦位方向に、31は横位方向の沈線により区画されたところが磨消される。器表面、裏面ともにミガキ調整される。

第III群土器 続縄文期（後北式・北大式土器）

- 1類：微隆起線上に三角状の刺突文が施文される
- 2類：口唇部が角状を呈し、凹状の溝を作り出している
- 3類：口唇部が丸状を呈し、外側にややめくれる
- 4類：格子目文が施文される

第Ⅲ群 1 類 (第44図32 写真図版21)

32は口縁部の破片である。口唇部は外側に向かって丸みをもちながらめくれるようにすばまる。口唇部直下に、横方向に平行に2本の粘土紐を貼付した後ナデ調整し、三角状の微隆起線を作り出している。2本の粘土紐のうち、上位にあたる口唇部直下の三角状の微隆起線上を、棒状工具により三角状の連続刺突文が施文される。胎土に細粒の砂粒が含まれるが、焼成は比較的良好である。化粧土の塗り付けは見られない。色調は橙色である。

第Ⅲ群 2 類 (第44図33-39 写真図版21)

33-39は口縁部の破片である。口唇部は角状を呈し、溝状に凹む浅い沈線様の調整が施される。33は口唇部が溝状に凹む沈線様の調整が内側に向けて被う形になっているが、外側の部分をやや立ち上がり気味に調整したためと思われる。34-37は口唇部が押圧により外側に張り出している。34・35・36の口唇部は大きく張出している。36の口唇部は、外側、内側が斜めに切り落された頂部を、溝状に凹む沈線様の調整が施されている。37・39の口唇部の切り落される角度は幾分緩やかであるが、同様の調整が施されている。33-37は口縁部が外反するが、38は内湾、39はやや内湾する。器形は、胴部がふくらみ、頸部から口縁部に向けては大きく外傾する壺形土器と思われる。胎土は緻密であり、焼成は良好で硬堅である。色調は、34・35・38は鈍い黄橙色、33・36・37・39は鈍い赤褐色である。

第Ⅲ群 3 類 (第44図40・41 写真図版21)

40・41は口縁部の破片である。口唇部は丸みをもち、調整時の押圧により外側にやや張り出し、口縁部は外反する。器形は、胴部がふくらみ、頸部から口縁部に向けては大きく外傾する壺形土器と思われる。胎土は微細な砂粒が含まれ緻密であり、器表面がザラ付き、焼成は良好で硬堅である。色調は、外側が浅黄色、内側が鈍い黄橙色である。施文方法、胎土、色調などから同一団体と思われる。

第Ⅲ群 4 類 (第47図75 写真図版23)

75は頸部付近の破片と思われる。格子目文の沈線は極めて細くてシャープであり、沈線間の幅は狭く、やや等間隔で引かれる。格子目文帯と上位の磨消される境目に微隆起線がみられ、その微隆起線を挟んで器厚にやや違いがみられ、上位が幾分薄くなる。器厚は全体的に極めて薄い。器形は、胴部がふくらみ、頸部から口縁部に向けては大きく外傾する壺形土器と思われる。色調は鈍い黄橙色である。器表面にはススが付着している。

第IV群土器 古墳時代

1類：土師器坏

- a：内面の口縁部と体部との間に稜をもち外傾する
- b：内面の口縁部と体部との間に明確ではないが僅かな稜をもち外反する
- c：外面の口縁部と体部との間に稜をもち外傾する
- d：口唇部が丸みをもち、やや内湾する。
- e：口唇部が角状を呈し、口縁部が肥厚する。
- f：口唇部が丸みをもち、口縁部が肥厚する。
- g：底部がヘラケズリで、丸底を呈する。

2類：土師器甕

- a：口縁部がやや垂直気味に立ち上る
- b：口縁部が外反し、頸部に枕線が施され段をもつ
- c：口縁部が頸部より「くの字状」に屈曲して立ち上がり、胴部が張り出す

3類：須恵器

- a：口縁部下に段を持ち、かつ波状文が施文される。
- b：胴部は球状で、かつ波状文が施文される。

第IV群1類a（第45図42～49 写真図版21・22）

42～49は口縁部の破片であり、口縁部が丸みをもちすばまる。42・43・44は体部から口縁部にかけて外反するが、内面に明瞭ではないが僅かに稜がみられる。45・46・47は体部から口縁部にかけて「くの字状」に屈曲して立ち上がり、内面、外面に明瞭な稜がみられる。48・49は体部から口縁部にかけてやや外反しながら立ち上がるが、内面に明瞭ではないが僅かに稜がみられる。48の口縁部は押圧によりやや外側にめくれるような調整がされる。43・44・45・48・49は内外面ともに赤彩が施される。49は外面が黒色を呈する。

第IV群1類b（第45図50～52 写真図版22）

50～52は口縁部の破片である。50はやや丸いが口唇部先端が平らになるような調整がされる。51は口唇部が丸みを呈する。52は口唇部が丸く肥厚する。いずれも、体部から口縁部に向けていくらか外反する。器面は横位方向のミガキ調整される。

第IV群1類c (第45図53-56 写真図版22)

53-55は口縁部の破片である。54・55は口縁部と体部との境に明瞭な稜がみられる。53は口唇部が丸みを持ち、体部から口縁部にかけてやや外傾する。54・55は体部から口縁部にかけてやや外傾気味に立ち上がる。53は内面が黒色処理され、外面が赤彩される。54・55は黒色処理後に横位方向にミガキ調整される。56は体部から底部付近の破片であり、体部に明瞭な稜がみられる。内面に黒色処理の痕跡がみられるが、剥落している。

第IV群1類d (第46図57・58 写真図版22)

56・57は口縁部の破片である。いずれも口唇部は丸みを呈し、体部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がる。内外面が黒色処理をされ、横位方向にミガキ調整される。

第IV群1類e (第46図59・60 写真図版22)

59・60は口縁部の破片である。59は口縁部から口唇部にかけて幾分すぼまり、口唇部は角状に調整され、口縁部は肥厚し、横位方向にヨコナデ調整される。60は口縁部から口唇部にかけて幾分すぼまり、口唇部は角状に近いやや丸みを持ち、口縁部から体部にかけて縦位方向にヘラナデ調整される。59は体部から口縁部にかけてやや内湾気味に、60は体部から口縁部にかけてやや外傾気味に立ち上がる。

第IV群1類f (第46図61・62 写真図版22)

61・62は口縁部の破片である。61は口縁部から口唇部にかけてすぼまり、口唇部が丸く調整され、口縁部は肥厚する。62は口縁部から口唇部にかけて内面から外面に向かってすぼまり、口唇部がやや丸みを持ち、ヨコナデ調整される。61は体部から口縁部にかけてやや外傾気味に立ち上がる。

第IV群1類g (第46図63・64 写真図版22)

63・64は底部の破片である。底部は丸底である。63は体部との境に浅い段が見られる。底部はヘラミガキ調整である。64は内外面ともヘラケズリ調整である。

第IV群2類a (第46図65-67 写真図版22・23)

65・66は口縁部の破片である。頸部より口縁部がやや垂直気味に立ち上り、口唇部付近で幾分緩やかに外反する。65は口縁部から口唇部にかけて内面から外側に向かってすぼまり、口唇部がやや丸みを持ち、ヘラナデ調整である。66は口縁部から口唇部にかけてややすぼまり気味

になり、口唇部は丸みをもち、ヨコナデ調整である。67は口縁部から胴部上半である。口唇部は丸く調整され、調整時の押圧により口縁部から口唇部付近がやや外反する。頸部より口縁部がやや外傾し、胴部はやや球状に膨らむものと思われる。口縁部はヨコナデ調整、胴部がヘラナデ調整である。

第IV群2類b (第47図68~71 写真図版23)

68は胴部上半の破片である。縦位方向にヘラケズリ調整される。68は頸部に沈線が施され、段が見られる。69は胴部下半の破片である。縦位方向にヘラケズリ調整される。70・71は底部の破片である。70は胴部下半がヘラケズリ調整され、底部が幾分張出して脚付状に作られ、底面はやや凹みをもつような作りとなる。71は底面に木葉痕が残る。

第IV群2類c (第47図72~74 写真図版23)

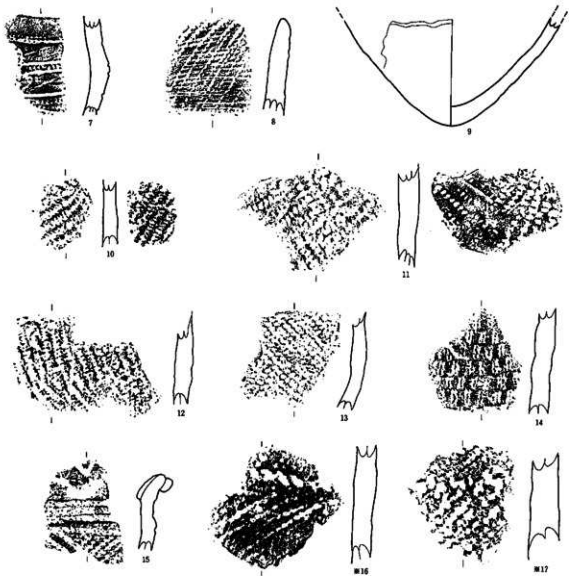
72~74は胎土、色調などから同一個体と思われる。口縁部が頸部より「くの字状」に屈曲して立ち上がり、肩部からやや屈曲して張り出し、球状に胴部が張り出して底部に向かってすばまると思われる。所謂、壺状の器形を呈するものと思われるが、詳細は不明である。

第IV群3類a (第47図76 写真図版23)

76は無蓋高坏の口縁部と思われる。口唇部は、角状を呈し、やや内側に向かって斜めに削ぎ落とされている。口縁部には、上下に大きく幅の狭い波状を呈する櫛播波状文が施文される。文様下に沈線が施され、低い張出しの稜がみられる。厚さが3.5~5.0mm、色調が暗赤褐色である。

第IV群3類b (第47図77 写真図版23)

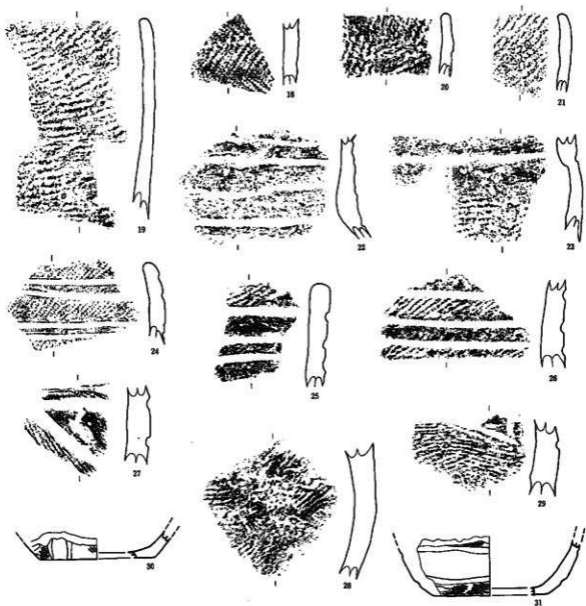
77は壺の球状を呈する胴部の円孔直下の部位の破片と思われる。平行に横走る浅い沈線、その間に上下に緩やかな波状を呈する幅広い櫛播波状文が施文される。器厚が3.0~4.0mm、色調が灰色である。



16・17 S=1/2 7・8・10-15 S=1/4 9 S=1/2

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・形状・外面	内面調査	胎土	分類	備考	時期別
7	IV区東側	II層	胴部	貝殻散線文+沈線文+貝殻散線任気文	ミガキ	麻布硬装	I-1		19
8	III区3h	II層	口縁部	貝殻散線任気文	ミガキ	麻布硬装	I-2		19
9	III区3h	II層	底面	貝殻土器	ナ	均一な硬装	I-3		19
10	III区	II層	胴部	草摺的横文 表裏横文	ナ	麻布・中硬装	I-4		19
11	III区3e	II層	胴部	草摺的横文 表裏横文	ナ	麻布・中硬装	I-4		19
12	III区	I層	胴部	草摺的横文	ナ	麻布・中硬装	I-4		19
13	III区西側	I層	胴部	草摺的横文	ナ	麻布・中硬装	I-4		19
14	IV区東側	II層	胴部	不整形糸文 器底面又付着	ナ	麻布・中硬装	I-5		19
15	I B 5 s	I層	口縁部	口縁部・口縁部粘土粒付 口縁部下層任気文	ミガキ	麻布硬装	I-6		19
16	III区西側	I層	胴部	羽状横文	ミガキ	麻布硬装	I-7		19
17	III区西側	I層	胴部	羽状横文	ミガキ	麻布硬装	I-7		19

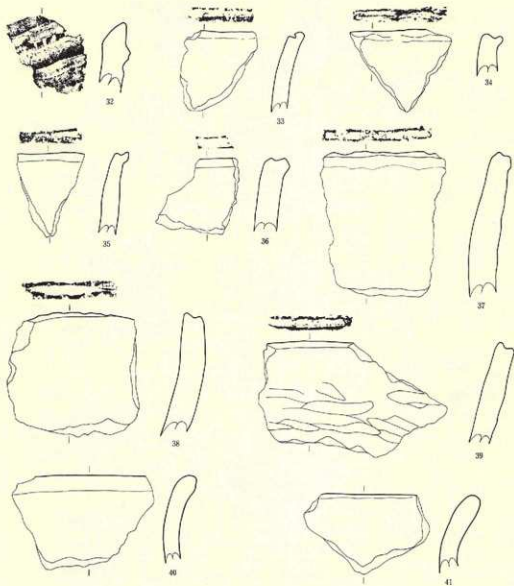
第42図 遺構外出土遺物 土器(1)



18-24・30・31 S=×
25-28 S=×

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調査	粘土	分類	備考	図録番号
18	ⅡC区西側 1層	浅鉢	胴部	斜状縄文	ミ	ガキ	粘岩硬質	I-7	19
19	ⅡC区西側 1層	浅鉢	口縁部	草胎斜縄文	ナ	ナ	粘岩・硬質	I-8	20
20	ⅡC区西側 1層	浅鉢	口縁部	草胎斜縄文	ナ	ナ	粘岩・硬質	I-8	20
21	ⅡC 2 c	浅鉢	口縁部	草胎斜縄文	ナ	ナ	粘岩・硬質	I-8	20
22	ⅡC 2 a	浅鉢	胴部	草胎斜縄文+洗線文	ナ	ナ	粘岩・硬質	I-9	20
23	ⅡC 2 a	浅鉢	胴部	草胎斜縄文+洗線文	ナ	ナ	粘岩・硬質	I-9	20
24	ⅡC 3 h	浅鉢	口縁部	草胎斜縄文+洗線文	ナ	ナ	粘岩硬質	II-1	20
25	ⅡC 3 e	浅鉢	口縁部	草胎斜縄文+洗線文	ナ	ナ	粘岩硬質	II-1	20
26	ⅡC区	浅鉢	胴部	草胎斜縄文+洗線文	ナ	ナ	粘岩硬質	II-1	20
27	ⅡC区西側 Ⅱ層	浅鉢	胴部	草胎斜縄文+洗線文	ミ	ガキ	粘岩硬質	II-1	20
28	ⅡC 4 c	浅鉢	胴部	草胎斜縄文+洗線文	ミ	ガキ	粘岩硬質	II-2	20
29	ⅡC区	1層	胴部	草胎斜縄文+洗線文	ミ	ガキ	粘岩硬質	II-2	20
30	ⅡC区	1層	底部	草胎斜縄文+洗線+磨研文	ミ	ガキ	粘岩硬質	II-3	20
31	ⅡC 3 c	浅鉢	底部	草胎斜縄文+洗線+磨研文	ミ	ガキ	粘岩硬質	II-3	20

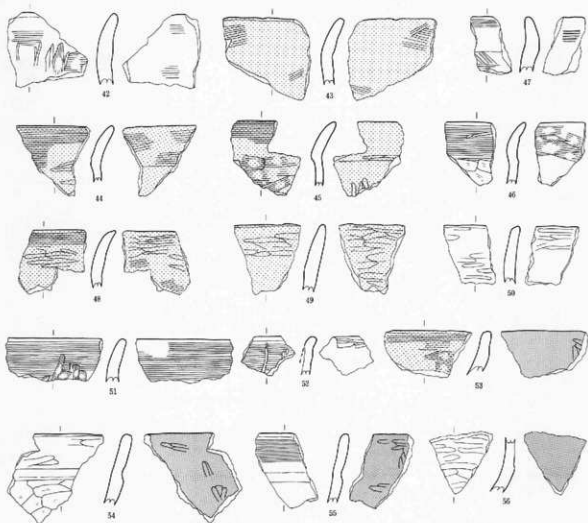
第43図 遺構外出土遺物 土器(2)



32-41 S-1/

番号	発土地点・層位	器種	部位	文様の特徴・器形・外面	内面調整	胎土	分類	備考	写真No
32	ⅢC区	土俵	口縁部	無胎起線上に三角状の刺突文	模範式C ₁ ・D式	ナ	緻密硬型	Ⅲ-1	21
33	ⅢC区	表段	口縁部	口縁部角状・口唇部彫状に調整	北大式	ナ	緻密硬型	Ⅲ-2	21
34	ⅢC区	1層	口縁部	口縁部角状・口唇部彫状に調整	北大式	ナ	緻密硬型	Ⅲ-2	21
35	ⅢC区	表段	口縁部	口縁部角状・口唇部彫状に調整	北大式	ナ	緻密硬型	Ⅲ-2	21
36	ⅢC区	表段	口縁部	口縁部角状・口唇部彫状に調整	北大式	ナ	緻密硬型	Ⅲ-2	21
37	ⅢC区西端	1層	口縁部	口縁部角状・口唇部彫状に調整	北大式	ナ	緻密硬型	Ⅲ-2	21
38	ⅢC区東端	1層	口縁部	口縁部角状・口唇部彫状に調整	北大式	ナ	緻密硬型	Ⅲ-2	21
39	ⅢC区	表段	口縁部	口縁部角状・口唇部彫状に調整	北大式	ナ	緻密硬型	Ⅲ-2	21
40	ⅢC2c	II層	口縁部	口縁部角状	丁 同一個体	ナ	緻密硬型	Ⅲ-3	21
41	ⅢC3e	II層	口縁部	口縁部角状	丁 同一個体	ナ	緻密硬型	Ⅲ-3	21

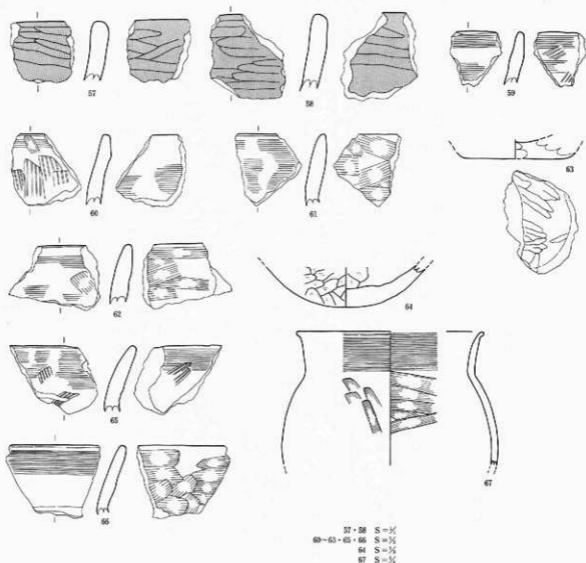
第44図 遺構外出土遺物 土器(3)



42-56 S=1/2

番号	出土地点・層位	器種	部位	特徴・備考	外面調整	内面調整	胎土	分類	JANIS号
42	ⅢC区 表層	土師器杯	口縁部		ヨコナデ	ヨコナデ	織成硬灰	IV-1-a	21
43	ⅢC3b Ⅱ層	土師器杯	内外面赤彩		ヘラナデ	ヘラナデ	織成硬灰	IV-1-a	21
44	ⅢC区東側1層	土師器杯	内外面赤彩		ヨコナデ	ヨコナデ	織成硬灰	IV-1-a	21
45	ⅢC区 表層	土師器杯	内外面赤彩		327P-ヘナデ	ヘラミガキ	織成硬灰	IV-1-a	21
46	ⅢC区 1層	土師器杯	内外面赤彩		ヨコナデ	ヘラナデ	織成硬灰	IV-1-a	22
47	ⅢC区 1層	土師器杯	口縁部		327P-ヘナデ	ヨコナデ	織成硬灰	IV-1-a	22
48	ⅢC区 表層	土師器杯	内外面赤彩		327P-ヘナデ	ヘラミガキ	織成硬灰	IV-1-a	22
49	ⅢC区西側1層	土師器杯	内外面赤彩		ヘラミガキ	ヘラミガキ	織成硬灰	IV-1-a	22
50	ⅢC区 1層	土師器杯	内外面赤彩		ヘラミガキ	ヘラミガキ	織成硬灰	IV-1-b	22
51	ⅢC区西側1層	土師器杯	口縁部		327P-ヘナデ	ヨコナデ	織成硬灰	IV-1-b	22
52	ⅢC区西側1層	土師器杯	口縁部		327P-ヘナデ	ヘラミガキ	織成硬灰	IV-1-b	22
53	ⅢC区 表層	土師器杯	口縁部	内面黒色処理 外面赤彩	ヨコナデ	ヘラミガキ	織成硬灰	IV-1-c	22
54	ⅢC区西側1層	土師器杯	口縁部	内面黒色処理 体部に検をもつ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	織成硬灰	IV-1-c	22
55	ⅢC区西側1層	土師器杯	口縁部	内面黒色処理 体部に検をもつ	ヨコナデ	ヘラミガキ	織成硬灰	IV-1-c	22
56	ⅢC区 表層	土師器杯	体部	内面黒色処理 体部に検をもつ	ヘラミガキ	(磨耗不明)	織成硬灰	IV-1-c	22

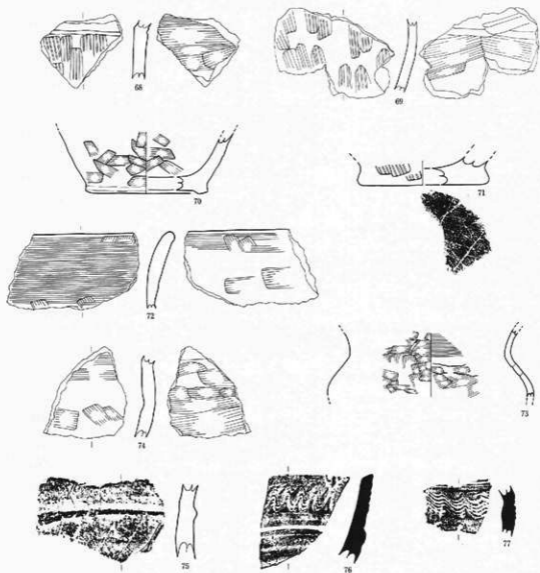
第45図 遺構外出土遺物 土器(4)



37・58 S=V
 60-63・65・66 S=V
 64 S=V
 67 S=V

番号	発土地点・層位	器種	部位	特徴・備考	外面調整	内面調整	胎土	分類	図録番号
57	ⅢC区西側1層	土師器 杯	口縁部	内外面黒色処理	ヘラミダキ	ヘラミダキ	粘赤硬質	IV-1-d	22
58	ⅢC区東側1層	土師器 杯	口縁部	内外面黒色処理	ヘラミダキ	ヘラミダキ	粘赤硬質	IV-1-d	22
59	ⅢC 3c Ⅱ層	土師器 杯	口縁部		ヨコナデ	ヨコナデ	粘赤硬質	IV-1-e	22
60	ⅢC区西側1層	土師器 杯	口縁部	体面にやや浅い稜をもつ	ヨコナデ・ヘラミ	ヨコナデ	粘赤硬質	IV-1-e	22
61	ⅢC区西側1層	土師器 杯	口縁部		ヨコナデ	ヘラナデ	粘赤硬質	IV-1-f	22
62	ⅢC区 表段	土師器 杯	口縁部		ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	粘赤硬質	IV-1-f	22
63	ⅢC 2 f Ⅱ層	土師器 杯	底 部		ヘラミダキ	ヘラミダキ	粘赤硬質	IV-1-g	22
64	ⅢC区 Ⅰ層	土師器 杯	底 部		ヘラケズリ	ヘラケズリ	粘赤硬質	IV-1-g	22
65	ⅢC区西側1層	土師器 甕	口縁部		ヨコナデ	ヨコナデ	粘赤硬質	IV-2-a	22
66	ⅢC 2 Ⅱ層	土師器 甕	口縁部		ヨコナデ	ヘラナデ	粘赤硬質	IV-2-a	22
67	ⅢC 2 c Ⅱ層	土師器 甕	口縁部		ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	粘赤硬質	IV-2-a	23

第46図 遺構外出土遺物 土器(5)



75-77 S=1/2
 68-72・74 S=1/2
 73 S=1/4

番号	出土地点・層位	器種	部位	特徴・備考	外面図勢	内面図勢	胎土	分類	図録番号
68	ⅢC区 1層	土師器	胴部	胴部に浅い沈線・段をもつ	ハ ケ ノ	ヨ コ ナ デ	織布織型	IV-2-b	23
69	ⅢC区中層出土層遺層	土師器	口縁部		ハ ケ ノ	ヘ ラ ナ デ	織布織型	IV-2-b	23
70	ⅢC区内側 1層	土師器	底面		ヘ ラ ナ デ	ヘ ラ ナ デ	均一なからやや軟質	IV-2-b	23
71	ⅢC区内側 1層	土師器	底面	本蓋状	ハ ケ ノ	(磨耗不明)	織布織型	IV-2-b	23
72	ⅢC 5e 1層	土師器	口縁部		ヨ コ ナ デ	ヨ コ ナ デ	織布織型	IV-2-c	23
73	ⅢC 5e 1層	土師器	胴部	同一個体	ヨ コ ナ デ	ヨコナデ+ヘラナデ	織布織型	IV-2-c	23
74	ⅢC 5d 1層	土師器	胴部		ヨ コ ナ デ	ヘ ラ ナ デ	均一なからやや軟質	IV-2-c	23
75	ⅢC区東側 1層	土師器	底面	格子目状沈線文	ヨ コ ナ デ	ヘ ラ ナ デ	織布織型	Ⅲ-4	23
76	ⅢC区 1層	土師器	口縁部	縞線状文			織布織型	IV-3-a	23
77	ⅢC区 1層	土師器	胴部	縞線状文		割 産	織布織型	IV-3-b	23

第47図 遺構外出土遺物 土器(6)

2. 石 器

調査区内の平坦部を中心として出土しており、剥片石器が主体を占め、礫石器は少ない。一部は遺構内から出土している石器も含めて分類している。概ね、分類の方法は、加工方法と形態を中心にして行なった。

(1) 石 鎌 (第48図3～11 写真図版24)

先端部が鋭利になっており、刺突を目的として使用されたものと考えられる剥片石器。

1類：基部が直線的なもの(平基無茎鎌) (3～9)

2類：基部に抉入のあるもの(凹基無茎鎌) (10・11)

(2) 石 匙 (第48図12～14 写真図版24)

両側辺から抉りを入れたつまみ部を有し、刃部を作り出している剥片石器。

第I群 縦長の形態を示す石匙

2 縁辺が直線的で、2 縁辺と先端部の3 縁辺部に刃部を作り出している (12)

第II群 横長の形態を示す石匙

1類：両側辺の1 縁辺または2 縁辺が緩やかな弧を描いて一点に収束し、2 縁辺部に刃部を作り出している (13)

2類：つまみ部の抉りがやや不明瞭な作りをしている (14)

(3) 石 竈 (第48図15 写真図版24)

偏平な礫を素材として、左右対称で撥形を呈する剥片石器。

(4) 不定形石器 (第49～51図16～56 写真図版24～27)

石鎌・石匙・石竈を除き、調整痕のある剥片石器を一括した。明瞭な刃部、調整痕を持つ部位により、次のように分類した。

第I群 剥片の1 縁辺部に刃部があるもの

1類：剥片の縦位に刃部を持つもの (16～20)

2類：剥片の下部に刃部を作り出しているもの (21～25)

第II群 剥片の2 縁辺部に刃部があるもの

1類：2 側縁に刃部が作り出されているもの (26～34)

2類：作り出された刃部が1 点に収束しているもの (35～41)

3類：隣接している2 縁辺部に刃部が作り出されているもの (42～44)

第III群 剥片の3縁辺部に刃部があるもの

1類：不整形をしているもの (45)

2類：円形をしているもの (46)

3類：三角形をしているもの (47)

第IV群 剥片の縁辺部全体に刃部があるもの (48)

第V群 刃部を作り出さずにマイクロ・フレイキングが認められるもの (49-52)

第IV群 剥片の縁辺の一部に挟入の刃部をもつもの (53-56)

(5) 磨石 (第52図57-63 写真図版28)

亜角礫または円礫が研磨部分を有する礫石器

1類：円礫に研磨部分のみられるもの (57)

2類：棒状の亜角礫の稜部に研磨部分のみられるもの (58-61)

3類：棒状の亜角礫の稜部に研磨部分と稜部の先端に敲打痕のみられるもの (62・63)

(6) 凹石 (第52・53図64-66 写真図版28)

円礫の片面・両面に、擦り凹めるかまたは敲打により凹部を作り出し礫石器。

1類：棒状の亜角礫の3面に凹部がみられるもの (64)

2類：円礫の2面に凹部がみられるもの (65・66)

(7) 打製石斧 (第53図67・68 写真図版28)

自然礫や大型の剥片を利用して、打ち欠きや敲打により石斧として成形され、全体の形が短冊形に作られた石器。

1類：片面のみ加工し刃部を作り出してしているもの (67)

2類：両面を加工して刃部を作り出してしているもの (68)

(8) 磨製石斧 (第53 図69 写真図版28)

両側縁および頭部が研磨され、両面を加工し刃部を作りだし、短冊形に作られた石器

(9) 石錘 (第53図70 写真図版28)

楕円形の扁平な長軸方向の縁辺に、2個1対の挟入を有する礫石器。

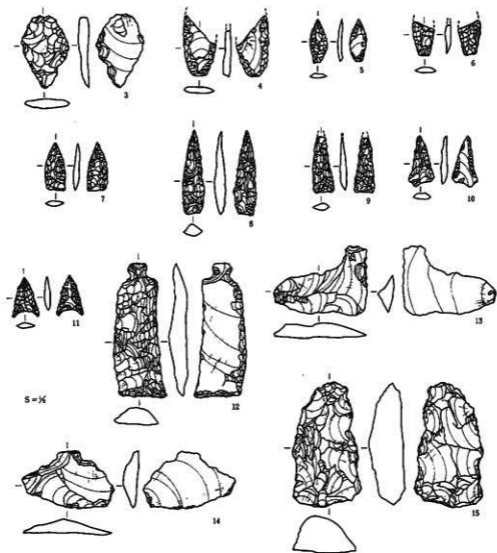
00 拇指状円形搔器 (第54・55図71~106 写真図版29~30)

古墳時代の土壌に伴う黒曜石製拇指状円形搔器

- 1類：剥辺の上面にのみ自然面を残しているもの (71~76)
- 2類：剥片の横位の1面にのみ自然面を残しているもの (77~89)
- 3類：剥片の横位の2面に自然面を残しているもの (90・91)
- 4類：剥片の全面に自然面を全く残さないもの (92~105)
- 5類：原石のごく一部に打突痕がみられるもの (106)

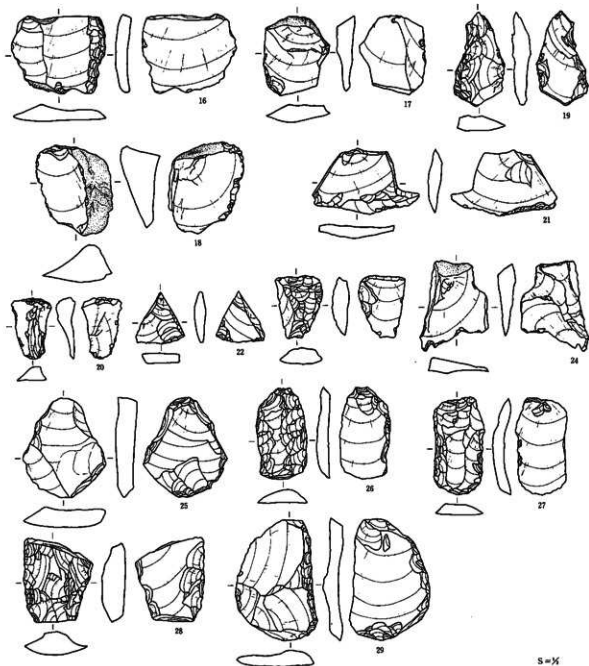
01 石製品 (第55図107 写真図版30)

楕円状の脆弱な石製品である。器面には調整時の擦痕が見受けられる。垂飾品として利用されたと思われる穿孔痕がみられず、用途不明である。



序号	出土地点·层位	器 种	法 量 (cm)			重量 (g)	石 质·层 地·生成年代	特 殊·附 考	分 类	写 照 号
			长	宽	厚					
3	ⅡC区墓室 Ⅰ层	石箭	4.7	2.5	0.6	4.95	磨光黄泥质砂岩 平石西麓 新第三系中统晚		1-1	24
4	ⅡC 2 c Ⅱ层	石箭	3.2	1.7	0.4	2.15	磨光黄泥质砂岩 平石西麓 新第三系中统晚		1-1	24
5	ⅡC 2 e Ⅱ层	石箭	2.3	0.9	0.2	0.45	细泥质砂岩 平石西麓 新第三系中统晚		1-1	24
6	ⅡC区墓室 Ⅰ层	石箭	1.8	1.2	0.4	0.6	磨光黄泥质砂岩 平石西麓 新第三系中统晚		1-1	24
7	ⅡC区墓室 Ⅰ层	石箭	2.5	1.1	0.3	0.85	磨光黄泥质砂岩 平石西麓 新第三系中统晚		1-1	24
8	ⅡC区 Ⅰ层	石箭	4.5	1.2	0.6	2.65	磨光黄泥质砂岩 平石西麓 新第三系中统晚		1-1	24
9	ⅡC区墓室 Ⅰ层	石箭	2.9	1.1	0.4	1.0	磨光黄泥质砂岩 平石西麓 新第三系中统晚		1-1	24
10	ⅡC 2 c Ⅱ层	石箭	2.7	1.3	0.3	0.95	细泥质砂岩 平石西麓 新第三系中统晚		1-2	24
11	ⅡC 2 d Ⅱ层	石箭	2.1	1.4	0.3	0.56	磨光黄泥质砂岩 平石西麓 新第三系中统晚		1-2	24
12	ⅡC 2 b Ⅱ层	石砧	6.1	2.8	0.9	17.6	细泥质砂岩 平石西麓 新第三系中统晚		2-1	24
13	ⅡC 3 b Ⅱ层	石砧	3.7	4.9	0.8	9.9	磨光泥岩 平石西麓 新第三系中统晚		2-1-1	24
14	ⅡC区墓室 Ⅰ层	石砧	2.9	4.8	0.8	8.25	细泥质砂岩 平石西麓 新第三系中统晚		2-1-2	24
15	Ⅳ区中央部 Ⅱ层	石瓦	6.7	3.6	1.9	44.8	磨光泥岩 平石西麓 新第三系中统晚		3	24

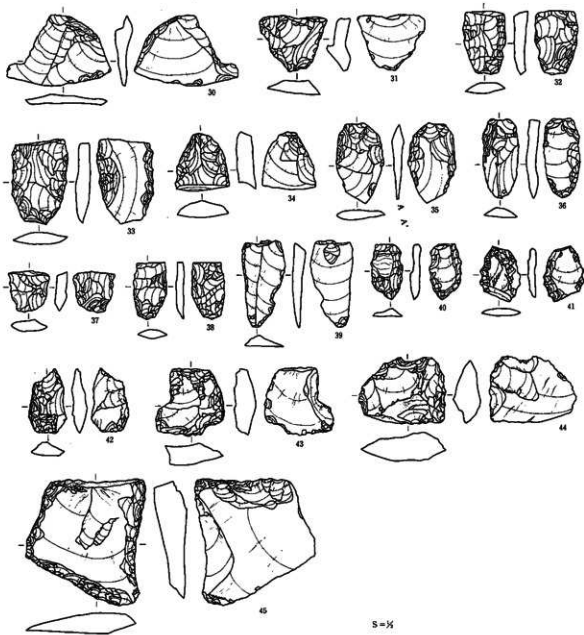
第48图 造桥外出土遗物 石器(1)



S=1/2

序号	出土地点·层位	器 名	法 量 (cm)			重量(g)	石 质·产 地·生成年代	特 征·备 考	分 别	所属层位	
			长径	宽	厚径						
16	III C 区 I 层	不定形	4.1	5.0	0.9	21.35	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-1-1	24	
17	III C 区东部 II 层	不定形	4.2	3.5	1.0	14.45	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-1-1	24	
18	III C 区东部 II 层	不定形	4.9	4.1	2.2	33.15	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-1-1	25	
19	III C 区西部 I 层	不定形	5.0	2.7	1.0	11.85	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-1-1	25	
20	III C 2 b	红褐色	3.2	2.1	1.0	4.6	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-1-1	25	
21	III C 3 区东部 I 层	不定形	3.5	5.6	0.7	12.15	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-1-2	25	
22	III C 3 d	红褐色	2.7	2.6	0.6	3.5	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-1-2	25	
23	III C 区	侧视	3.3	2.5	0.9	7.5	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-1-2	25	
24	III C 区西部 I 层	不定形	4.8	3.7	1.1	12.15	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-1-2	25	
25	IV 区中央部 III 层	不定形	3.3	4.5	1.1	30.25	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-1-2	25	
26	III C 2 d	II 层	不定形	4.8	2.7	0.9	11.55	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-II-1	25
27	IV 区中央部 III 层	不定形	5.1	2.7	0.6	12.1	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-II-1	25	
28	III C 3 I	II 层	不定形	4.4	3.6	1.4	23.25	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-II-1	25
29	IV 区中央部 III 层	不定形	6.5	4.3	0.9	26.3	硬质燧石 平石西部 新第三系中新统		4-II-1	25	

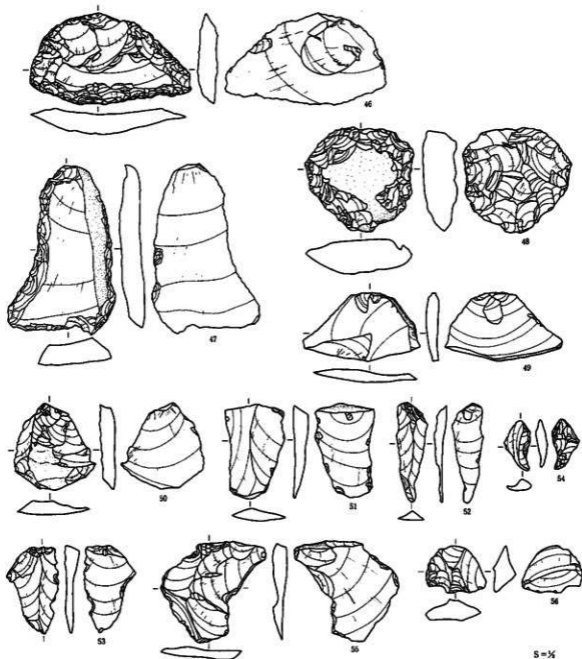
第49图 遗物出土物 石器(2)



S=1/4

序号	出土地点·层位	形制	长度(cm)			重量(g)	石质·产地·生成年代	特征·编号	分期	平面图
			最大	宽	厚度					
30	III C区西侧 I层	不定形	3.7	5.5	0.7	10.09	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—1	26	
31	III C区西侧 I层	不定形	3.0	3.5	1.2	9.1	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—1	26	
32	III C区东侧 I层	不定形	3.4	2.3	0.7	6.5	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—1	26	
33	III C 3 d II层	不定形	4.5	3.0	0.8	11.75	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—1	26	
34	III C 4 d II层	不定形	3.0	2.9	1.0	8.35	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—1	26	
35	III C 2 h II层	不定形	4.3	2.6	0.7	6.4	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—2	26	
36	III C 2 c II层	不定形	4.2	2.0	0.7	5.8	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—2	26	
37	III C 3 d II层	不定形	3.2	2.2	0.6	2.7	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—2	26	
38	III C 3 d II层	不定形	3.3	1.8	0.5	3.1	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—2	26	
39	III C区西侧 I层	不定形	4.6	2.2	1.0	6.35	燧石类 本土产地 古中代	4—II—2	26	
40	III C 3 h II层	不定形	3.9	1.7	0.5	2.44	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—2	26	
41	III C 3 i II层	不定形	2.9	2.1	0.4	3.0	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—2	26	
42	III C 2 h II层	不定形	3.4	2.6	0.8	4.66	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—2	26	
43	III C区 I层	不定形	3.6	3.6	1.2	18.45	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—3	26	
44	III C 2 h II层	不定形	3.5	4.6	1.5	23.79	燧石类 鄂东三基中朝统	4—II—3	26	
45	IV区中央部 II层	不定形	6.7	6.4	1.6	65.0	燧石类 鄂东三基中朝统	4—III—1	26	

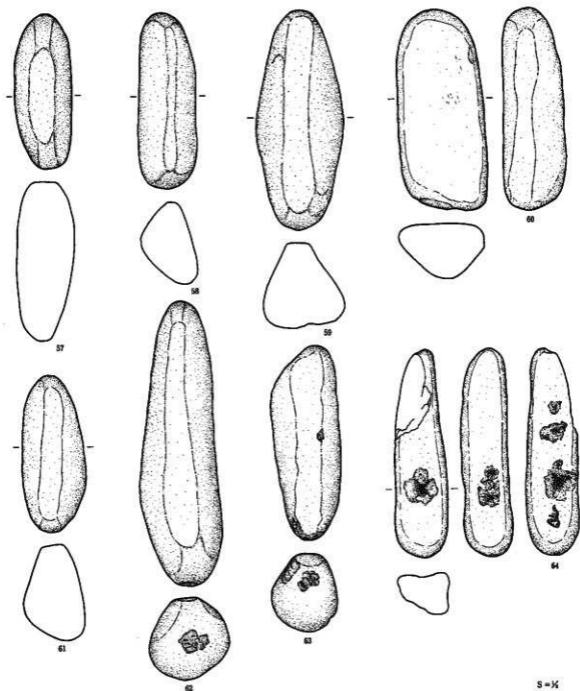
第50图 淮阴外出土器物 石器(3)



5-56

序号	出土地点·层位	器 名	直 径 (cm)			重量 (g)	石 质·产 地·生 成 年 代	特 征·备 考	分 期	写 真 照
			最 大	横	厚 度					
46	IV区中央部 II层	不定形	4.8	8.4	1.4	52.2	燧石片岩 宇石西原 新第三系中统统	4-III-2	27	
47	IV区中央部 II层	不定形	9.1	5.7	1.4	75.0	燧石片岩 宇石西原 新第三系中统统	4-III-3	27	
48	IV区中央部 II层	不定形	5.6	5.7	1.5	62.0	燧石片岩 宇石西原 新第三系中统统	4-IV	27	
49	IA18b I层	不定形	3.6	6.3	0.6	14.15	燧石片岩 宇石西原 新第三系中统统	4-V-1	27	
50	III区西侧 I层	不定形	4.6	4.4	0.7	16.25	燧石片岩 宇石西原 新第三系中统统	4-V-2	27	
51	III区东侧 I层	不定形	5.0	3.2	0.8	11.6	燧石片岩 宇石西原 新第三系中统统	4-V-2	27	
52	III C 2 c II层	不定形	5.3	1.6	0.6	3.25	燧石片岩 宇石西原 新第三系中统统	4-V-2	27	
53	III C 5 e II层	不定形	4.6	2.7	0.8	5.75	燧石片岩 宇石西原 新第三系中统统	4-VI	27	
54	III区西侧 I层	不定形	2.6	1.4	0.6	1.65	燧石片岩 宇石西原 新第三系中统统	4-VI	27	
55	III区西侧 I层	不定形	5.2	5.6	0.9	19.25	燧石片岩 宇石西原 新第三系中统统	4-VI	27	
56	III区东侧 I层	不定形	2.5	3.2	1.3	7.8	燧石片岩 宇石西原 新第三系中统统	4-VI	27	

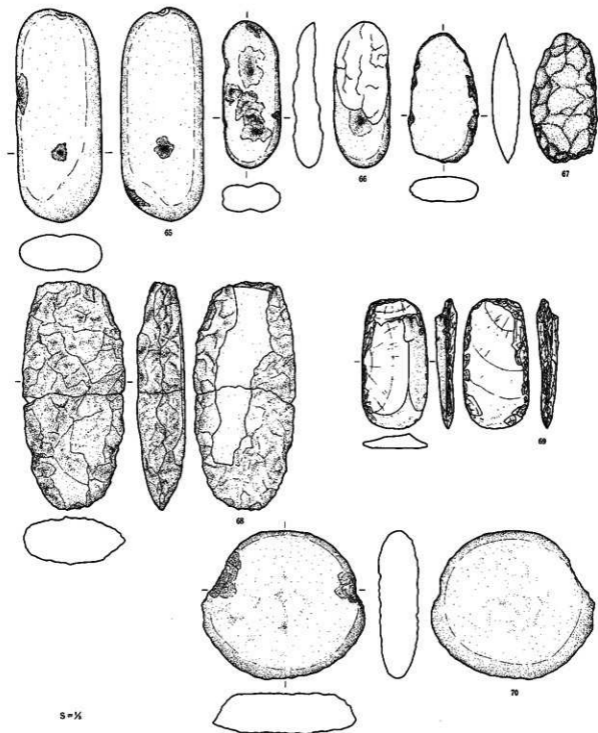
第51图 造桥外出土遺物 石器(4)



S-14

番号	出土地点・層位	器種	法			重量(g)	石質・産地・生成年代	特徴・備考	分類	写真番号
			長さ	幅	厚さ					
57	日田区 赤塚	燧石	11.2	4.6	12.6	1150.0	愛媛安山岩 宇石町・新保 新保三系中新統		S-1	28
58	日田区 日層	燧石	14.0	4.7	6.9	630.0	阿蘇石(安山岩) 日手丸山層 新保系		S-2	28
59	日田区赤塚(燧石付泥)	燧石	17.5	7.0	7.3	1085.0	阿蘇石(安山岩) 日手丸山層 新保系		S-2	28
60	日田区赤塚(燧石付泥)	燧石	16.1	7.2	4.4	848.0	阿蘇石(安山岩) 日手丸山層 新保系		S-2	28
61	日田区(燧石)	燧石	12.5	5.1	7.6	545.0	阿蘇石(安山岩) 日手丸山層 新保系		S-2	28
62	日田区 c	燧石	22.9	7.0	6.5	1205.0	緑色硬頁岩 宇石町新保 新保三系中新統	融石としての使用痕	S-3	28
63	日田区 b	燧石	16.5	5.6	6.2	795.0	緑色硬頁岩 宇石町新保 新保三系中新統		S-3	28
64	日田区	燧石	16.6	4.3	3.3	419.0	緑色硬頁岩 宇石町新保 新保三系中新統		S-1	28

第52図 遺構外出土遺物 石器(5)



序号	出土地点·层位	形制	注 录 (cm)			重量 (g)	石质·产地·生成年代	特徵·编号	分期	平面图
			长度	幅	厚度					
65	田C区西段 1层	卵石	17.0	7.7	3.0	480.0	褐色石英岩 太平火山群 磨石类		6-2	28
66	田C 2 e 11层	卵石	11.6	4.5	2.3	140.0	褐色石英岩 太平火山群 磨石类		6-2	28
67	11层	玻璃 打靶石片	10.3	5.6	2.1	160.0	绿色玻璃岩 平谷南群 第三系中统统		7-1	28
68	田C区 1层	打靶石片	17.5	8.3	3.8	735.0	绿色玻璃岩 平谷南群 第三系中统统		7-2	28
69	田B区 表组	磨制石片	10.2	5.2	1.7	160.0	绿色玻璃岩千枚岩 北上山群 古生界		8	28
70	田B区 表组	石磨	11.7	13.1	3.2	640.0	褐色石英岩 太平火山群 磨石类		9	28

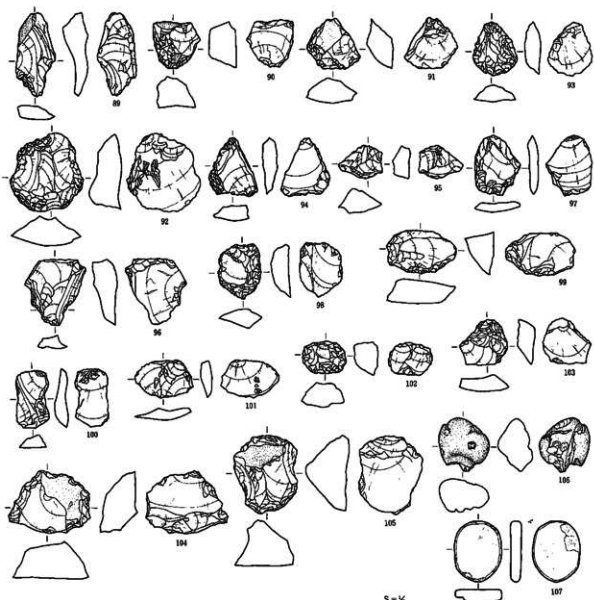
第53图 遗構外出土遺物 石器(6)



S=1/4

番号	出土地点・層位	器種	法			重量(g)	材質・産地(試料番号)・生成年代	特徴・備考	分類	所属層位		
			長さ	幅	厚さ							
71	ⅡC区	I層	蹄形状内形器	2.0	2.1	1.1	0.8	燧石		10-1	29	
72	ⅡC区	I層	蹄形状内形器	3.5	2.4	1.4	12.95	燧石		10-1	29	
73	ⅡC区	I層	蹄形状内形器	1.8	2.4	0.8	3.4	燧石		10-1	29	
74	ⅡC区	I層	蹄形状内形器	2.0	2.4	0.7	3.8	燧石		10-1	29	
75	ⅡC区	I層	蹄形状内形器	2.3	2.3	1.3	6.6	燧石		10-1	29	
76	ⅡC 4 f	II層	蹄形状内形器	3.2	2.6	0.7	5.8	燧石		10-1	29	
77	ⅡC区	I層	蹄形状内形器	3.0	2.3	1.1	10.0	燧石		10-2	29	
78	ⅡC区	I層	蹄形状内形器	2.6	2.7	2.0	15.5	燧石		10-2	29	
79	ⅡC区	I層	蹄形状内形器	2.4	4.2	1.8	14.95	燧石		10-2	29	
80	ⅡC区	I層	蹄形状内形器	2.6	2.2	0.9	3.25	燧石		10-2	29	
81	ⅡC区西側	I層	蹄形状内形器	2.1	3.1	1.1	7.0	燧石	番号直(CM118)		10-2	29
82	ⅡC区西側	I層	蹄形状内形器	3.7	3.3	1.2	12.4	燧石	番号直(CM119)		10-2	29
83	ⅡC区西側	I層	蹄形状内形器	3.2	3.0	1.6	13.5	燧石	不明(CM120)		10-2	29
84	ⅡC区東側	I層	蹄形状内形器	1.8	2.1	0.8	3.7	燧石		10-2	29	
85	ⅡC区東側	I層	蹄形状内形器	2.6	2.3	1.0	6.7	燧石	番号直(CM121)		10-2	29
86	ⅡC 5 e	II層	蹄形状内形器	2.4	3.3	0.6	3.9	燧石	番号直(CM122)		10-2	29
87	ⅡC 3 f	II層	蹄形状内形器	2.7	2.7	1.2	8.9	燧石	番号直(CM123)		10-2	29
88	ⅡC 4 f	II層	蹄形状内形器	1.9	2.2	0.9	2.65	燧石	番号直(CM124)		10-2	29

第54図 遺構外出土遺物 石器(7)



S = 1/4

番号	出土地点・層位	器種	法 量 (mm)			重量 (g)	石質・産地(試料番号)・生成年代	特徴・備考	分類	不明材料
			長さ	幅	厚さ					
89	ⅢC 4 f	II層	剥離状内砂撈盆	4.4	2.1	1.2	8.35	燧石 海金産 (28125)	10-3	29
90	ⅢC 区	I層	剥離状内砂撈盆	2.4	2.5	1.6	12.2	燧石 海金産 (28126)	10-3	29
91	ⅢC 4 e	II層	剥離状内砂撈盆	2.6	2.8	1.3	7.85	燧石 不明 (28127)	10-3	29
92	ⅢC 区	I層	剥離状内砂撈盆	4.1	3.9	1.6	25.15	燧石	10-4	29
93	ⅢC 区	I層	剥離状内砂撈盆	2.8	2.3	0.9	4.8	燧石	10-4	29
94	ⅢC 区	I層	剥離状内砂撈盆	3.0	2.6	0.8	5.9	燧石 海金産 (28128)	10-4	30
95	ⅢC 区	I層	剥離状内砂撈盆	1.7	2.3	1.3	3.8	燧石	10-4	30
96	ⅢC 区	I層	剥離状内砂撈盆	3.5	3.3	1.2	12.7	燧石 不明 (28129)	10-4	30
97	ⅢC 区西側	I層	剥離状内砂撈盆	3.1	2.4	0.5	4.3	燧石 海金産 (28131)	10-4	30
98	ⅢC 区西側	I層	剥離状内砂撈盆	2.9	2.3	1.0	5.6	燧石 十層産 (28132)	10-4	30
99	ⅢC 区西側	I層	剥離状内砂撈盆	2.2	3.7	1.3	11.85	燧石 海金産 (28133)	10-4	30
100	ⅢC 区西側	I層	剥離状内砂撈盆	3.1	1.6	0.7	3.95	燧石 海金産 (28134)	10-4	30
101	ⅢC 4 b	II層	剥離状内砂撈盆	2.6	3.1	0.6	3.1	燧石 海金産 (28135)	10-4	30
102	ⅢC 4 f	II層	剥離状内砂撈盆	1.7	2.3	1.3	6.05	燧石 海金産 (28136)	10-4	30
103	ⅢC 4 f	II層	剥離状内砂撈盆	2.3	2.6	0.9	4.65	燧石 海金産 (28137)	10-4	30
104	ⅢC 区西側	II層	剥離状内砂撈盆	3.3	4.2	1.9	28.85	燧石	10-4	30
105	ⅢC 区西側	II層	剥離状内砂撈盆	4.1	3.3	2.4	38.4	燧石	10-4	30
106	ⅢC 区西側	I層	剥離状内砂撈盆	2.8	2.7	1.7	13.25	燧石 海石産 (28138)	10-5	30
107	ⅢC 区	表層	石製品	3.2	2.5	0.6	4.8			30

第55図 遺構外出土遺物 石器(B)・石製品

VI.まとめ

1. 縄文時代について

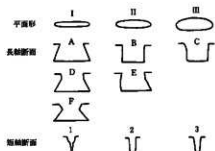
(1) 竪穴住居跡

調査区ⅢC区西部の南西向き斜面から検出されたⅢC 2 b 竪穴住居跡は、遺構の上面が削平され、かつ南西部が流失しているなど詳細については不明である。遺構の規模は径が約3m程度であり、遺構内及びその周辺から、脆弱であるが縄文時代前期の植物性繊維が混入した土器の細片が出土している。このことから、遺構の時期としては上記に比定されるものと思われるが、推測の域でしかない。また、調査区Ⅰ・Ⅱ区の範囲では竪穴住居跡の存在は確認できなかつたが、狩り場跡を示唆する陥し穴状遺構があることから、これらの施設に関連する集落跡が近郊に存在する可能性が考えられる。

(2) 陥し穴状遺構

本遺跡で検出された陥し穴状遺構は、Ⅰ区から6基、Ⅱ区から12基、Ⅲ区から4基、計22基検出された。そのうち、平面形が溝状のもの14基、楕円形のもの8基である。長軸の長さは4m以上のもの1基、3～4mのもの11基、2～3mのもの3基、2m以下のもの7基である。検出面からの深さは、50cm以下のもの1基、50cm～1mのもの11基、1m以上のもの10基である。平面形は概念図のように模式化すると、Ⅰ型は幅が狭く細長いもの、Ⅱ型は葉巻型のもの、Ⅲ型は幅広でずんぐりしたやや楕円形のもの3形状に分類できる。Ⅰ型が9基、Ⅱ型が5基、Ⅲ型が8基であり、Ⅰ型とⅡ型は、Ⅱ型の上面が削平されたものを分類したものであるから、本来は14基である。短軸断面形は、1型(Y字状)は11基、2型(U字状)は3基、3型は8基である。長軸断面形は、A形(台形状)が1基、B型5基、C型が2基、D型が3基、E型が4基、F型が7基である。長軸方向は等高線にわずかに直交するものは5基で、等高線に沿うものが多く、南側に流れる栗石川に向かって並んでいる。調査区ⅡB区では3c-1・2陥し穴状遺構、3d陥し穴状遺構の3基は、55cmと145cmという僅かな間隔のところに構築されている。

遺構は、獣道に沿って構築され、河川(沢)に向かう尾根から斜面に向かって配列されている。このことから、遺構の配列状況は地形と密接な関係を持つものと思われる。



第56図 陥し穴状遺構概念図

2. 古墳時代について

(1) 土墳墓

仁沢瀬II遺跡から検出された古墳時代の土墳13基は、二つの沢に挟まれて南東に舌状に張り出す馬背状の丘陵地に構築されている。遺構は、規則性をもって東西または南北に並列するなどの計画性をもった配列を意識して構築されたとは考えにくい。遺構の埋土上部は畑作により削平を受けているものもあり遺存状況が良好であるとはいえない。また、人骨の出土という墓瘞としての直接的証拠は検出できなかったが、副葬品と思われる埋納された土師器杯・甕、石質が黒曜石ではないが黒色の拇指状円形搔器の出土など、墓瘞と想定される様相が見られる。

- ・遺構の長軸方向は、 $W-8^{\circ}-N-W-21^{\circ}-N$ の範疇にあり、北西-南東方向に楕円形に構築される共通性が見られる。
- ・平面形は円形のもの10基、楕円形のもの3基である。円形のもの埋土中位から底面に礫が1個乃至、数個置かれるものが2基ある。断面形は、平面形で楕円形のものU字状、円形のものややU字状から袋状を呈する傾向が見られる。
- ・検出面での規模は、円形のもの開口部径が100~120cm、底部径90~110cm、深さは最深のもので40~50cmで平均15~30cmである。楕円形のもの開口部90~110×130~135cm、底部75~100cm、深さ10~25cmである。
- ・埋土については、遺構検出時にⅢC 4 g-1土墳の埋土上位に焼土が置かれてある。遺構は、構築時のもっと深かったと思われ、遺構の中位から底面付近に置かれたと推測される。
- ・遺構内から遺物が出土したのは5基であり、遺物量は少ない。ⅢC 2 e土墳とⅢC 3 e-2土墳内から土師器甕の口縁部と胴部破片が出土している。ⅢC 4 g-1土墳内から土師器杯の体部破片が出土している。ⅢC 3 h-2土墳内から一部自然面を残す黒色の拇指状円形搔器が出土している。ⅢC 4 h土墳の長軸方向の東南隅から土師器杯と甕が合口状に重ねて埋められた状態で検出された。
- ・調査区ⅢC区のⅢC 4 h土墳内から出土した土師器杯は内面が赤彩処理され、器形は、底部は丸底であり、内面に口縁部と体部との間にわずかな稜を有する。体部は内湾しながら丸みをもって外傾して立上り、頸部がややくびりて口縁部に向かって外反する。口唇部の形状は外側に向かってすぼまる。器形・口縁部の作りから南小泉式の範疇に収まるものと思われる。
- ・土墳群の周辺および調査区全域から黒曜石製拇指状円形搔器、赤彩された土師器杯片などが出土している。遺構の構築時期は出土した土器より古墳時代(5世紀後半~6世紀前半)に比定される。

仁沢瀬II遺跡に類似する遺構・遺物の例は、岩手県内でも検出されているが、土墳内の長軸端からの埋納された土器の出土例の類例は極めて少ない。

1965～66年に調査された盛岡市永福寺山遺跡は、古式土師器から4世紀前後とされ、敷基の墓壇状の竪穴とその内外から江別Ⅲ式土器、墓壇内から縁辺部に朱塗りと穿孔底をもつ土器、柱穴からは直刃の鉄鎌、副葬品と思われる勾玉、五領式に併行する古式土師器、その他天王山式系の弥生土器が出土している。1990年に調査された滝沢村仏沢Ⅲ遺跡は、焼土遺構及び土壇が検出されている。土壇内から後北式土器（後北C₂D式）と古式土師器のほか、遺構の周辺から黒曜石製拇指状円形搔器、その他天王山式系の弥生土器が出土している。相伴した土師器から4世紀前後に比定されると思われ、形態としては統繩文期のものとされる。1992年同村大石渡遺跡で4世紀とされる土壇1基が検出され、後北式土器、黒曜石の切片、石製管玉などの遺跡が出土している。1989～91年に調査された北上市岩崎台地遺跡では、周埴をもつ古墳7基、土壇12基が検出され、その主体部より6世紀後半から7世紀前半（古墳時代後・末期）の土師器壺などが出土している。また、主体部、遺構の埋土、遺構外より黒曜石製拇指状円形搔器が多量に出土している。

北海道の類例をみると、長軸端の一方の側壁に袋状の埴り込みを設け土器を埋納する例は、恵庭市柏木B遺跡、余市町天内山遺跡で確認されている。後北C₂・D式土器は札幌市K135遺跡、小樽市餅屋沢遺跡において天王山式系の土器との相伴がみられる。また餅屋沢遺跡からは攪乱層から五領式と思われる古式土師器（高坏または器台の脚部）が出土している。また、時期は下がるが、7世紀中葉前後に比定される千歳市ウサクマイ遺跡では、4隅に柱穴を持つ4例、土壇に袋状の埴り込みを持つ9例のうち3例に土器が埋納され、包含層よりラウンドスクレーパーが出土している。

東北地方でも同様の遺構が検出されているので数例をあげてみたい。

近郊では秋田県での2例がある。1986年に調査された能代市寒川II遺跡では、南西—北東方向の標高約24mの尾根上から3～4世紀代の土壇墓6基が検出された。6基のうち4基は長軸を尾根に延びる方向にほぼ直交して1列に並び、その長軸をほぼ尾根の延びる方向に沿わせている。遺構は楕円形を呈し、遺構内の長軸端より埋納された朱塗りの片口土器、甕形土器などが出土している。土器の時期は文様、施文方法から江別式（後北式）C₂・D式土器及び小坂X式土器が相伴して出土している。土器の埋納状況は、1990年に調査された横手市田久保下遺跡の場合も同様である。遺跡は沖積地よりやや高い尾根状の敷高地に立地する。東西方向の軸線上に、30～40cm感覚で南北に並ぶ7基と、この土壇墓列の西約4mに1基検出されている。形状は、平面形が楕円形もしくは隅丸長方形を呈し、規模は長さ90～120cm、幅55～85cm、深さ40～65cmである。土壇墓はすべて東端に埴り込みを有し、その内の3基は土器を埋納するための埴り込みによる張り出しがみられる。土壇墓内から副葬品とみられる2個体の土器を一对とした合口状の土師器・須恵器、鉄製品が出土している。その組合せをみると、土師器の組合せでは坏+

環1組、環+竇2組、環+壺2組、環+埴1組、須恵器の組合せでは壺+環1組となっている。土師器環は内黒である。埋土の上位から中位には多量の黒曜石、少量のメノウと頁岩の剥片が出土している。時期は土師器・須恵器の形状から6世紀中頃～後半に比定される。須恵器蓋・環は6世紀後半に比定される。

特に、仁沢瀬Ⅱ遺跡で検出された土墳墓の形態は、1990年に調査された横手市田久保下遺跡の例と極似し、2個体一対で埋納された土師器環と壺の口縁部と底部の作りを除けば器形全体がよく似ている。

1976年に調査された福島県西白河群東村谷地前C遺跡では、6世紀代の土墳墓6基が検出されている。6基のうちの1基から土師器鉢が埋納された状態で出土している。遺構は隅丸長方形を呈し、法量は長辺約2.5～3m、短辺1m前後である。報告書によると、出土土器は佐平林式土器の範疇、つまり6世紀中葉前後としている。

これらの遺跡は、北海道から北東北地方などでもみられる、土墳墓の規模、形状、土器または黒曜石など副葬品の埋納方法などの遺構と遺物が検出され、所謂統縄文期葬制の類似性を想起させるものであり、該期の研究上貴重である。

(2) 遺物

調査区ⅢC区（仁沢瀬Ⅱ遺跡）は、二つの沢に挟まれて南東に舌状に張り出す馬背状の丘陵地上にあり、古墳時代の土墳群が集中して構築され、その周辺から遺物が出土している。遺物について、類例をもとに検討した内容をまとめると、次のようなことが指摘できる。

- ・後北式土器片は、時期的には微隆起線上に三角状の刺突文があることから後北式C₁式に比定されるであろうが、化粧土が施されないことなどから、時期的にはC₂・D期の新しい時期に属する可能性があるものの北大Ⅰ式期までには入らない。
- ・北大式に比定されると思われる土器片は、口唇部が凹字状の溝状に削られる例は北大Ⅱ式にみられる。一方、口縁部に突瘤文がなく、口唇部が溝状に削られているもののうち、意識的に特に深く作られるものもあることなどから、擦文初期には入りにくく北大式終末期に持ってきて無理はないと思われる。しかし、後北式土器片がC₂・D期の新しい時期に属する可能性があることなどから、今後、併行関係を含めて検討の余地があるものと思われるが、仁沢瀬遺跡では北大Ⅱ式土器の範疇で把握できるものと思われる。
- ・格子目状の沈線を持つ土器片については、格子目文と磨消しによる無文との境に無文部分を作り出すために削り寄せてきたと思われる微隆起線が、両文様帯を区切るようにみられる。この微隆起線がなければ、時期的には北大Ⅲ式とすることができるとは、微隆起線があるためにその時期的に特定することが難しい。このことについては、上記の北大式土器片との併行

関係を含め、さらに検討の余地があるものと思われる。

- ・墓墳については、その造構の長軸端を袋状に掘り込んで構築する形態は、縄文期（後北式期）、北大Ⅲ式期にもみられるが、擦文期は不明である。また、墓墳の周辺に黒曜石のフレイク、チップが蒔かれる特徴がみられる。
- ・黒曜石は必ず自然面を残すラウンドスクレイパ（指指状円形搔器）であり、北大Ⅲ式期、擦文期と重なる地区に集中する特徴があり、造構に伴わず、包含層からの出土例が多い。出土した黒曜石の中の1点は北海道十勝産であり、北方文化との交流が示唆される。
- ・出土した土師器は丸底を呈し、口縁部がやや外反し、赤彩されていることなど、器形・法量など、東北地方南部の南小泉式に相当すると思われる。その類例は、水沢市膳性遺跡G15住居跡出土の土器群、水沢市西大畑遺跡C f 53住居跡などにみられる。須恵器の甕と無蓋高環についても同様の時期に相当するものと思われる。

佐藤信行氏により指摘された東北地方における後北式土器の分布は、近年では新潟県でも発見されている。その分布圏の拡大に伴い、後北式土器の分布と北大式土器との関連、土器編年、地域性などについて様々な論議が行われている。近年の研究では後北C₂・D式土器の出土は、特に青森県と岩手県にその類例が多いことが指摘されている。

後北式土器とともに、北大式土器、古式土師器が共伴する出土例が増加している。北大式土器は仁沢瀬Ⅱ遺跡のみならず、少数ではあるが出土例がある。1985年に調査された滝沢村高柳遺跡では古墳時代末期から奈良時代初期の竪穴住居跡が検出され、突瘤底を持つ北大Ⅲ式とともに古式土師器が出土している。1988年に調査された二戸市大久保遺跡では隆起線文と円孔刺突文をもつ北大Ⅰ式土器が出土している。1991年に調査された大日向Ⅱ遺跡でも隆起線文をもつ北大Ⅰ式土器が出土している。

3. むすびにかえて

東北地方の北大式土器の分布は、後北C₂・D式土器の分布とほぼ重なるが、北大式土器の出土例は極めて少ない。後北C₂・D式土器に続く北大式土器の分布は、北海道と北東北地方との交流を研究する資料として極めて貴重である。それに後続すると考えられる擦文文化の成立過程において、甕・壺の頸部や杯の体部に鋸歯文、格子目文などが施された土師器は、北大式土器の施文方法と極似するものがある。

仁沢瀬Ⅱ遺跡と前後する遺跡の時期(3世紀～7世紀)を概観すると、異論はあるが、次のようにまとめられるであろう。寒川Ⅱ遺跡—永福寺山遺跡—仏沢Ⅲ遺跡—大石渡遺跡—仁沢瀬Ⅱ遺跡—田久保下遺跡—谷地前C遺跡—岩崎台地遺跡という図式が考えられる。

以上、古墳時代中期の土塚について、形態、土器の埋納方法、周辺からの出土遺物と遺構との関連について概観した。仁沢瀬Ⅱ遺跡から検出された後北式土器、北大式土器、土塚の形態、黒曜石製拇指状円形搔器の散布状況などは、北海道の縄文文化期の葬制と共通性がみられる。遺構内から出土した土器は、土師器環・甕の形状が東北地方南部の影響を強く受けて模倣して作られている。このことから、仁沢瀬Ⅱ遺跡は、祭祀に関係する場であったことが確認され、さらに、北東北地方の古墳時代の葬制を研究する上で貴重な資料が発見された。土師器環と甕が東北地方南部の特徴をもち、一方では後北式土器、黒曜石など北海道と共通する遺物が出土し、南と北の文化の接点として注目される。

〈引用・参考文献〉

- 桐生正一 (1986) : 『耳取遺跡』 岩手県滝沢村文化財調査報告書第3集 滝沢村教育委員会
- 桐生正一 (1987) : 『高森遺跡』 岩手県滝沢村文化財調査報告書第6集 滝沢村教育委員会
- 桐生正一 (1987) : 『高柳遺跡』 岩手県滝沢村文化財調査報告書第7集 滝沢村教育委員会
- 桐生正一 (1989) : 『滝沢村内遺跡 詳細分布調査報告書Ⅰ』 岩手県滝沢村文化財調査報告書第10集
滝沢村教育委員会
- 桐生正一 (1990) : 『滝沢村内遺跡 詳細分布調査報告書Ⅱ』 岩手県滝沢村文化財調査報告書第12集
滝沢村教育委員会
- 桐生正一 (1991) : 『滝沢村内遺跡 詳細分布調査報告書Ⅲ』 岩手県滝沢村文化財調査報告書第17集
滝沢村教育委員会
- 桐生正一 (1992) : 『滝沢村内遺跡 詳細分布調査報告書Ⅳ 滝沢の遺跡』
岩手県滝沢村文化財調査報告書第21集 滝沢村教育委員会
- 桐生正一 (1992) : 『新聞記事で見る滝沢村埋蔵文化財十年の歩み』 滝沢村教育委員会
- 熊谷常正・小田野哲恵・高橋信雄 (1982) : 『岩手の土器』 岩手県立博物館
- 工藤利幸 (1988) : 『大久保・西久保遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第121集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 工藤雅樹 (1991) : 『考古学からみた古代蝦夷の文化』 『みちのく古代蝦夷の世界』 山川出版社
- 小林 克 (1986) : 『寒川Ⅱ遺跡』 秋田県埋蔵文化財調査報告書第167集 秋田県埋蔵文化財センター
- 小林 克 (1991) : 『農耕社会に南下した狩猟採集民』 『月刊考古学ジャーナル』 NO. 341
ニュー・サイエンス社
- 佐藤信行 (1984) : 『宮城県内の北海道系遺物』 『宮城の研究 考古学篇』 清文堂
- 斎藤邦雄 (1987) : 『古館山』 野田村文化財報告書 野田村教育委員会
- 斎藤邦雄 (1992) : 『大日向Ⅱ遺跡』 岩手考古学会研究発表資料 岩手考古学会

- 西進寺 健 (1971)：「いわゆる『北大式』省察野帳」古代第69・70号 早稲田大学考古学会
- 西進寺 健 (1979)：『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書
千歳市教育委員会
- 佐々木嘉直 (1989)：『源道遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書139集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 鳥 隆 (1981)：『西大畑遺跡』『東北縦貫自動車道関係埋文調査報告書Ⅱ』岩手県文化財調査報告書第60集
岩手県教育委員会
- 園部真幸・北沢実・高橋豊彦 (1981)：『元江別1遺跡』『元江別遺跡群』江別市文化財調査報告書Ⅲ
北海道江別市教育委員会
- 高橋信雄・佐々木勝・中村英俊 (1991)：『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』
岩手県文化財調査報告書第90集 岩手県教育委員会
- 高橋信雄・高橋典右衛門 (1991)：『北海道の縄文文化と東北』
『北からの視点』（日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム資料集）日本考古学協会
- 高橋信雄・高橋典右衛門 (1991)：『北海道の縄文文化と東北』『日本考古学協会1991年度大会研究発表要旨』
（日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム資料集）日本考古学協会
- 高橋 学 (1992)：『田久保下遺跡』『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
秋田県埋蔵文化財調査報告書第220集 秋田県埋蔵文化財センター
- 高橋典右衛門 (1982)：『水沢市勝性遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第34集
（財）岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋典右衛門 (1990)：『岩崎台地遺跡群』『平成2年度発掘調査略報』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第159集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 千代 肇 (1984)：『縄文文化』考古学ライブラリー25 ニュー・サイエンス社
- 千代 肇 (1984)：『縄文文化の生活様式』考古学ライブラリー29 ニュー・サイエンス社
- 平井 進 (1992)：『上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第177集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 藤木 強 (1982)：『縄文文化概論』『縄文文化の研究 縄文・南東文化』雄山閣出版
- 目黒吉明他 (1980)：『母畑地区遺跡発掘調査報告（Ⅴ）』福島県文化財調査報告書第85集
福島県教育委員会（財）福島県文化センター
- 山岸良二編 (1991)：『北海道における縄文時代の墳墓』『原始・古代日本の墓制』同成社
- 横山英介 (1990)：『縄文文化』考古学ライブラリー59 ニュー・サイエンス社
- 吉田義昭 (1972)：『永福寺山道跡』『目で見る盛岡今と昔』郷土資料写真集第14集 盛岡市中央公民館

写 真 图 版



近景(西から)



近景(東から)



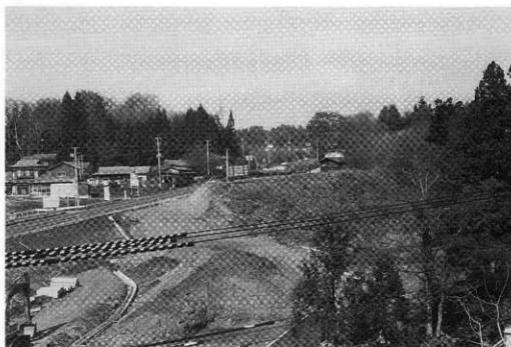
ⅠA・ⅠB区近景(西から)



ⅠA・ⅠB区近景(南から)



■A・■B区遠景(西から)



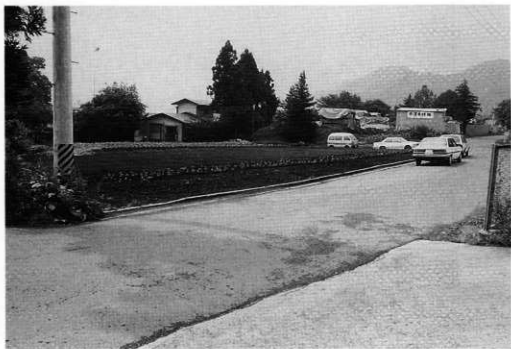
■C区遠景(東から)



■C区近景(北東から)



■C区完掘(西から)



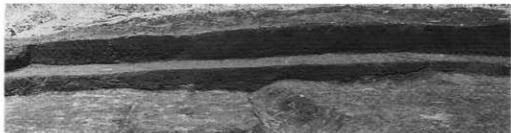
近景(北西から)



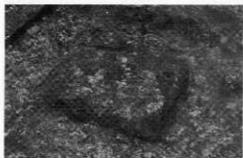
近景(東から)



■ C2b住居跡



断面

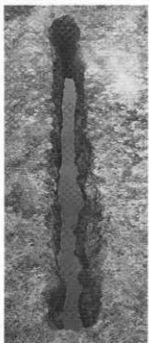


炉¹平面

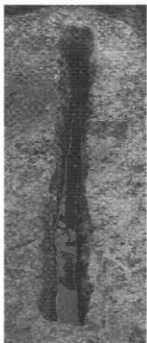


炉断面

写真図版6 ■ C2b住居跡



I A16b陥し穴



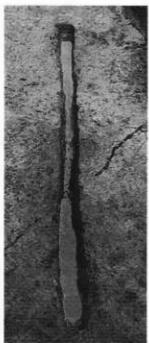
I A17b陥し穴



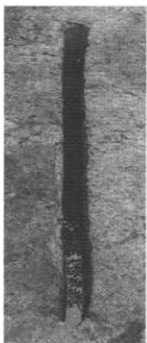
I A16b陥し穴断面



I A17b陥し穴断面



I A14d陥し穴



I A13f陥し穴



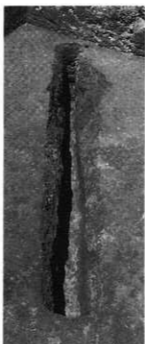
I A14b陥し穴断面



I A13f陥し穴断面



Ⅰ B9a陥し穴



Ⅰ B7b陥し穴



Ⅰ B9a陥し穴断面



Ⅰ B7b陥し穴断面



Ⅰ A3f陥し穴



Ⅰ A2g陥し穴



Ⅰ A3f陥し穴断面



Ⅰ A2g陥し穴断面

写真図版8 陥し穴状遺構(2)



Ⅱ A3h-1陥し穴



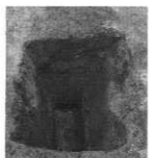
Ⅱ A3h-2陥し穴



Ⅱ B3g陥し穴



断面



断面



断面



陥し穴群



陥し穴群

写真図版9 陥し穴状遺構(3)



■ B3C-1陥し穴



■ B3C-2陥し穴



■ B3d陥し穴



断面



断面



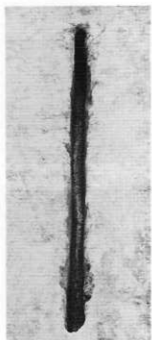
断面



陥し穴群



調査風景



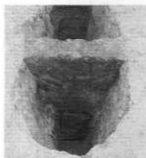
Ⅱ D2b陥し穴



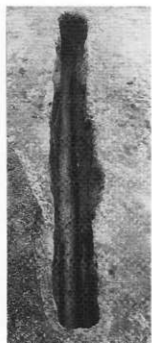
Ⅱ D2d陥し穴



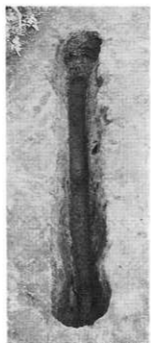
Ⅱ D2b陥し穴断面



Ⅱ D2d陥し穴断面



Ⅱ D4d陥し穴



Ⅱ D3e陥し穴

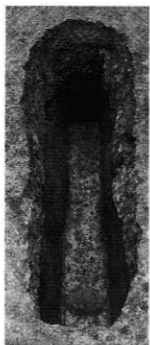


Ⅱ D4d陥し穴断面



Ⅱ D3e陥し穴断面

写真図版11 陥し穴状遺構(5)



■ B5f陥し穴



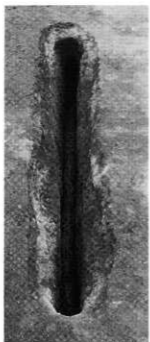
■ C4e陥し穴



■ B5f陥し穴断面



■ C4e陥し穴断面



■ C4f陥し穴



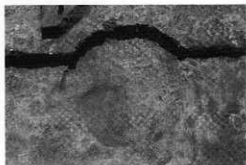
■ C5i陥し穴



■ C4f陥し穴断面



■ C5i陥し穴断面



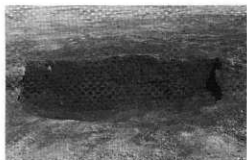
■ C2e土壤



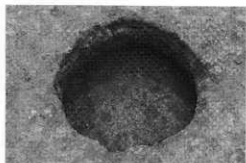
■ C2e土壤断面



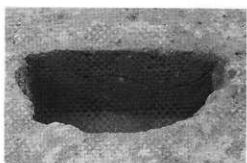
■ C3e-1土壤



■ C3e-1土壤断面



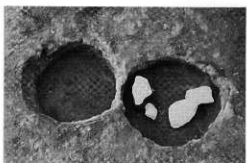
■ C3e-2土壤



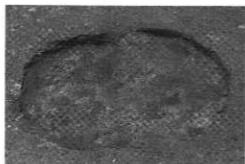
■ C3e-2土壤断面



■ C2e-1·3e-2土壤群



■ C3h-1·3h-2土壤群



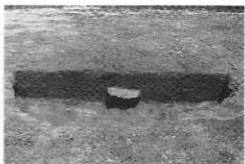
■ C4f土壤



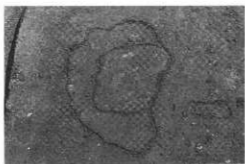
■ C4f土壤断面



■ C2g土壤



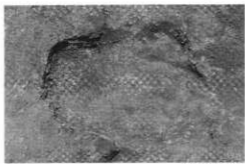
■ C2g土壤断面



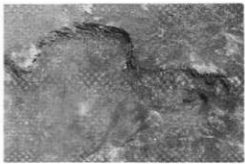
■ C4g-1土壤



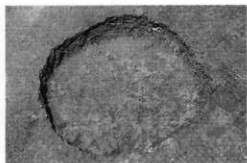
■ C4g-1土壤断面



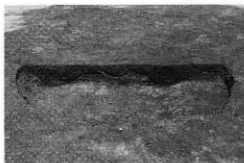
■ C4g-1土壤



■ C4g-1-4g-4土壤



■ C4g-2土壤



■ C4g-2土壤断面



■ C4g-3土壤



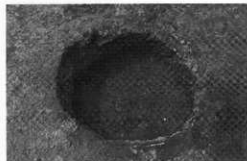
■ C4g-3土壤断面



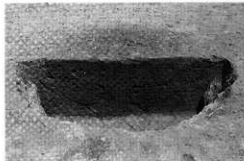
■ C4g-4土壤



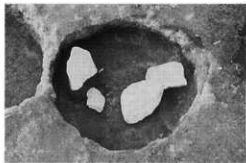
■ C4g-4土壤断面



■ C3h-1土壤



■ C3h-1土壤断面



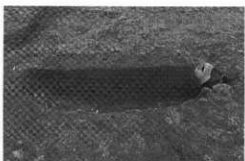
■ C3h-2土塊



■ C3h-2土塊断面



■ C4h土塊



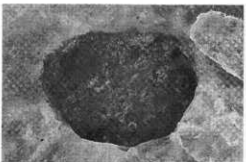
■ C4h土塊断面



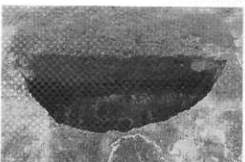
■ C4h土塊復元



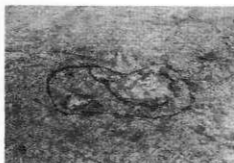
■ C4h土塊復元



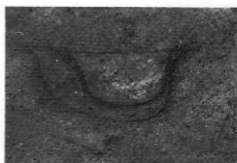
■ C5h土塊



■ C5h土塊断面



■ A3C焼土



■ A3f焼土



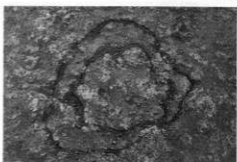
断面



断面



■ C5c焼土



■ C3i焼土



断面



断面



調査風景

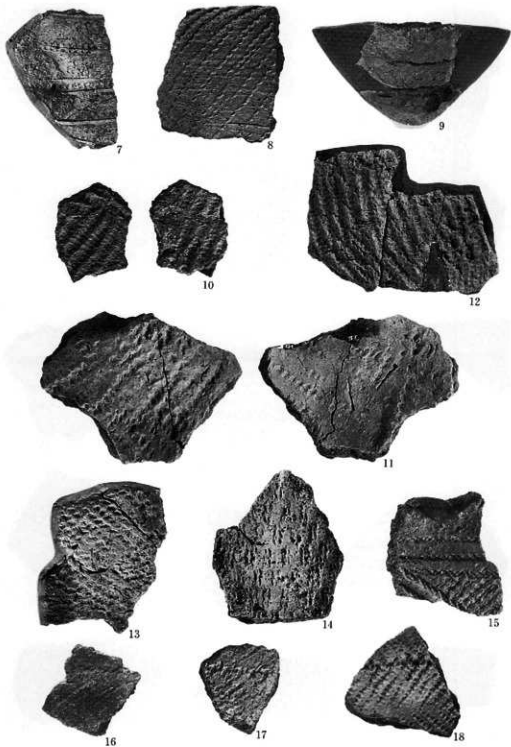


調査風景



- 1 ■ C2e土壤
- 2・3 ■ C3e-2土壤
- 4 ■ C4g-1土壤
- 5・6 ■ C4h土壤

写真図版18 遺構内出土遺物 土器(1)



写真図版19 遺構外出土遺物 土器(2)



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29

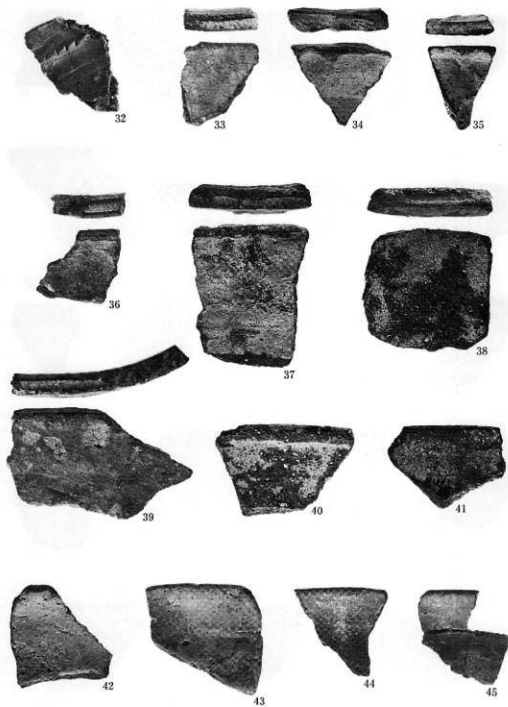


30

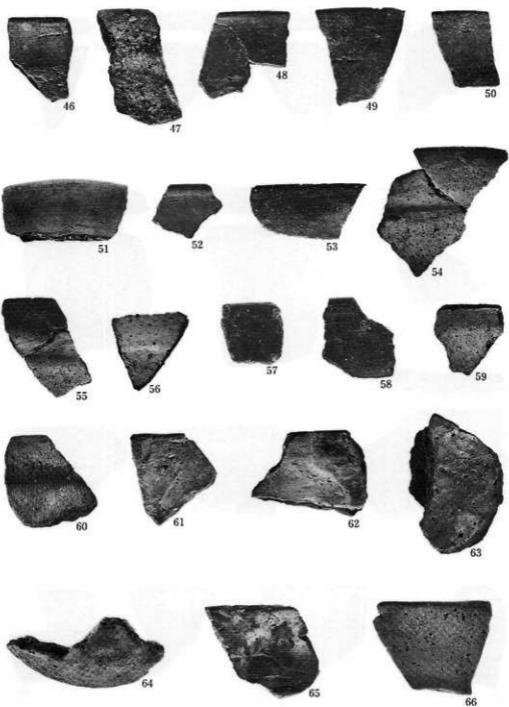


31

写真図版20 遺構外出土遺物 土器(3)



写真図版21 遺構外出土遺物 土器(4)



写真図版22 遼朝外出土遺物 土器(5)



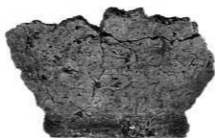
67



69



68



70



71



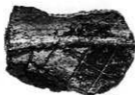
72



73



74



75

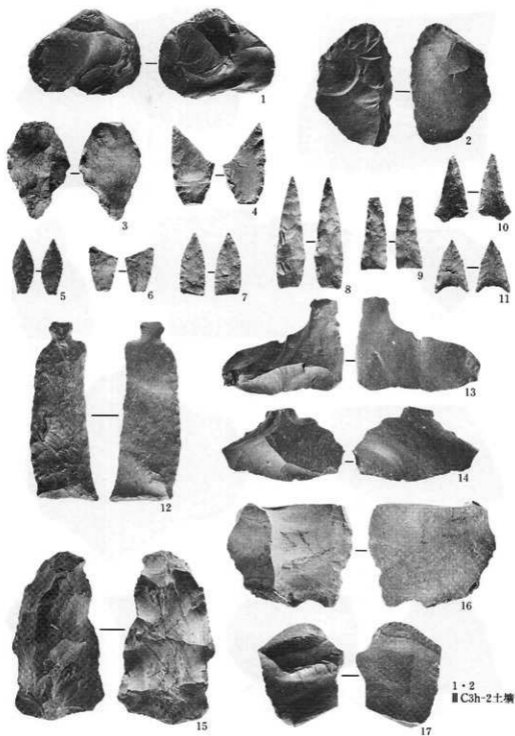


76

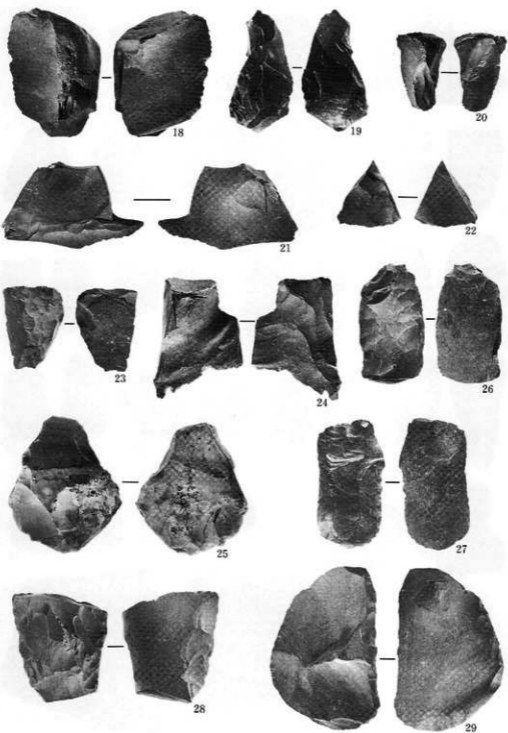


77

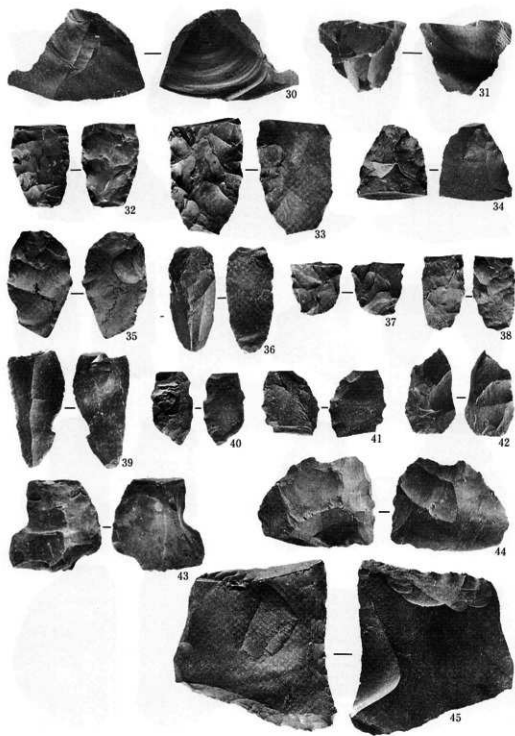
写真図版23 遺構外出土遺物 土器(6)



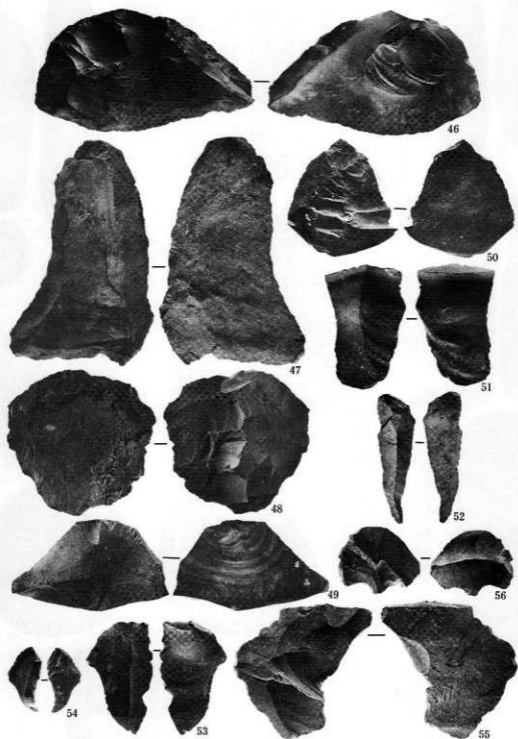
写真図版24 遺構内・遺構外出土遺物 石器(1)



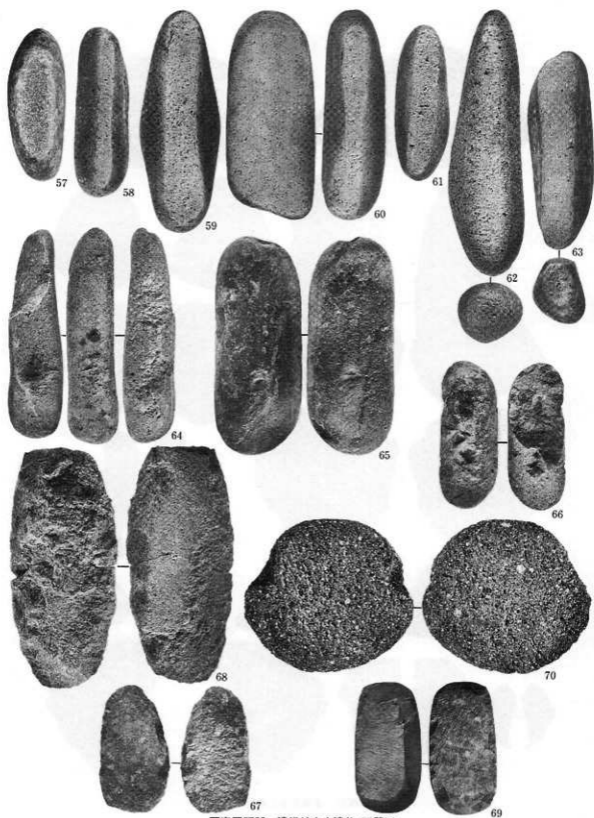
写真図版25 遺構外出土遺物 石器(2)
 — 117 —



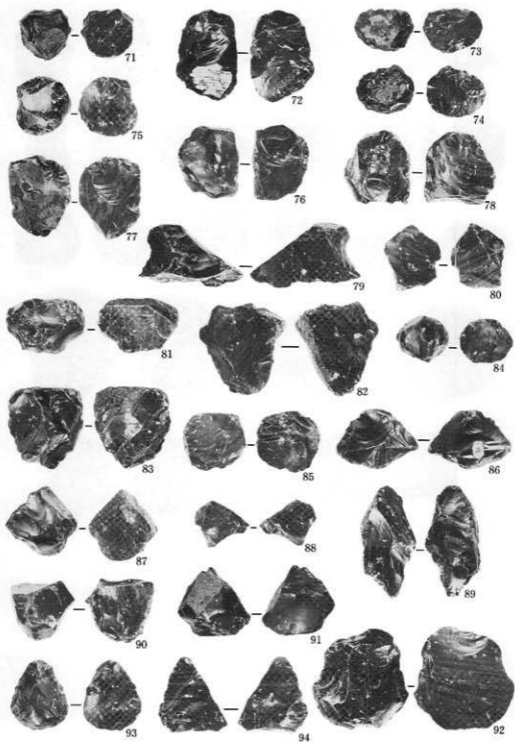
写真図版26 遺構外出土遺物 石器(3)



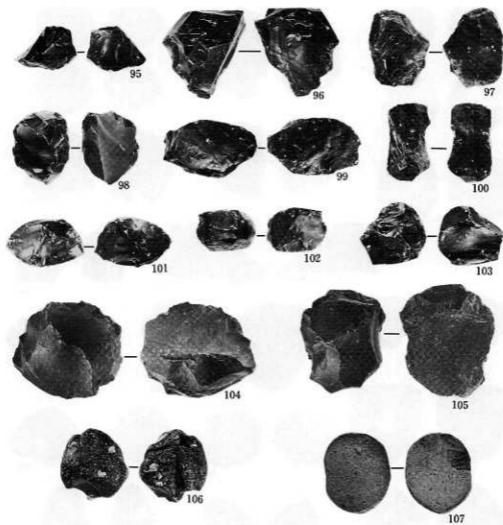
写真図版27 遺構外出土遺物 石器(4)



写真図版28 遺構外出土遺物 石器(5)



写真図版29 遺構外出土遺物 石器⑥



写真図版30 遺構外出土遺物 石器(7)・石製品

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼 小笠原 喜 一
副所長 高橋 敬 明

[管 理 課]

管理課長(兼) 高橋 敬 明
課長補佐 高森 岡 陽 一
主 事 佐 藤 理

嘱 託
" 技 士
運 兼 技 員

根 橋 文 一
吉 田 十 次
佐 藤 春 男

[調 査 課]

調査課長 村 上 康 昭
課長補佐 鈴 木 恵 治
" 三 浦 謙 一
主任文化財 高橋 興 右衛門
専門調査員 工 藤 利 幸
" 中 川 重 紀
" 藤 高 敏 義 男
" 高 橋 義 正 介
" 高 渡 辺 洋 一
" 佐々木 清 文
" 斎 藤 実 隆
" 千 葉 孝 雄
" 斎 藤 博 司
" 東 海 林 幹 弘
" 佐々木 村 均
" 川 鈴 木 貞 行
" 伊 東 邦 格
" 斎 藤 敏 雄 明
" 神 佐々木 信 一
" 小 原 眞 一
" 酒 井 義 宗 孝

文 化 財
專 門 調 査 員
" "
" "
" "
" "
" "
" "
" 財
" 附
" 員
期 專 門 調 査 員

松 本 建 速
笹 平 克 子
花 坂 政 博
佐々木 昭 務
金 田 子 昭 彦
演 田 柴 宏
羽 架 直 人
星 木 田 雅 之
高 鎌 田 勉
鎌 田 部 勝 則
阿 千 葉 博 悟
熊 谷 信 一 郎
新 倉 口 博 英
山 内 田 透 磨
柳 田 中 元 明
菅 原 敬 悦
工 藤 敏 剛 可
高 溜 橋 英 樹
佐 藤 修 浩 二 郎
一

[資 料 課]

資料課長 村 松 義 夫
文化財 高 橋 一 浩
専門調査員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第185集

仁沢瀬遺跡群掘調査報告書

国道46号稻荷前バイパス関連遺跡発掘調査

印刷 平成5年3月25日

発行 平成5年3月30日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県盛岡市下板間11字高屋敷185

TEL (0196) 38-9001

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020 盛岡市上田一丁目6-49

TEL 0196-53-4151
